

丹波市

平松八幡神社窯跡群  
平松古墳群  
石才大池遺跡

— 一般国道483号春日和田山道路事業Iに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007年3月

兵庫県教育委員会

丹波市

平松八幡神社窯跡群  
平松古墳群  
石才大池遺跡

— 一般国道483号春日和田山道路事業Ⅰに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007年3月

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は兵庫県丹波市春日町に所在する「平松八幡神社窟跡群」「平松古墳群」「石才大池遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は北近畿豊洲自動車道春日和田山道路Ⅰに伴うものである。国土交通省近畿地方整備局兵庫県国道工事事務所の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を実施した。
3. 遺構実測は調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測、製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

遺跡名	委託者名
平松古墳群	(株)ジオテクノ関西
平松八幡神社窟跡群	(株)パスコ
石才大池遺跡	(株)ジェクト

4. 写真撮影は、遺構の空中写真を下表のとおり外部委託し、その他の遺構は調査員が撮影した。
5. 遺物の撮影は(株)タニグチフォトと(株)アコードに委託した。
6. 金属器の保存処理は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
7. 本書の第3図「周辺の遺跡」は国土地理院発行50,000分の1地勢図(「福知山」「篠山」)を使用した。
8. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基とした。
9. 本書の執筆は本文目次に記したとおり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の森内秀造、中川渉、鈴木敬二、久保弘幸(現兵庫県立歴史博物館)が分担し、本書の編集は佐々木哲子の補助を得て森内秀造、鈴木敬二が行った。
10. 発掘調査と整理作業で得られた遺物、写真、実測図などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて保管している。
11. 発掘調査にあたっては春日町教育委員会(当時)、整理作業にあたっては丹波市教育委員会に多大なるご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。



平松八幡神社窯跡群 1号窯・6号窯 出土土器



平松八幡神社窯跡群 2号A窯 窯体出土土器



平松八幡神社窯跡群 3号窯出土土器



平松八幡神社窯跡群 4号A・B窯出土土器



平松古墳群 4号墳出土土器



平松古墳群 4号墳出土土器



石才大池遺跡 出土香炉

## 目次

第1章 調査の経過	(鈴木敬二)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 平松八幡神社窟跡群の調査経過		1
第3節 平松古墳群の調査経過		3
第4節 石才大池遺跡の調査経過		3
第5節 整理作業の経過と体制		4
第2章 遺跡の位置と環境	(鈴木)	5
第1節 地理的環境		5
第2節 歴史的環境		6
第3章 平松八幡神社窟跡群	(森内秀造)	9
第1節 窟跡群の立地		9
第2節 6号窟・1号窟		10
第3節 2号A窟(旧2号窟)・2号B窟(S X201)		15
第4節 3号窟		19
第5節 4号A窟(旧4号窟)・4号B窟(S X401)		24
第6節 平松八幡神社窟跡群 まとめ		27
第4章 平松古墳群	(久保弘幸)	33
第1節 概要		33
第2節 遺構と遺物		33
第3節 小結		44
第5章 石才大池遺跡	(中川 渉)	45
第1節 立地		45
第2節 東区の遺構と遺物		45
第3節 西区の遺構と遺物		49
第4節 まとめ		52

## 挿図目次

第1図	平松八幡神社窯跡群 確認調査のトレンチ配置図	2
第2図	平松八幡神社窯跡群 調査範囲図	5
第3図	遺跡の位置図	5
第4図	遺跡の位置図	5
第5図	周辺の遺跡	8
第6図	平松八幡神社窯跡群 窯跡群全体図	9
第7図	1号窯・6号窯地形図	10
第8図	6号窯(1号窯前庭部) 遺物出土状況図	11
第9図	6号窯 窯体検出図	11
第10図	1号窯 窯体図	12
第11図	2号A窯 窯体図	15
第12図	2号窯・S X201 全体図	16
第13図	2号A・B窯 確認調査3トレンチ出土遺物	18
第14図	3号窯 窯体遺物出土状況図・土層断面図	20
第15図	3号窯 窯体平面図・縦断面図	21
第16図	3号窯 窯体構築材・横断面	22
第17図	4号A窯・SX401 全体図	24
第18図	4号A窯 窯体内土層縦断面図	25
第19図	4号A窯 窯体図	25
第20図	兵庫県煙管状窯分布図	28
第21図	兵庫県下の煙管状窯形態図	28
第22図	神出窯跡群堂ノ前支群出土突帯壺	30
第23図	煙管状窯焼成器種	30
第24図	平松古墳群 調査区位置図	34
第25図	平松4号墳 墳丘実測図	35
第26図	墳丘土層断面図	36
第27図	墓室内遺物出土状況図	37
第28図	主体部 平面図・断面図	38
第29図	棺内遺物出土状況①(南側小口付近)	39
第30図	棺内遺物出土状況②(南側小口付近)	40
第31図	石才大池遺跡 調査区配置図	46
第32図	4トレンチ平面図・断面図	47
第33図	4トレンチ出土土器	47
第34図	3・6トレンチ平面図・断面図	48
第35図	土坑S K04	49
第36図	土坑S K04出土香炉	50

第37図	土坑S K04出土香炉 <sup>1</sup> 細部写真	50
第38図	土坑S K05・06	51
第39図	3・6トレンチ出土土器	52

## 表目次

表1	平松八幡神社窯跡群 出土土器一覧表	53～56
表2・1	平松4号墳 出土土器一覧表	57
表2・2	平松4号墳 出土金属器一覧表	58

## 巻頭カラー図版目次

巻頭図版1	平松八幡神社窯跡群	1号窯・6号窯出土土器	巻頭図版3	平松古墳群	4号墳出土土器・鉄器
	平松八幡神社窯跡群	2号A窯 窯体出土土器		平松古墳群	4号墳出土土器
巻頭図版2	平松八幡神社窯跡群	3号窯出土土器	巻頭図版4	石才大池遺跡	出土香炉
	平松八幡神社窯跡群	4号A・B窯出土土器			

## 遺物図版目次

図版1	平松八幡神社窯跡群	1号窯	窯体・6号窯(1号窯前庭部)出土遺物
図版2	平松八幡神社窯跡群	1号窯	灰原出土遺物
図版3	平松八幡神社窯跡群	1号窯	灰原出土遺物
図版4	平松八幡神社窯跡群	2号A窯・S X 201	出土遺物
図版5	平松八幡神社窯跡群	3号窯	窯体出土遺物
図版6	平松八幡神社窯跡群	3号窯	窯体出土遺物
図版7	平松八幡神社窯跡群	3号窯	灰原出土遺物
図版8	平松八幡神社窯跡群	3号窯	灰原出土遺物
図版9	平松八幡神社窯跡群	3号窯	灰原出土遺物
図版10	平松八幡神社窯跡群	4号A窯・S X 401	出土遺物
図版11	平松八幡神社窯跡群	4号A窯・S X 401	他出土遺物
図版12	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 土器
図版13	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 金属器(馬具)
図版14	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 金属器(鉸具・辻金具・鉄刀)
図版15	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 金属器(鉄鍬)
図版16	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 金属器(鉄鍬)
図版17	平松古墳群	4号墳	主体部出土遺物 金属器(鉄鍬・刀子)

## 遺物写真図版目次

遺物写真図版1	平松八幡神社	1号窯・6号窯	窯体出土土器
遺物写真図版2	平松八幡神社	1号窯・6号窯	灰原出土土器
遺物写真図版3	平松八幡神社	2号A窯	窯体出土土器
遺物写真図版4	平松八幡神社	S X 201	出土土器
遺物写真図版5	平松八幡神社	3号窯	窯体出土土器
遺物写真図版6	平松八幡神社	3号窯	窯体出土土器
遺物写真図版7	平松八幡神社	3号窯	灰原出土土器
遺物写真図版8	平松八幡神社	3号窯	灰原出土土器

遺物写真図版9	平松八幡神社3号窯 灰原出土土器
遺物写真図版10	平松八幡神社4号A窯 窯体出土土器
遺物写真図版11	平松八幡神社4号A窯 窯体・S X401出土土器
遺物写真図版12	平松八幡神社S X401(4号B窯 灰原)出土土器
遺物写真図版13	4号墳 主体部出土土器
遺物写真図版14	4号墳 主体部出土土器
遺物写真図版15	4号墳 主体部出土鉄器(馬具)
遺物写真図版16	4号墳 主体部出土鉄器(鉸具・辻金具・鉄刀)
遺物写真図版17	4号墳 主体部出土鉄器(鉄鍬)
遺物写真図版18	4号墳 主体部出土鉄器(鉄鍬)
遺物写真図版19	4号墳 主体部出土鉄器(鉄鍬・刀子)

## 遺構写真図版目次

遺構写真図版1	(上)平松八幡神社窯跡群遠景1 (下)平松八幡神社窯跡群遠景2
遺構写真図版2	(上)平松八幡神社窯跡群全景1 (下)平松八幡神社窯跡群全景2
遺構写真図版3	平松八幡神社1号窯・6号窯 (上)1号窯検出状況(中)1号窯 窯体内遺物検出状況(下)1号窯 窯体内縦断セクション
遺構写真図版4	平松八幡神社1号窯・6号窯 (上)1号窯前庭部(6号窯上層)遺物出土状況 (中左)1号窯前庭部(6号窯上層)検出状況(中右)1号窯前庭部(6号窯上層)横断セクション (下左)1号窯前庭部(6号窯上層)遺物除去後(下右)1号窯前庭部(6号窯上層)炭層除去後 遺構写真図版5 平松八幡神社1号窯・6号窯 (上)6号窯 検出状況(西から)(中)6号窯 検出状況(東から) (下)1号窯灰原 縦断セクション(南から)
遺構写真図版6	平松八幡神社2号A窯・S X201(2号A・B窯) (上)2号A窯窯体 検出断面(東から)(中)2号A窯前庭部・S X201検出断面(西から) (下)2号A窯・S X201完掘状況(北から)
遺構写真図版7	平松八幡神社2号A窯 (上)2号A窯 窯体横断セクション(北から)(中)2号A窯 窯体遺物検出状況(北から) (下)2号A窯 窯体完掘状況(北から)
遺構写真図版8	平松八幡神社3号窯 (上)3号窯 窯体検出状況(東から)(中)3号窯 窯体遺物出土状況(東から) (下)3号窯 窯体完掘状況(東から)
遺構写真図版9	平松八幡神社3号窯 (上)3号窯窯体 断ち割り状況(東から)(中)3号窯 還元面除去及び焚口赤褐色土断ち割り (下左)焚口左側壁 赤褐色土断ち割り(下右)焚口右側壁 赤褐色土断ち割り

- 遺構写真図版10 平松八幡神社3号窯  
 (上)3号窯窯体 縦断セクション(北から)(上)3号窯窯体 横断セクション(東から)  
 (中上左)3号窯床面 断ち割り(A-A'ライン)(中上右)3号窯床面 断ち割り(C-C'ライン)  
 (中下左)3号窯床面 断ち割り(a-a'ライン)(中下右)3号窯床面 断ち割り(c-c'ライン)  
 (下)3号窯床面 炭化材検出状況(断面)(下)3号窯床面 炭化材検出状況(還元割剥き取り後)
- 遺構写真図版11 平松八幡神社4号A窯  
 (上)4号A窯 検出状況(南から)(中)4号A窯 窯体縦断セクション(東から)  
 (下)4号A窯 窯体縦断セクション検出状況(東から)
- 遺構写真図版12 平松八幡神社4号A窯  
 (上)4号A窯 中央横断セクション窯体内石材出土状況1  
 (中)4号A窯 窯体内(奥壁)石材出土状況2(南から)  
 (下)4号A窯 中央縦断セクション検出石材出土状況3(東から)
- 遺構写真図版13 平松八幡神社4号A窯  
 (上)4号A窯 完掘状況1(下)4号A窯 完掘状況2
- 遺構写真図版14 平松八幡神社4号A窯・S X 401(4号B窯灰原)  
 (上)S X 401(4号B窯灰原)検出状況1(東から)  
 (中)S X 401(4号B窯灰原)検出状況2(東から)(下)S X 401(4号B窯灰原)完掘状況
- 遺構写真図版15 平松4号墳  
 (上)平松古墳群調査地点遠景(東から)(下)平松古墳群調査地点遠景(南西から)
- 遺構写真図版16 平松4号墳  
 (上)調査地遠景(南から)(中)調査前状況(南から)(下)墳丘検出(南から)
- 遺構写真図版17 平松4号墳  
 (上)中心主体全景(北から)(下)中心主体全景(南から)
- 遺構写真図版18 平松4号墳  
 (上)中心主体棺上遺物(北から)(中)中心主体棺内遺物 南小口付近(南から)  
 (下)中心主体棺内遺物 南小口付近(西から)
- 遺構写真図版19 平松4号墳  
 (上)中心主体棺内遺物 南小口付近(北から)  
 (中)中心主体棺内遺物 北小口付近(西から)(下)墓坑完掘状況(南から)
- 遺構写真図版20 石才大池遺跡  
 (上)石才大池遺跡 航空写真(北から)  
 (中左)調査全景(東から)(中右)4トレンチ上層(北から)  
 (下左)4トレンチ下層(北から)(下右)4トレンチ下層 土師器出土状況
- 遺構写真図版21 石才大池遺跡  
 (上)3トレンチ(南から)(中)6トレンチ(南から)(下)6トレンチS K 04(東から)
- 遺構写真図版22 石才大池遺跡  
 (上)6トレンチS K 04断面(南から)(中)S K 04香炉出土状況(東から)  
 (下)S K 04香炉出土(東から)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

本報告所に掲載する3遺跡はすべて、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道工事事務所が実施する北近畿豊岡自動車道 春日和田山道路-1の工事着手に先行して発掘調査を実施した。春日和田山道路-1は近畿自動車教習線と一般国道9号及び427号との連結を強化し広域交通を分担することにより、生活利便性の向上を目的とし、丹波市春日町野村から同市青垣町遠坂間の24kmについて、平成2年度に事業化され、平成18年度に開通した。

平成3年4月、兵庫県教育委員会は建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所（当時）（以下、兵庫国道工事事務所と表記）の依頼を受け、埋蔵文化財分布調査を行った。分布調査では計画路線上に平成3年4月15日から19日の5日間にわたって踏査し、遺跡の発見及び遺物の収集に努めた。また予定地内の水田は大部分がすでに現場整備済であったため、地元の氷上郡教育委員会および氷上町教育委員会（いずれも当時）からは現場整備に伴う埋蔵文化財調査結果について情報を入手した。これらの情報を整理した結果、丹波市内において計41地点の埋蔵文化財がみつかった。平松八幡神社窯跡群はこれら41地点のうちの1地点（No.7地点）として把握され、確認調査の対象とされた。また平松古墳群と石才大池遺跡については、後の分布調査、確認調査などの際にその所在が判明し、発掘調査の対象とした。

## 第2節 平松八幡神社窯跡群の調査経過

### 1. 確認調査（遺跡調査番号：950371）

#### (1) 調査に至る経緯

平成3年度の分布調査の際、丹波市春日町平松地内で須恵器および窯壁の破片が濃密に散布している地点を発見した（No.7地点）。須恵器を焼成した窯跡が存在する可能性があるかと判断されたため、兵庫県教育委員会はこの地点の確認調査を、兵庫国道工事事務所の依頼に基づき、平成8年1月17日から同3月22日にかけて実施した。

#### (2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査期間：平成8年1月17日～3月22日

調査第1班 主 査：山下 史朗

技術職員：多賀 茂治

#### (3) 調査の方法

No.7地点は平松八幡神社南東側に位置する。調査対象範囲には、南から北方向に伸びる尾根を中心とし、尾根の東側に東向き斜面が、西側には北向き斜面が存在する。いずれの斜面にも須恵器窯の存在が予想されたため、それぞれの斜面を横断する方向に、幅1m、長さ30mの試掘トレンチを3本（1～3トレンチ）と、幅1m、20mの試掘トレンチ（4トレンチ）を設定し、人力により掘削を行った。

#### (4) 調査の結果

二つの斜面のうち、東向きの斜面に設けた2本の試掘トレンチで、須恵器窯を少なくとも3基検出した。検出したのは窯の焚き口および焼成部の一部分で、煙道部などは、後世の土地利用（耕作）の際に削平

されたと考えられる。出土したのは須恵器の杯・甕が大部分を占めており、時期は概ね11世紀代と考えられた。確認調査結果を受け、以後はNo.7地点を平松八幡神社窯跡群と呼称することとした。

## 2. 本発掘調査（遺跡調査番号：990003）

### (1) 調査の経過

平松八幡神社窯跡群は、平成7年度の確認調査の結果、約1,500㎡の本発掘調査が必要と判断された。この結果を踏まえ、兵庫県教育委員会は兵庫国道工事事務所の依頼に基づき、平松八幡神社窯跡群の本発掘調査を実施した。調査区は東向きの斜面上に立地している。調査区の西半部は南から北方向に伸びる尾根の東側急斜面で、5基の窯が所在する。また東半部は北東に広がる扇状地状の緩斜面で、広い範囲にわたり灰原を検出した。西半部については、窯を検出・掘削し、その検出状況や遺物出土状況を、写真撮影や実測により記録保存を行った。更に遺物を取り上げた後、窯本体の断ち割りをを行い、その断面から窯の構築状況や焼成状況等を観察した。一方、東半部の灰原については遺物の取り上げを主な作業とした。

### (2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査期間：平成11年6月8日～7月29日

調査第1班 主 査：平田 博幸

主 任：鈴木 敬二

研修員：大崎 晃司



第1図 平松八幡神社窯跡群 確認調査のトレンチ配置図



第2図 平松八幡神社窯跡群 配置範囲図

## 第3節 平松古墳群の調査経過

### 1. 発見の経緯

平成3年4月に兵庫県教育委員会が実施した分布調査では、路線の用地境界が明瞭ではなかったため、用地境界付近の埋蔵文化財分布状況に一部不明な箇所があった。路線幅確定後の平成9年12月19日に実施した分布調査では、同市春日町平松地内における道路用地の北側境界付近で、古墳6基の所在を確認した。6基の古墳は東半部に2基と西半部に4基の2群に分かれている。西側の4基の古墳のうち、最も南に位置する1基（平松4号墳）が道路用地内に含まれることが判明した。平松4号墳は現地で保存可能かどうか兵庫国道事務所により検討が行われたが、道路の設計上古墳全体を保存することは不可能であると判明したため、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施することとなった。

### 2. 本発掘調査（遺跡調査番号：980169）

#### (1) 調査の経過

兵庫県教育委員会は兵庫国道工事事務所の依頼に基づき、平松4号墳の本発掘調査を実施した。調査期間は平成11年2月8日から同3月18日である。調査の開始時に墳丘の地形測量を行った後、墳頂部・墳丘斜面とも人力により表土の掘削を行い、その後は遺構検出に努めた。墳頂部では木棺墓を1基検出し、棺内の副葬品等として鉄鏝、馬具、鉄刀、須恵器蓋杯などが認められた。

#### (2) 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査期間：平成11年2月8日～3月18日

調査第1班 主 査：久保 弘幸

技術職員：山本 誠

研 修 員：守岡 克倫

## 第4節 石才大池遺跡の調査経過

### 1. 確認調査（遺跡調査番号：960100）

平成3年度の分布調査の結果、丹波市春日町石才で確認した遺物散布地（No.12地点）について埋蔵文化財が存在する可能性が認められたため、兵庫県教育委員会は確認調査を平成8年1月～3月に実施した。確認調査の実施にあたり、No.12地点の西側に隣接する谷間の平坦地に土器の散布を認めたため、この箇所を新たにNo.12-2地点とした。No.12-2地点については、兵庫国道事務所からの依頼に基づき、平成8年7～8月に確認調査を実施した。

### 2. 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査期間：平成8年6月4日～9月6日

調査第1班 主 任：中川 渉

技術職員：多賀 茂治

研 修 員：岡 昌秀

## 第5節 整理作業の経過と体制

出土遺物などの整理作業は、発掘調査時に監督員詰所における土器の洗浄作業から開始した。平成17年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において本格的な整理作業を開始し、平成18年度末の報告書刊行に至った。担当者は平松八幡神社窯跡群は森内秀造、平松古墳群は久保弘幸、石才大池遺跡は中川渉である。担当者の指示の下、非常勤嘱託員が作業を行った。なお整理作業を担当した非常勤嘱託員は以下のとおりである。

平成17年度：吉田優子、大仁亮子、西口由紀、藏幾子、荻野麻衣、宮野正子

平成18年度：佐々木馨子、増田麻子、杉本淳子、藤川紀子、豊田貞代

整理作業工程は以下のとおりである。

平成17年度：水洗い、ネーミング、接合補強、実測、復元、写真撮影、写真整理、金具器保存処理

平成18年度：図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

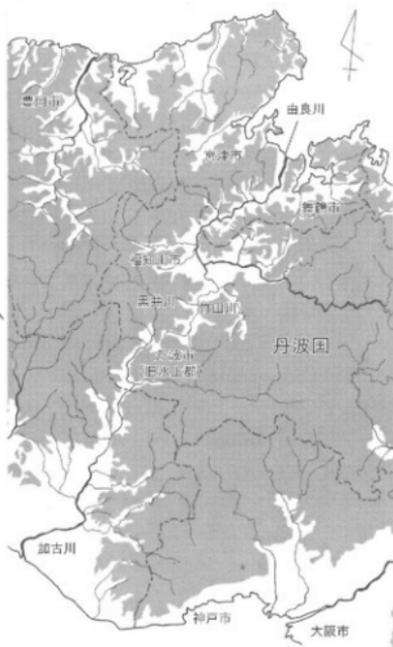
平松八幡神社窯跡群および平松古墳群は兵庫県北東部、丹波市春日町平松に所在し、石才大池遺跡は同市春日町石才に所在する。丹波市は平成16年（2004年）11月、旧水上郡内の町が合併して成立した。合併したのは旧水上郡春日町（以下、春日町と表記）のほか、市島町、氷上町、柏原町、青垣町、山南町の6町で、旧水上郡の範囲がそのまま現在の丹波市となった。

古代より氷上郡が属した丹波国は、当初は11郡からなっていたが、和銅6年（713年）以降に丹後国が分離し、氷上、多紀、桑田、船井、天田、何鹿の6郡となった。明治以降、氷上と多紀の2郡が兵庫県、他郡が京都府に編入された。平成の町の合併により氷上郡は丹波市、多紀郡は篠山市となった。

旧水上郡は地形上、北上して日本海に流れる竹田川水系を中心とした東部地域（春日町、市島町）と、南下して瀬戸内海に流れ込む加古川水系を中心とした西部地域（氷上町、青垣町、柏原町、山南町）に二分される。この二つの異なる水系の境界は丹波市氷上町石生付近で、標高95mという本州で最も標高の低い分水界（水分かれ）により隔てられている。



第3図 遺跡の位置図



第4図 遺跡の位置図

今回報告する3遺跡が所在する春日町は、周囲を標高300～500m級の山々に囲まれている。これらの山腹に端を発する竹田川は春日町の中央部を北上し、福知山付近で由良川と合流して日本海に至る。竹田川の支流である黒井川は、「水分かれ」付近から春日町内を東に流れ、竹田川に合流する。黒井川の南側にそびえる山塊の山腹に、平松八幡神社窯跡群(1)、平松古墳群(2)、石才大池遺跡(3)は所在する。

## 第2節 歴史的環境

ここでは平松八幡神社窯跡群と平松古墳群の両遺跡の歴史的背景として、古墳時代から古代を中心に、周辺地域の歴史的背景を概観する。

### 1. 旧石器時代～縄文時代

旧石器時代の遺跡では春日町の七日市遺跡(4)が著名である。A T下層から五千点以上の石器が発掘されている。縄文時代には春日町国領遺跡(10)で草創期の石器群が出土している。

### 2. 弥生時代

弥生時代には遺跡が急増する。市島町的場遺跡(74)、氷上町横田遺跡(55)からは弥生時代前期の土器が出土し、近隣に弥生時代前期の集落が存在すると考えられる。

七日市遺跡(4)は弥生時代の氷上盆地における拠点集落と考えられ、古墳時代前期まで集落が継続し、多くの竪穴住居および方形周溝墓、円形周溝墓などを検出した。七日市遺跡の東側に所在する野々間遺跡(8)では2口の銅鐻が出土し、七日市遺跡の南に隣り合う野村遺跡では銅剣形石剣が出土した。いずれも弥生時代の拠点集落である七日市遺跡で祭祀に用いられたものと考えられている。また春日町国領遺跡(10)は、七日市遺跡が一時衰退する弥生時代後期に全盛期を迎えている。市島町的場遺跡(74)、氷上町横田遺跡(55)は弥生時代後期の住居が検出され、氷上郡北東部地域では弥生時代を通じて断続的ながら集落が営まれていたことがわかる。加古川流域では氷上町犬岡遺跡(60)では弥生時代後期の土器と木製品が大量に出土し、近隣に集落が存在する可能性を示している。丘陵上に築かれた弥生墳墓の事例としては七日市遺跡北側に所在する東山墳墓群(23)がある。

### 3. 古墳時代

古墳時代前期には氷上町親王塚古墳(消滅)、山南町丸山1号墳がある。いずれも河川を望む要衝に築かれ、規模も抜きん出ている。丸山1号墳は全長48mの前方後円墳で、竪穴式石室などの複数埋葬主体には鏡、車輪石のほか、大量の鉄器が副葬されていた。親王塚古墳も古墳時代前期の前方後円墳と考えられ、三角縁三神三獣鏡が出土している。

他の前期・中期古墳としては、氷上町横田山古墳(54)および明治山古墳(59)が、丘陵上に築かれ箱形石棺を主体部を持つ古墳の事例である。柏原町では、おさんの森古墳群(44)は比較的大型の古墳で構成される。また山根2号墳(49)では竪穴式石室から銅鐻、鉄剣、鉄斧が出土している。市島町では竪穴式石室から瑛文鏡が出土した久良部1号墳(72)などがある。

古墳時代後期、春日町内には二間塚古墳(26)、稲荷大塚古墳(22)といった全長30m前後の前方後円墳が存在する。竹田川右岸には9基の木棺直葬墳からなる松ノ本古墳群(28)、木棺直葬と横穴式石室が混在する多利向山古墳(27)などが存在する。平松古墳群が位置する黒井川右岸には、やはり木棺直葬と横穴式石室が混在する火山古墳群(13)や、横穴式石室のみで構成される坂古墳群(31)などがある。

坂古墳群から南下し、氷上町内に入った位置にある親王塚北野古墳群(32)は約50基からなる群集墳で、

すべて横穴式石室を持つ。氷上町域では加古川上流域に由利百塚古墳群など100基以上の古墳より構成される大規模な群集墳が存在する。柏原町では、約40基の古墳からなる七ツ塚古墳群(48)や、横穴式石室から獣形鏡が出土した神田古墳群(43)、方格規矩鏡の出土が伝えられる堂刈坂古墳群(52)などが知られている。

集落としては、春日町域では七日市遺跡(4)は古墳時代初頭の集落遺跡であり窟穴住居群を検出していている。市島町三ツ塚遺跡(71)は、弥生後期から奈良時代まで続く集落遺跡で、古墳時代後期のカマド付き方形竪穴住居を検出している。柏原町域では三原遺跡(41)、三原西遺跡(42)、見長遺跡(39)、大新屋遺跡(46)があり、いずれも背後に三原古墳群(40)などの大規模な古墳群が控えている。

古墳時代の生産遺跡の代表例として市島町の鴨庄窯跡群(68)があげられる。7世紀前半頃から須恵器の生産を開始し、8世紀代に生産のピークを迎えている。

#### 4. 奈良～平安時代

春日町の山垣遺跡(6)は竹田川沿いの低位段丘上に立地する。奈良時代前半の遺跡で、藩により方形に区画された範囲内に、柵列と掘立柱建物が配置されている。藩内から「春日里長等」に下された郡符木簡や、「丹波国氷上郡」と宛所が明記された封緘木簡、さらに「竹田里」など郡内における複数の里の名が記載された木簡が出土したことから、山垣遺跡は郡家相当の施設と考えられる。氷上郡家の位置は一般的に氷上郡内(市辺遺跡周辺)が想定されているが、氷上郡は地形的には加古川流域の西部地域と竹田川流域の東部地域に二分されており、山垣遺跡は氷上郡の東部地域にある春日里に置かれた郡家の別院と想定される。

七日市遺跡(4)は山垣遺跡の北に近接し、竹田川左岸の低位段丘上に立地している。8世紀から10世紀にわたり存続し、30棟以上の掘立柱建物が検出された。墨書土器などの文字資料や、円面硯などの文房具、木製祭祀具、石帯などが出土しており、地方官衙的な性格を持つ遺跡と考えられる。

氷上町市辺遺跡(57)は加古川右岸に位置する。加古川の旧河道沿いに掘立柱建物跡が整然と配置された状態が検出されている。紙の書状送付に用いられた「封緘木簡」のほか多数の木簡、墨書土器、木製祭祀具が出土している。木簡の記述内容から郡家に関わりのある施設であると考えられる。また山陰道の屋角駅家比定地に近接すると考えられる。

市島町三ツ塚廃寺(71)は竹田川右岸に位置する、氷上郡内で最古の古代寺院である。7世紀後半の創建で、伽藍配置は金銅と東西の塔が一直線に並ぶ「新治廃寺式」であることが判っている。

三ツ塚廃寺に隣接する天神瓦窯(70)では寺院に瓦を供給したことが知られている。市島町鴨庄古窯跡群(68)は8～9世紀初頭が生産の中心となる須恵器窯で、三ツ塚廃寺へも製品を供給していたようである。また七日市遺跡の対岸に位置する春日町野上野窯跡(24)、野上野瓦窯跡(7)は不明な点も多いが製品が七日市遺跡や三ツ塚廃寺へ供給された可能性がある。平安時代後期以降中山窯跡(11)、平松八幡神社窯跡群(1)では杯や甕などを中心とした須恵器が生産された。

参考文献(各遺跡の調査報告書は割愛した。)

氷上郡埋蔵文化財調査団・奈良大学文学部考古学研究室「氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書」(1)～(3)  
氷上郡教育委員会 1994～1996年

平川 南「郡符木簡」『律令国家の地方支配』吉川弘文館 1995年

村川 行弘「兵庫県の考古学」吉川弘文館 1996年



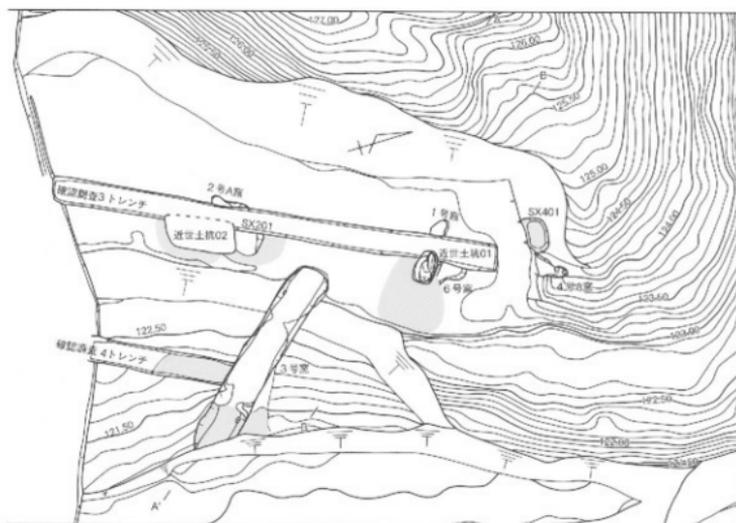
第5図 周辺の遺跡 (S:1/100,000)

- 1.平松八幡神社窯跡群 2.平松古墳群 3.石才大池遺跡 4.七日市遺跡 5.下野村遺跡 6.山垣遺跡 7.野上野瓦窯跡 8.野々間遺跡 9.塩ヶ谷岡田古墳群 10.圓領遺跡 11.中山窯跡 12.六ツ塚古墳群 13.火山古墳群 14.朝日八幡山古墳群 15.天王稲葉古墳群 16.稲見屋礎神社古墳群 17.長見古墳群 18.牛河内古墳群 19.大野氏亀山上古墳群 20.氏亀古墳群 21.古河古墳群 22.稲塚大塚古墳 23.東山墳墓群 24.野上野窯跡 25.桂谷寺古墳 26.二間塚古墳 27.多利向山古墳群 28.松ノ本古墳群 29.小多利古墳群 30.柏野古墳群 31.坂古墳群 32.親王塚北野古墳群 33.大藏神社古墳群 34.昭和池古墳群 35.藤ノ目古墳群 36.東奥古墳群 37.柏原陣屋遺跡 38.新町古墳群 39.見長古墳群 40.三原古墳群 41.三原遺跡 42.三原西遺跡 43.神田古墳群 44.おさんの森古墳群 45.拳田B古墳群 46.大新風遺跡 47.山の神池古墳群 48.七ツ塚古墳群 49.山根古墳群 50.山ヶ端古墳群 51.弁財天古墳群 52.笠刈坂古墳群 53.石生古墳群 54.横田山古墳 55.横田遺跡 56.横田北古墳群 57.市辺遺跡 58.市辺古墳群 59.明治山古墳 60.犬岡遺跡 61.黒田古墳群 62.南油良古墳群 63.棧敷古墳群 64.北油良古墳群 65.長者ヶ野古墳群 66.姫塚古墳群 67.梶原遺跡 68.鴨庄窯跡群 69.天神古墳群 70.天神瓦窯跡 71.三ツ塚遺跡・三ツ塚廃寺 72.久良部古墳群 73.北岡本古墳群 74.的場遺跡 75.上ノ段遺跡

## 第3章 平松八幡神社窯跡群

### 第1節 窯跡群の立地

平松神社窯跡群は標高569mの向山から北に派生する丘陵の先端部の東側斜面に構築されている。窯跡群の立地する斜面の標高は121m～124mで、麓の集落からの比高差はわずか15m前後である。丘陵の斜面は緩やかな傾斜地となっており、この緩やかな傾斜を利用して斜面は開鑿されて段々畑となっている。なお、窯跡群周辺の地質は丹波層群構成層の1つで、頁岩、頁岩・砂岩互層、混在岩からなり、窯跡群はこれらの岩屑堆積物からなる砂礫および礫を基盤層としている。



第6図 窯跡群全体図

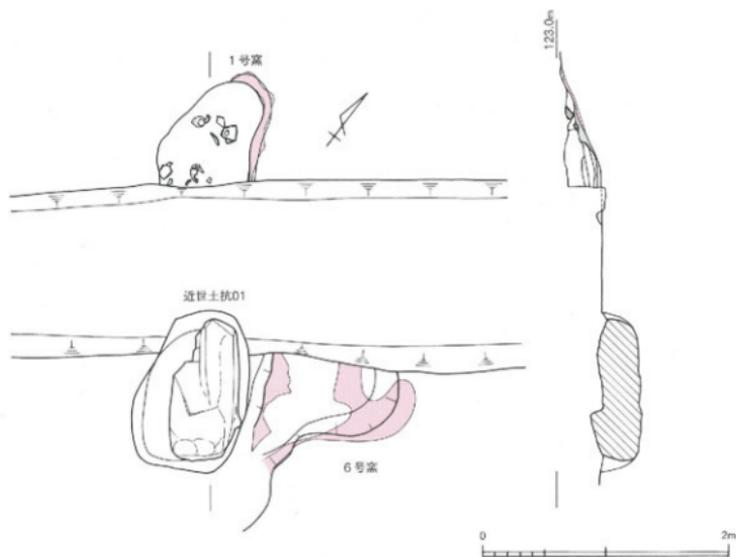
## 第2節 6号窯・1号窯

### 1. 遺構の概要

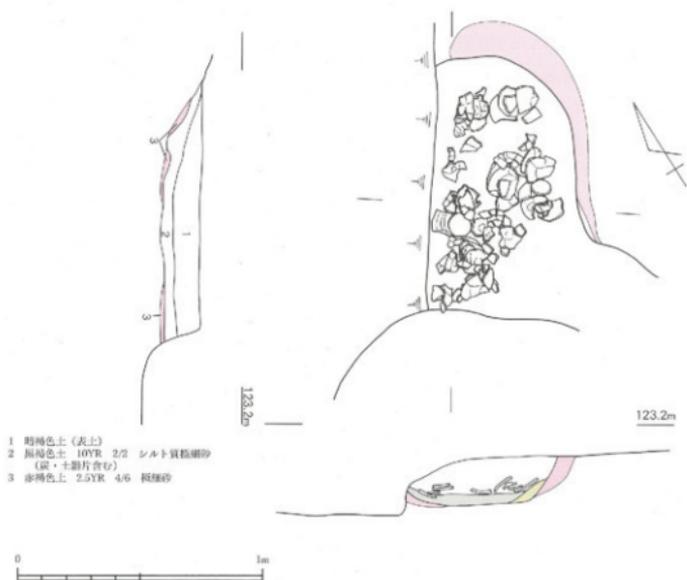
#### 6号窯

1号窯の前庭部の東端に位置する。第8図に6号窯の窯体内の上層断面図を示した通り、埋土層には上層の黄褐色土層と下層の炭層があり、両層の間に須恵器群が含まれている。さらにこれらの埋土層の下には、地山の被熱痕跡が広がる。遺構の性格として、被熱層の厚さから見て、一時的に火を受けた単なる焼土坑ではなく、一定時間熱を受けた煙管状窯と判断した。しかしながら、煙管状窯と考えた場合についてもいくつかの問題がある。第1に、遺構内に残されている製品は還元焰焼成の須恵器(113~122)で、この中には比較的高い温度で焼成された硬質須恵器も含まれており、酸化焰焼成を基本とする煙管状窯の製品の様相とは異なる。第2に、一般的に窯が自然崩壊した場合、窯体内に被熱窯壁片が窯内に堆積するのが通常であるが、本遺構の場合は埋土中にそのような残片が全く認められない。

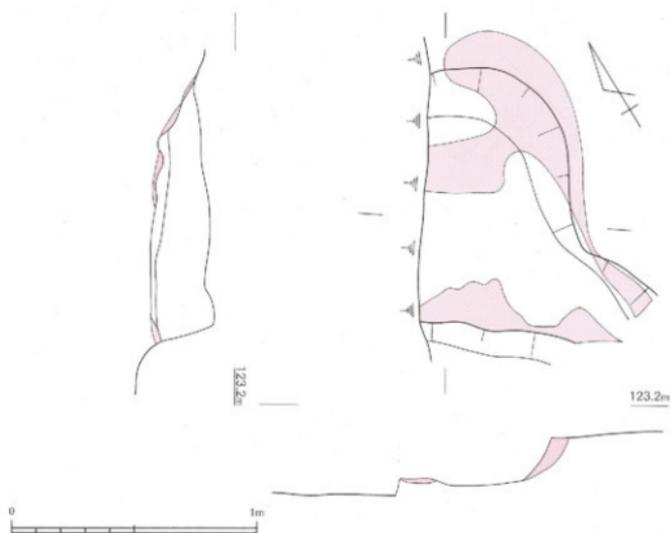
このような状況をどのように理解すればいいのか。まず、窯内に被熱窯壁の崩落土を伴わないのは、6号窯の窯体を取り壊され、窯体壁が取り除かれた以外に考え難い。このことは窯内の被熱酸化層の残りが極めて悪く、被熱層の厚さも一定ではないことから裏付けられる。次に、出土須恵器には底径の大きな椀など特徴のあるものも含まれているが、大方においては1号窯の製品と変わるところがない



第7図 1号窯・6号窯地形図



第8図 6号窯 (1号窯前底部) 遺物出土状況図

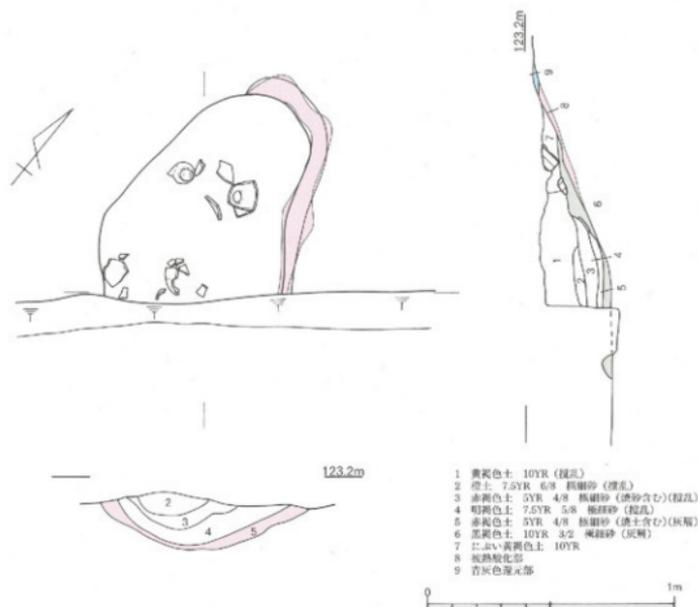


第9図 6号窯 窯体検出図

ので、遺構内に残されている須恵器群は1号窯の製品と考慮してよい。従って、被熱窯壁の崩落片の不存在と1号窯の須恵器の出土は、6号窯の窯体撤去によって、そのスペースが1号窯の前底部の一角に取り込まれた結果によるものと判断できる。6号窯の窯体内から出土している須恵器は椀類が中心で、大半が口縁部を上にして重なった状態で出土しており、しかも比較的完形に近いものも含まれている。また、これらの須恵器群は炭層の中にはほとんど混じらず、炭層の上面、即ち炭層をベースとした状態で出土している。左記の遺物出土状況から判断して、窯出しの際の仮置きスペースあるいは製品の選別場所として利用され、不良品がそのまま放置された可能性が高い。また、炭層中には青灰色に還元した窯壁片が含まれているので、炭層は須恵器窯である1号窯から掻き出されたものと断定してよい。

以上のように、6号窯は窯体が取り壊され、しかも確認調査トレンチ3とSK01によって北側部分と西側部分が失われているので、窯の方向や規模が判然としない。しかしながら、2号窯と4号窯の窯体の規模や形態を参考にすると、窯体の左壁側は確認調査トレンチ3によって失われており、窯の焚口は1号窯の前底部に向かって開き、焚口ラインはそのまま1号窯の前底部の掘りこみのラインにつながると推断される。6号窯の前底部は一部が近世土坑01によって破壊されているが、1号窯の前底部と重なりあうことになる。窯室と焚口間の隔壁はもちろん存在しないが、わずかにくびれている部分が両者の境とすると、窯室の大きさは長径で0.6m前後、焚口の延長は0.4m前後となる。

6号窯と1号窯の前底部の重複については、1号窯の前底部の造成にあたって6号窯の前底部の掘り込みをそのまま1号窯の前底部として取り込んだか、あるいは1号窯と6号窯が前底部を共有したと考



第10図 1号窯 窯体図

えるかのどちらかになる。前者は6号窯の焼窯後に1号窯が構築されたということになり、後者は1号窯と6号窯とが同時に構築されたということになる。結論的には、第6節で述べているように、播磨諸窯での須恵器窯と煙管状窯のセット事例及び当該窯跡群2号A窯とB窯、4号A窯とB窯における煙管状窯と須恵器窯のセット例から同時構築と判断される。

### 1号窯

3号窯の右斜面上方に位置する。3号窯と同じ地上式の須恵器窯と判断されるが、窯体の大半は畑田造成時に削り取られ、燃焼部のみが残存していた。

検出された燃焼部の残存長は1.0m、幅は0.75mを測るが、木の根などによる攪乱を受け、遺存状況はよくない。基本土層は上層の黄褐色土層と下層の炭層の上下2層に分かれる。黄褐色土層中には、椀類を中心とした遺物を包含しており、これらの遺物群は口縁が上を向いたもの、横を向いたもの、下を向いたものなど向きはさまざまで、焼成部から転落、あるいは掻き落とされて燃焼部に遺存した状況を示す。炭層の下には赤色の被熱酸化面が広がるが、被熱酸化面の広がりは途中までで、それより下方は被熱痕跡がなくなると同時に傾斜がなくなり、水平面となる。従って、傾斜が水平に変わった付近は燃焼部というよりも燃焼部口から続く窯の前底部と判断してよい。なお、硬化還元面は残存部上端のごくわずかな範囲にしか残存しており、これより上方に焼成部が存在していたものと思われる。

前底部は緩斜面を延長2.5m、幅2m前後の範囲をテラス状に掘り込んで造成されているが、その範囲は6号窯の前底部と重複している。6号窯が1号窯の前底部造成時に破壊された状況が看取されることから、6号窯の窯体部分は窯出しの際の仮置きスペースとして利用された可能性が高い。

灰層は前底部から斜面下方に4m×3.5mの範囲で楕円状に広がる。斜面左下には3号窯が存在するが、斜面全体が削平されていることにより、1号窯と3号窯の先後関係については明らかにできなかった。

### 近世土坑01

1号窯の前底部で検出された土坑である。1号窯の前底部を掘削して作られたために埋土層が灰混じりとなり、1号窯の前底部灰層を除去するまで検出できなかった遺構である。大きさは長径1.3m、短径0.9mを測る。内部には長さ1.2mの石が落ち込んでいた。土坑内には1号窯以外の遺物は含まれておらず、年代や性格については不明である。近現代の墓、若しくは開墾に伴う施設の可能性がある。

## 2. 遺物の概要

### 窯体・灰原出土遺物

#### 土師器

小皿 (123・124)・托状形皿 (125)・杯他 (126・127)

123・124は1号灰原出土、125～127は確認トレンチ3からの出土で、いずれも酸化焙焼による赤褐色若しくは黄褐色を呈し、6号窯の製品の可能性が高い。底部外面に回転糸切り痕を残す。小皿 (123・124)は須恵器小皿に比して器高が低く、器壁が厚い。

#### 須恵器

小皿 (101、128～132)

101は窯体出土、128～132は灰原からの出土である。口径7.7cm～8.3cm、底径4.4cm～5.3cm、器高1.7cm～2.5cmを測る。129・132のように灰白色で焼きの甘いものもあるが、全体に青灰色を呈し、比較的堅牢である。底部外面に回転糸切り痕を残す。器壁は土師器の小皿に比べて薄く、底部と体部の境

が明瞭である。また、土師器123・124に比して器高が高い。

#### 小椀 (133・134)

口径8.5cm、底径3.4cm～3.6cm、器高3.3cmを測る。底部径は小さく、体部は湾曲して立ち上がる。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面の調整はていねいに行なっている。

#### 椀 (102～111・135～146)

102～111が窯体出土、135～146が灰原からの出土である。104・107・110・111は焼成温度も高く堅牢で、青灰色を呈する。他は焼成が甘く灰白色で、102・106のように表面が燻化し、瓦質のものもある。口径14.6～15.9cm、底径5.0cm～7.1cm、器高4.7cm～6.3cmを測る。底部の切り離しはすべて糸切り手法を用いている。体部は湾曲して立ち上がるが、139～142は内面にカーブを出すためのコテ状工具の使用の形跡があり、沈線状の筋線が認められる。また、107・138・140のように口縁内端が面または小さな段をもつものがある。111は底部の切り離しの際にヘラを深く差し込み過ぎたために、底部厚がなくなり底切れしている。135は口径15.7cm、底径6.7cm、器高4.3cmで、口径に対して底径が広く、杯的な要素をもつ。

#### 鉢 (112・151～157)

112のように頸部がほとんど屈曲しないものと151～157のように口頸部が「く」の字状に大きく屈曲するものがある。前者は数が少なく112の1点のみである。112は窯体出土で、灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。後者の151～157は体部がほぼ直線的に斜め上方に立ち上がるが、口縁部近くで「く」の形に屈曲し、口縁部に至る。口縁端面は平坦で、端面は下方に垂下し、下端部が突出する。151・152のように口径17cm～20cm前後の小型のものと153～157のように23cm～28cm前後の大型のものがある。157の底部の切り離しの方法については不明であるが、3号窯出土の鉢底部の切り離しは糸切りであることから糸切り手法を用いている可能性が高い。

#### 甕 (158・159)

口径16.8cm～22.7cm。「く」の字形に屈曲する頸部をもつ。口縁部の内面は横なでによる凹部が認められる。体部外面には叩きを施すが、内面の当て具痕は見えない。外面の叩きは右上がりの叩きと左上がりの叩きが交差する。

#### 突帯壺他 (147～150)

147～149は突帯壺破片である。147の口縁部縁は大きく外反し、頸部を上方につまみ上げる。146の焼成は堅致で、突帯は断面方形である。150は底部外面に糸切り痕を残す。鉢の可能性もある。

### 6号窯（1号窯前底部）出土遺物

#### 須恵器

##### 小皿 (113～115)

底径4.8cm～5.7cm。いずれも口縁部を欠き、器高は不明である。灰白色で瓦質に近い焼成で、底部には回転糸切り痕を残す。

##### 椀 (116～121)

117・119は灰白色を呈し、118は瓦質である。116・120・121は青灰色で底部には回転糸切り痕を残す。口径は15.2cm～17.9cmである。119～121のように底径が7.2cm～8.2cmと広いものもある。

##### 鉢 (122)

口径26.7cmで、底部を欠く。口縁端面は平坦で、端面は下方に垂下し、下端部が突出する。

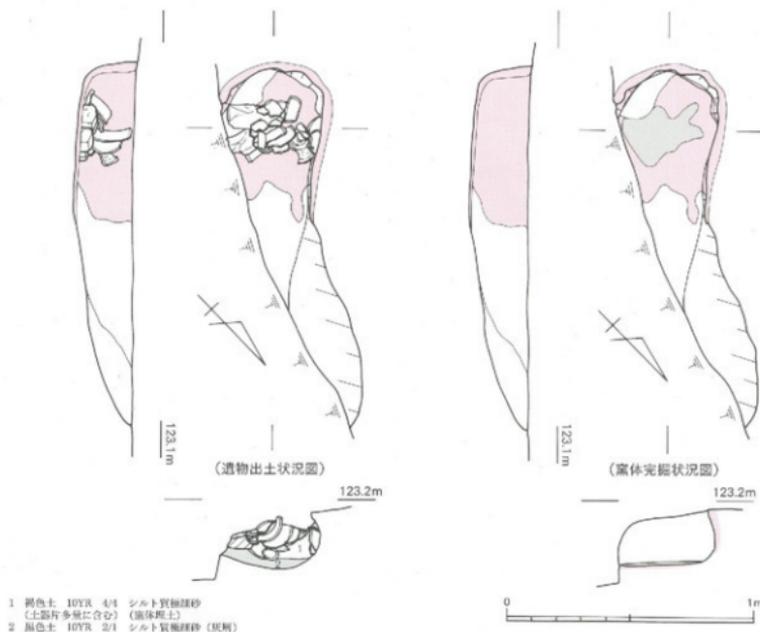
### 第3節 2号A窯(旧2号窯)・2号B窯

#### 1. 遺構の概要

窯群の最も西に位置する。検出された窯体遺構は小型の煙管状窯であるが、煙管状窯の東側には確認トレンチ3を挟んで須恵器を含んだ灰層の広がりがあり、この灰層の下から灰・土師器・須恵器を包含した地山掘り込み遺構S X201が検出された。煙管状窯は土師器焼成窯であることから、灰層およびS X201は、すでに消滅して遺存しない須恵器窯の灰原もしくは前底部の可能性が高いと考え、煙管状窯を2号A窯(旧2号窯)とし、遺存しない須恵器窯を2号B窯とした。

#### 2号A窯(旧2号窯)

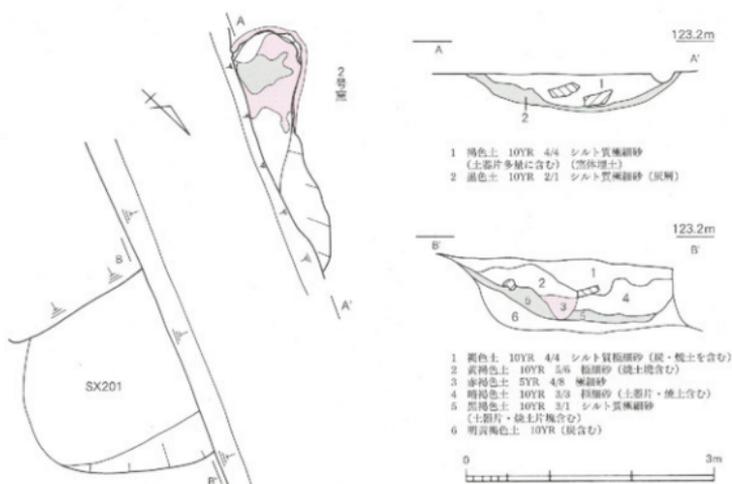
窯群の最も西に位置する煙管状窯である。左壁ならびに前底部は確認調査時の掘削により失われている。窯体焚口から続く前底部は地山を掘り下げて作られている。窯室は南北長0.38m、東西長0.35mを測る。壁の残存高は窯室で0.22mある。窯室内に下面には石材、須恵器の突帯壺が残されていた。須恵器突帯壺については、2号窯が土師器の焼成窯であることから、本窯で焼成されたものではないことは



第11図 2号A窯 窯体図

明らかである。突帯壺は口縁部全片を欠くが、1個体分あり、口縁部を下にして東壁から西壁に向かって石材の上に横倒しになった状態で検出されている。石材の本数は調査時の記録が欠落しているため不明であるが、写真・図面を見る限りは2本である。2本の石材は窯室の中心に向かって横倒しになっている。石材の下には、炭の広がりががあるので、本来、東壁付近に立てられていたものが、横倒しになったものと推断される。窯室内から石材が出土しているのは4号A窯も同様であり、4号A窯の場合は2本の石材がやや斜めに倒れてはいるものの本来は立った状態で置かれていたと推定される。4号A窯例からみてこれらの石は窯室内の上部の焼成部と下部の燃焼部とを仕切る間仕切りの支柱以外に考え難い。また、突帯壺も頸部を下に底部を上にして置かれていた状況が想定されるので、支柱に転用された可能性が高い。但し、発掘調査時において間仕切り片の存在や石材に間仕切りの粘土塊が付着していたかどうかの確認には至っていない。窯室と焚口との間の隔壁は遺存しないが、突帯壺と石材の出土範囲を窯室とすると焚口は延長0.3m前後、幅は0.4m前後となる。また、焚口の高さを確保するために、焚口前を窯の床面と同じ高さまで掘り下げて前底部を設けている。

窯体埋土は大きく2層に分かれる。上層は黄褐色シルト質細砂層で焼土塊を含み、下層は黒褐色極細砂で炭を多く含む。窯室内からは突帯壺以外に土師器小皿と須恵器碗が出土しているが、出土層位や出土状況については把握されていないので不明である。土師器小皿は酸化焰による赤褐色を呈するのに対して、須恵器碗は還元焰焼成により灰白色を呈しており、うち1点は軟質、他の1点はやや硬質で突帯壺と同じ焼成・色調である。



第12図 2号A窯・SX201 全体図

## S X 201 (2号A竈前庭部・2号B竈灰原)

2号A竈の東側に検出された土坑状遺構である。遺構の南側の部分は近世土坑02によって削平されているために、遺構全体の規模が明確ではない。また、試掘調査トレンチ3によって、寸断されているが、2号竈との位置の関係および多数の土師器の包含状況から2号A竈の前庭部の一部と判断して間違いない。また、後述の通り、土坑内埋土層中に土師器以外に須恵器を包含している点から須恵器窯(2号B竈)の前庭部・灰原でもであると判断してよい。

遺構の埋土は第1層褐色シルト質極細砂、第2層黄褐色極細砂、第3層赤褐色極細砂、第4層暗褐色極細砂、第5層黒褐色シルト質極細砂の5層からなる。埋土から出土遺物の大半は土師器であるが、須恵器も含まれている。遺物の取り上げについては層ごとに行なっていないので、須恵器と土師器の層位並びに出土状況については把握できていない。

### 2号B竈

すでに述べたように、S X 201周辺の須恵器・焼土塊を包含した薄い灰層の広がりやS X 201内の須恵器と土師器の混在状況から、土師器を焼成した煙管状窯とは別に須恵器窯が存在していたものと判断し、2号B竈の名称を与えた。1号竈と6号竈、4号A竈とB竈と同様、須恵器窯に付随する形で、煙管状窯の2号A竈が存在し、前庭部を共有していたと思われる。窯本体は開墾により破壊され、遺存しないが、西側の崖断面との間に存在していたと思われる。

## 2. 遺物の概要

### 竈体出土遺物

#### 土師器

##### 托形状皿(201~204)

いずれもやや赤みがかった黄褐色を呈する。口縁部から底部まで残存するものはないが、ほぼ水平に開く体部をもつ。径4.6cm~4.7cm、高さ1cm前後の高い高台を有する。底部外面には糸切り痕を残す。杯(205・206)

黄褐色を呈する。205・206は同一個体の可能性もあるが、接合できない。底部外面に糸切り痕を残す。

#### 須恵器

##### 椀(207・208)

体部はわずかに湾曲して立ち上がるが、口縁部付近でわずかに角度を変えて上方に立ち上げる。底部の切り離しは糸切りである。207は大きく歪んでおり、本来の口径は掲載図より小さく、器高も高いと思われる。207・208ともに灰白色を呈するが、208は焼成が甘く軟質で、207はわずかに青みがかりやや硬質である。207と壺209は色調・焼成ともに同じである。

##### 突帯壺(209)

口縁部全部を欠くが、ほぼ兜形である。体部破片の一部も欠くが、確認調査実施時に排土中に紛れてしまった可能性が高い。口縁部は破片が1片もないので、竈室埋置時にはすでに存在しなかったと思われる。肩部に貼付の1本の貼り付け突帯を巡らせている。断面は方形で、耳は付されていない。底部外面には糸切り痕を残す。

## S X 201 出土遺物

### 土師器

#### 小皿 (210~215)

口径7.4cm~9.0cm、底径5.0cm~6.7cm、器高0.95cm~1.5cmの浅い小皿である。色調は赤褐色ないしはやや赤みがかった黄褐色を呈する。器壁は厚いが、212・214のようにきわめて薄い器壁のものもある。体部内外面は横ナデにより少しくぼむが、口縁部は逆に膨らんでいる。211の底部内面は体部との境の強いナデにより中央がふくらんでいる。

#### 托状形皿・椀 (216~218)

すべて黄褐色を呈する。口径に対して底径が小さく、体部は大きく開く。外面からは高い平高台を有するように見えるが、内面に段をもち、底部の厚さは0.6cm前後しかない。底部の切り離しは糸切りである。217は口径13.2cm前後、底径4.9cm~7.6cmを測る。

#### 杯 (219~221)

径の広い底部に大きく開く体部をもつ。219・221は黄褐色、220は赤褐色を呈する。

### 須恵器

#### 椀 (222~226)

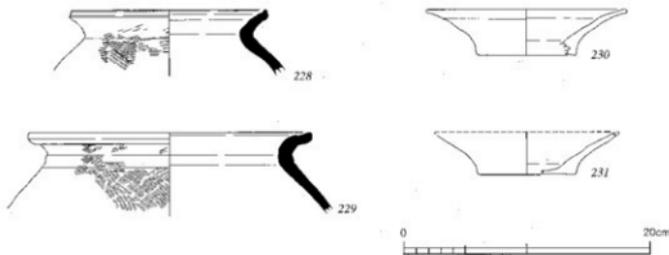
口径15.0cm~16.9cm、底径6.5cm~7.5cm、器高4.7cm~6.2cm。222・223・226は灰白色を呈し、焼成はきわめて甘い。224は青灰色で硬質であるが、225は外面は青灰色の還元色を呈するが、内面は赤褐色の酸化色である。底部の切り離しは糸切りで、底部内面には体部との境に小さな段を残す。222・223はともに器壁は厚く、作りも雑である。

#### 鉢 (227)

口径29.2cm。底部を欠く。体部はわずかに湾曲して上方に立ち上がる。口縁端面は平坦で、端面は下方に垂下し、下端部が突出する。

#### 確認調査トレンチ3 出土遺物 (228~231)

2号A窯の窯体部とS X 201の遺物が混在している。土師器と須恵器片が数多く採取されているが、特徴的な器種を取り上げて図化した。須恵器寛228と229は復元口径15.7cm、22.5cmを測る小型の甕である。焼成の程度は228が硬質、229が瓦質である。



第13図 2号A・B窯 確認調査3トレンチ出土遺物

## 第4節 3号窯

### 1. 遺構の概要

窯体の大半が地上に架構された地上式の須恵器窯である。排煙部と焼成部の一部が棚田造成により失われている。窯体は操業期間中に少なくとも1度大きな改修を行なった痕跡が残されており、操業当初の窯体を第1次窯体、改修後の窯体を第2次窯体とする。

#### 第2次窯体

壁の残存高は最も残りのよいところで0.35cmである。残存長は水平長で7.2m、床幅は焼成部中央(C-C)、焼成部先端(B-B)ともに1.45m、焚口で0.95mを測り、窯体の幅がほとんど変わらない寸胴形の平面プランを呈する。

傾斜角度は焼成部下位で19°、焼成部先端で24°を測り、平均斜度は21°である。床はほぼ直線的に立ち上がる。焚口の標高は121.9mで、谷底底部からの比高差は約5mある。

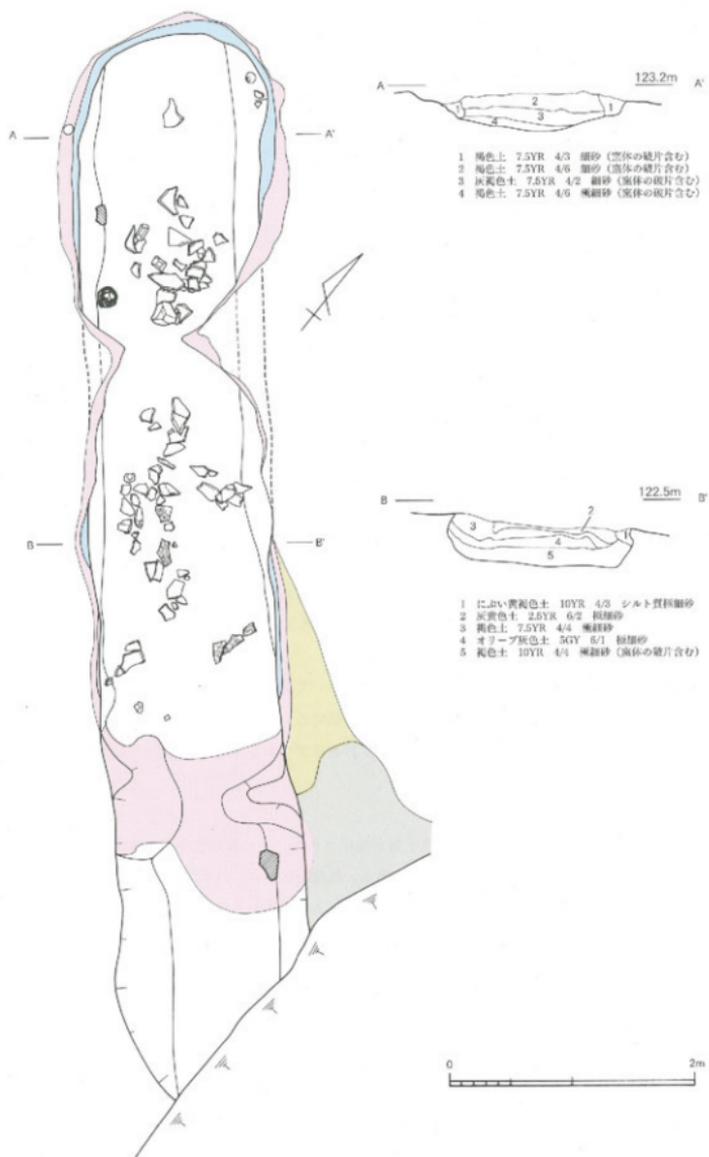
窯体床面には椀・鉢・甕が残されていたが、塵片には2次焼成を受けているものが多数存在しており、焼台に転用されたと思われる。

焚口の右壁際と左壁際には赤褐色の焼土塊が残されていた。焼土塊は灰層の上に堆積し、この焼土塊を境にして裏側の壁・床面は還元、手前側の壁・床面は酸化域に分かれることから、焼土塊は焚口の閉塞土の可能性が高い。焼土塊は左右に分かれて堆積し、中央には認められない。この状況は窯出しの際に人が出入りする中央部のみ閉塞土が除去され、左右の壁際の閉塞土は完全に除去されずに放置されたと解される。この赤褐色の焼土塊部分を焚口とすると、それより外側は前庭部および灰原となる。被熱酸化面は焚口の外側に0.8m続く。灰原の形成範囲は、斜面全体が閉塞されていることもあり、きわめて狭い。

なお、床の還元層をすべて除去したところ焼成部上位において縦主軸上に4箇所、左右の側壁にそれぞれ1箇所炭化材が検出された。主軸上の炭化材は窯体構築時の天井を支える支保工材であり、側壁のそれは窯体架橋材である。本来、窯体下位からも検出されるはずであるが、焼成温度が高いために炭化痕跡として残らなかった可能性が高い。

#### 第1次窯体

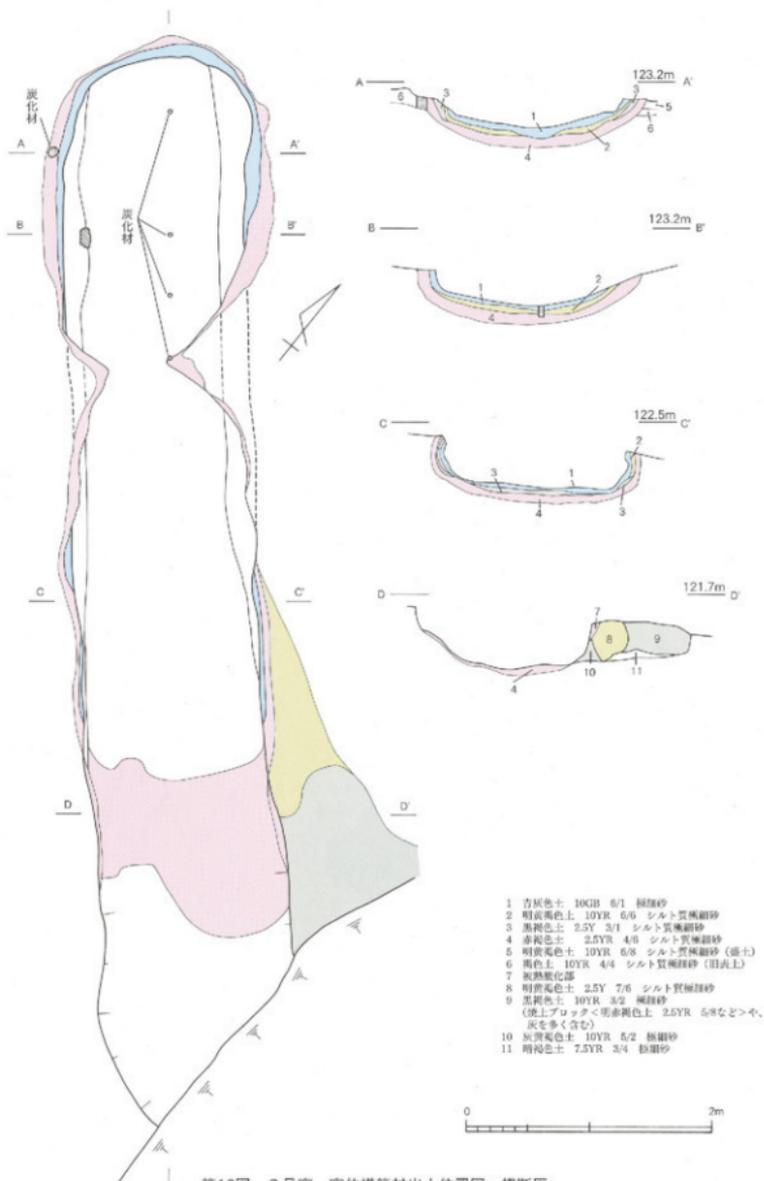
検出した窯体の燃焼部右側壁の外側に黄褐色土層が検出された。この黄褐色土層は地山土ではなく、窯壁と基盤層の間に人為的に埋められた裏込め土である。基盤層は「ハ」の字状に外側に広がり、この間を埋める黄褐色土層も「ハ」の字状の裾広がりになっている。黄褐色土層の末端部には灰層の広がりがある。平面プラン上は灰層が黄褐色土層を切りこんでいるように見えるが、実際は灰層が黄褐色土層の下にもぐり込んでいる。これらの状況から、黄褐色土層が裏込めされている部分は第1次窯体の前庭部ないし灰原部分であり、第2次窯体はこれらの部分を埋めることによって第1次窯体長を下方に延長させていることがわかる。従って、第1次窯体の焚口は黄褐色土層の先端部分、すなわち基盤層が「ハ」の字に付き始める箇所である。第2次窯体が焼成部上半を第1次の窯体をそのまま利用しているとする、第1次窯体の窯体長は4.2mとなる。なお、確認調査報告では左側壁の外側にも右側壁と同じ位置に灰層の広がりがあったことが指摘されており、上記の第1次窯体の存在を裏付ける。



第14図 3号窟 窟体内遺物出土状況図・土層断面図



第15図 3号窟 窟体平面図・縦断面図



第16図 3号窯 窯体構築材出土位置図・横断面

## 2. 遺物の概要

### 須恵器

#### 小皿 (301・317～328)

301は窯体、317～328は灰原からの出土である。3つのタイプがある。301・317～320のように口径に比して底部が小さいために体部は大きく斜めに開くタイプのもものと321～325のように口径に比して底部は小さいが、体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部が外反するタイプのもものと326～328のように口径と底径の差は前2者に比して小さく、器高が低い3つのタイプがある。

#### 椀 (302～308・329～349)

口径13.7cm～15.0cm、底径6.2cm～7.1cm、器高4.6cm～5.3cm。体部はわずかに湾曲して立ち上がるが、口縁部付近でわずかに角度を変えて上方に立ち上がる。口縁部の器壁が膨らむものが多い。口縁部外面に重ね焼きの痕跡を残すものや体部内外面に火漉を残すものがある。底部はいずれも糸切り離しである。糸の切り離しの位置の違いによって平高台風にみえるものがあるが、基本的には高台は消失している。308は口径に対して底径が大きく杯的要素をもつ。内面にコテ状工具の当たり痕が残り、火漉が目立つ。348は灰原下方より出土した。糸切りの底部に輪高台を貼り付ける。

#### 鉢 (309～311・349～360)

309～311・349～352のように口径17cm～20cm前後の小型のものと354～360のように26cm～28cm前後の大型のものがある。体部はわずかに湾曲して斜め上方に立ち上がるが、口縁部近くで「く」の状に屈曲し、口縁部に至る。口縁端面は平坦で、端面は下方に垂下し、下端部が突出する。361の底部には静止糸切りの切り離し痕跡が残る。

#### 甕 (314～316・366～372)

口径30cm～40cmの大型の甕と口径16cm～18cmの小型の甕がある。大型の甕には315・316・368～372がある。このうち、315は口径50.4cmで、口縁部内面を横ナデし、端部を上方につまみあげる。外面には成形時の凹凸があるが、工具によって調整している。314は底径21.2cmの平底の甕である。底部の大半を欠く。粘土内盤の上に粘土ひもを積み上げて体部を作る。底部外面には周縁部に叩きの痕が残る。体部外面には叩きを施すが、左斜めと右斜め方向の叩きが交差している。内面には細かい青海波の当て具痕が残るが、当て具の溝の深さは浅い。また、縦方向のハケ状工具の調整痕が残る。316は口径50.4cm。比較的最長い頸部に外反する口縁をもつ。口縁部内面を横ナデし、端部を上方につまみあげる。外面には成形時の凹凸があるが、工具によって調整している。叩きは左斜め方向に施した後、その上から横平行に施す。内面には浅い青海波状の当て具痕が残る。当て具痕は板状工具によって軽く調整されている。小型の甕には366・367があり、肩部の張りがほとんどない。

#### 特殊物 (312・313・361・362)

相輪の蓮花台と考える。312・313は窯体出土、361・362は灰原からの出土である。同一個体の可能性があるが、4点とも焼成の程度、発色が異なるので別個体として扱う。312は中央部には径9.6cmの軸穴があり、軸穴周辺から周縁部に向かって緩やかに下るが、縁部を欠く。312と313の破片を合わせて復元してみると、周縁には上面側に幅2.5cm、高さ1cmの縁帯が巡る。下面は平らである。

#### 壺 (363～365)

363・364は2号窯出土の209と同じタイプの突帯壺の口縁部であろう。ラッパ状に大きく開き、端部を上方につまみあげる。365は高台をもつ底部であるが、上部はどのような形態になるか不明である。

## 第5節 4号A窯(旧4号窯)・4号B窯(SX401)

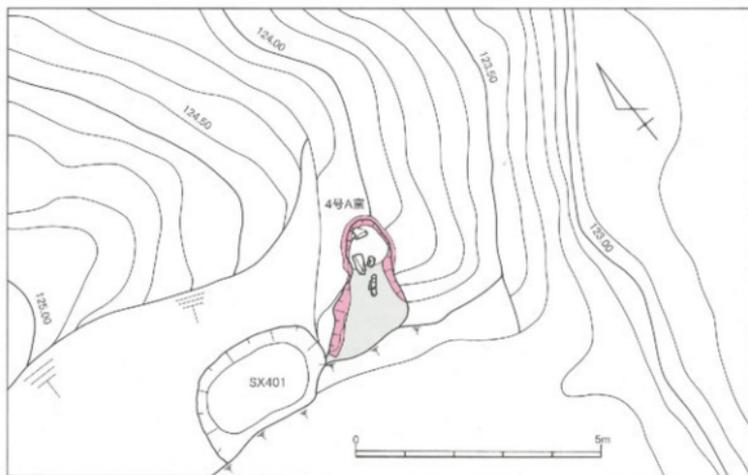
### 1. 遺構の概要

北東に張り出す尾根先端の両側斜面に構築されており、窯群の中では最も北寄りに位置する。検出された遺構は小型の煙管状窯と灰層中に遺物を包含した落ち込みSX401である。発掘時にはこのSX401を煙管状窯の灰原として、両者を一体の遺構と捉えた。煙管状窯は土師器の焼成窯であり、窯の前面から多数の土師器が出土しているのに対して、SX401に包含されている遺物の主体は須恵器である。このことについて、当初、煙管状窯灰原中に別の須恵器の窯の遺物が混入していると考えたが、出土の遺物の主体が須恵器であることから、このSX401そのものは煙管状窯の灰原ではなく、消滅した須恵器窯の灰原の残存部と判断し煙管状窯を4号A窯とし、須恵器窯を4号B窯とした。4号A窯の直近に須恵器窯が存在したであろうことは、4号A窯の東に、当初5号窯の灰原と認識していた須恵器包含の灰層が存在していたことから首肯できる。

### 4号A窯

小型の煙管状窯である。窯は斜面を穿って構築されている。斜面の上方側を深く、手前側を浅く掘り下げることによって、窯室から前庭部に至る基底面を水平にしている。窯室は長径0.45cm、短径0.40cmの長楕円形を呈する。奥壁部の残存壁高は0.50cmを測る。

第18図は窯体の土層縦断面図である。断面設定軸線が窯体主軸線より東にずれているために、土層の観察部位としては必ずしも的確ではないが、およその窯内土層の状況が把握できる。第1層には須恵器や青灰色の窯壁片を含んでおり、開口部から流入した埋土であることがわかる。第2層は主として赤褐色の被熱酸化層で、燃焼部の天井の落盤土と判断してよい。窯室内には石材が奥壁側に1本、東壁際に

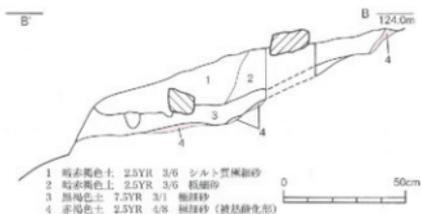


第17図 4号A窯・SX401全体図

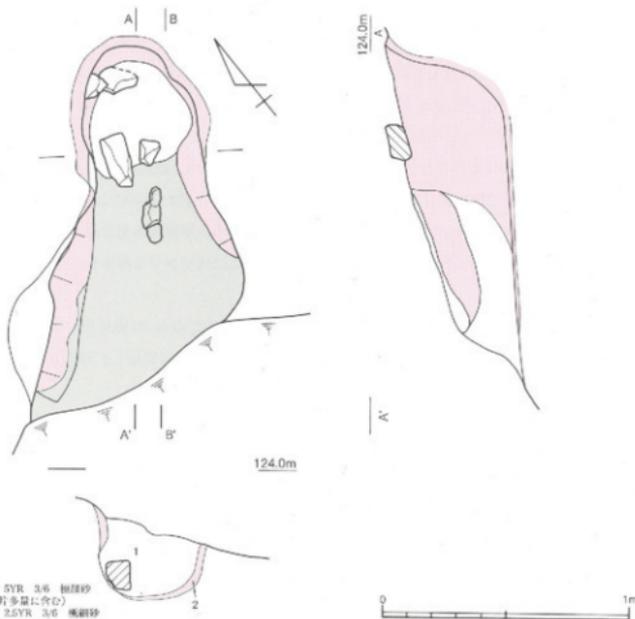
1本、西側壁側に1本、燃焼部に1本検出された。奥壁側の石材はわずかに斜めに倒れてはいるが、奥壁と床に貼り付いている。西側壁側の石材はやや南に倒れてはいるが、ほぼ直立している。また、焚口の石材は完全に床の上に横倒しになった状態で検出されている。これらの石材はいずれも長さ30cm前後あり、立てて置かれ、間仕切りを支える支柱として使用されていたものと思われる。燃焼部と焼成部の間仕切り片については、調査時には確認していない。燃焼部は窯室から「ハ」の字状に開く。天井部は残存せず、高さは不明であるが、側壁に残されている被熱の痕跡から燃焼部口はおよそ0.45cmと推定される。燃焼部には灰の堆積が認められる。

#### S X 401 (4号B窯灰原)

4号窯の前庭部横に検出されたテラス状の土坑である。長径は1.45m、短径(残存部)0.9mを測る。手前側は確認調査トレンチ3によって削平されている。土坑内には須恵器を主体とする遺物を包含した灰が堆積し、東端が4号窯の灰原と重なっていた。発掘当初は当該遺構を4号A窯の灰原と認識していたために、4号A窯灰原との



第18図 4号A窯 窯体内土層断面図



第19図 4号A窯 窯体図

切り合いの有無については確認していない。出土遺物は硬質の須恵器を主体とする。窯体は発見されていないが、須恵器窯の灰原ないしは前底部であることは確実で、この須恵器窯を4号B窯とした。窯体は崖断面となっている西側斜面上方に所在していたと思われる。

## 2. 遺物の概要

### 土師器

小皿 (401~414・420~423・447・448)

401~414は窯体出土、420~423はS X401からの出土である。口径7.7cm~8.7cm、底径3.9cm~5.6cm、器高1.2cm~1.8cm。底部の切り離しは回転系切りで、底部内面は体部と底部の境の強いナデにより、中央部が盛り上がっている。須恵器小皿429と比して器壁が厚く、浅い。407の内面にはリング状のくぼみがある。

杯 (415~419・424~427)

415~419は窯体出土、424~427はS X401からの出土である。口径13.7cm~15.4cm、底径6.5cm~8.3cm、器高3.4cm~4.3cm。底部外面に回転系切り痕を残し、体部はほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。416・417は内面にコチ状工具のあたり痕が残る。425・426は口縁部外面下の強いナデにより肥厚する。

### 須恵器

小皿・小椀 (428~432)

いずれもS X401からの出土である。428・429は口径8.8cm・8.1cm、底径3.7cm・4.1cm、器高2.1cm・2.0cm。口径に比して底径が小さく体部の開きが大きい。底部の切り離しは回転系切りである。430~432は灰白色ないしは瓦質の焼成状態を呈し、焼成が甘い。428・429は青灰色で、硬質である。

椀 (433~440)

いずれもS X401からの出土である。口径14.0cm~15.8cm、底径6.4cm~6.5cm、器高5.0cm。433~437のように瓦質で焼成が甘く、表面が燻化しているものと438~440のように青灰色で硬質のものがある。体部は斜めに立ち上がり、口縁部をやや内側に傾ける。底部は系切り離して、高台は消失している。433は口縁外面に沈線状の小さな段が巡る。437・438は口縁部がやや厚みをもつ。

鉢 (441~443・450)

小型のもの(441)と大型のもの(442・443)がある。小型の441は青灰色で硬質である。442・443は灰白色で焼成が甘く、口縁部に重ね焼きの痕跡を残す。口縁部は肥厚し、端面が平坦で、端部は外側に突出する。

壺 (444・445)

444は突帯壺の小片で、灰白色を呈し、焼成は甘い。突帯は粘土紐を貼り付けて罍状に仕上げるが、調整はきわめて雑である。445も突帯壺の底部小片で、底部の復元径は12cmを測るが、小片のため径の計測値は不確かである。

甕 (446)

口径49.7cmを測る大型の甕である。頸部は外反し、口縁端部は上方につまみ上げられている。

## 第6節 平松窯跡群 まとめ

### 1. 遺構について

#### (1) 窯体構造の特徴

##### 須恵器窯

今回、検出された窯跡は平安後期の須恵器窯と土師器焼成煙管状須恵器窯の合わせて7基である。調査地は集落に近い緩斜面という土地条件もあって、遺跡が立地する斜面が開墾等によって改変され、遺構の遺存状況がきわめて悪い。特に、須恵器窯については、3号窯は窯体がほぼ残存するが、1号窯については大半が削平されて燃焼部のみが残存、2号B窯と4号B窯は灰原の一部のみで窯体は遺存しない。須恵器窯の2号B窯と4号B窯の灰原については煙管状窯の2号A窯と4号A窯の灰原と重なっていたために、調査時においては須恵器が灰原に混入している程度の認識であり、須恵器窯の存在の有無については考慮していなかった。しかしながら、第3節および第4節で記述したように、本報告書刊行にあたって、2号B窯および4号B窯として須恵器窯の存在を認めた根拠は次の2点である。まず第1に、2号A窯と4号A窯はともに土師器焼成窯であり、須恵器の焼成窯ではない。須恵器を焼成した窯の例としては魚住38号窯(註1)があるので、須恵器を焼いた可能性が全くないわけではないが、灰原出土の須恵器には硬質で比較的形状の大きい甕・鉢類があり、これらの遺物は小型の煙管状窯では高温焼成がほぼ不可能である。しかも、煙管状窯には還元焼成の痕跡が認められない。第2に、2号A窯と4号A窯は1号窯および3号窯より高い位置にあり、1号窯・3号窯の灰原の及ぶ範囲とは全く逆の位置および方向にある。また、灰層の存在から工房跡とは考えられない。以上の点から、2号窯SX201と4号窯SX401包含の須恵器と灰の堆積の事象は直近に須恵器窯が存在した以外に考え難く、遺構周囲は開墾によって斜面が大きく抉られており、窯体は破壊されたと判断される。

以上の通り、窯体全体がほぼ残存し、窯体構造がわかるのは、3号窯のみである。3号窯の窯体構造は側壁部から天井部を地上に架構する地上式窯である。側壁部と床面に打ち込みの炭化材が検出されている。炭化材は側壁部に1個、主軸上に4個発見されている。側壁の炭化材は構築材で、床面のそれは天井架構時に天井を支える支保工材である。検出位置は焼成部の上位のみで下位では発見されていないが、検出された構築材痕は炭化して明瞭な痕跡を残すものの発見に留まっており、炭化していない構築材痕については検出されていないと思われる。構築材については播磨各地の窯跡群で発見されており、地上式の窯に限って言えば当然に発見される痕跡である。床面主軸の支保工材痕については半地下式の窯においても発見されているが、地上式の窯に炭化痕跡として発見されることが多く、地上式の窯での発見例としては魚住29号窯(註2)、久留美榑倉10号窯(註3)などがある。

##### 煙管状窯

3基の煙管状窯が発見されている。煙管状窯は昭和54年の魚住古窯跡群の発掘調査において、初めて発見され、榑崎彰一氏によって命名された窯跡である。(註4)その後、兵庫県内はもとより岡山・香川・北九州においても発見されている。煙管状窯の研究については、1997年(平成9年)に刊行された『土師器焼成遺構の研究』において集成が行なわれ、北九州事例を佐藤浩二氏が、兵庫県をふくめた中四国を佐藤竜馬氏がまとめ、木立雅朗氏が近世の煙管状窯の民俗事例を紹介している。(註5)

佐藤竜馬氏は煙管状窯を半地下式・地下式のをa類、地上式のをb類に分類し、a類の煙管状窯として魚住38号窯跡、沖の店1号窯跡(岡山県)、b類の煙管状窯として神山宮ノ裏4号窯、西村遠

跡西村北地区SF1（香川県）、近世伊丹郷町の焙烙窯をそれぞれあげている。（註6）

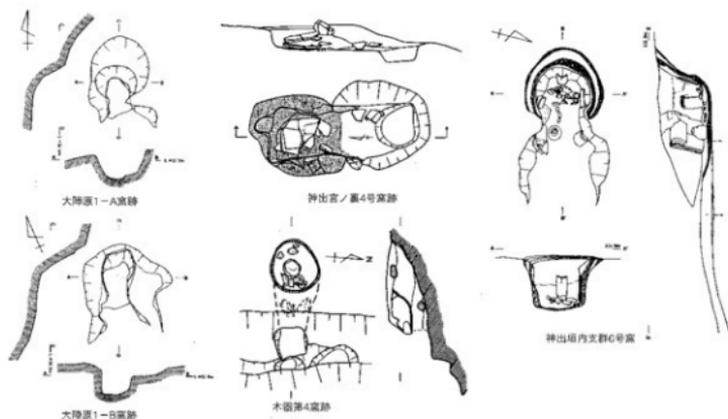
当該窯はいずれも半地下式で、佐藤氏のいうb類にあたる。窯室の径は40cm前後で、壁の残存高は25cm～50cmである。窯室の床は水平で、窯室内から焚口にかけて炭の堆積層がある。窯室内には2号窯では須恵窯の突帯窯、4号窯では石材が検出された。突帯窯と石材は焼成部と燃焼部の間仕切りを支える支柱と判断されるが、間仕切り片が存在したかどうかについては確認していない。

## (2) 煙管状窯の分布と須恵器窯

7基の窯跡の内訳は、1号窯、2号B窯、3号窯、4号B窯の4基が須恵器窯で、6号窯、2号A窯、4号A窯の3基が土師器煙管状窯である。このうち、1号窯と6号窯、2号B窯とA窯、4号B窯とA窯のそれぞれが前庭部を共有する形で検出されている。これらは一方が須恵器窯で、一方が土師器窯であり、調査時には操業の同時性の有無は確認されていないが、遺構の配置からみてそれぞれがセットで稼動していたと見なしてよい。このような須恵器窯と土師器窯のセット例としては、相生窯跡群の構谷3号窯（須恵器窯）と同2号窯（土師器煙管状窯）（註7）、大陣原1号窯（須恵器窯）と同1-A窯、1-B窯（土師器煙管状窯）、同3号窯（須恵器窯）と同3-A窯・3-B窯（土師器煙管状窯）（註8）、神出窯跡



第20図 兵庫県煙管状窯分布図



第21図 兵庫県下の煙管状窯形態図 (S:1/60)

群内支群中の6号窯(註9)、神出窯跡群宮ノ裏支群中の神出宮ノ裏4号窯(註11) 魚住窯跡群29号窯(須恵器窯)と須恵器煙管状窯の38号窯(註10)があり、当該窯跡群のみの事象ではない。また、セットとなる須恵器窯がない場合においても、煙管状窯は須恵器窯跡群内若しくは周辺に須恵器の窯群が存在している。この事例としては、三田窯跡群内の木器窯跡群第4号窯跡(三田市)(註12)がある。また、但馬の養父市寺地1号窯・2号窯(註13)は周辺に播磨系の平安後期の須恵器窯が存在する。

このように煙管状窯の分布は平安後期の須恵器窯の分布と重なることがわかる。このことについて、佐藤氏は播磨地域における須恵器生産の特徴的な形態(窯窓との焼成器種の補充関係)として定着したと述べ、また、播磨とその周辺では、まず、須恵器生産地において煙管状窯が採用され、その後技術基盤を同じくする回転土師器生産に窯構造が採用されたと指摘している。確かに上述の養父市の寺地1号窯・2号窯は周辺に播磨系の平安後期の須恵器窯が存在し、今回報告の平松神社窯跡群の須恵器窯も窯構造は播磨特有の地上式窯であり、生産器種も突落釜など明らかに播磨系特有の器種である。煙管状窯が播磨での須恵器窯技術の延長線上で生まれたものかどうかは確定には至っていないが、佐藤氏のいう須恵器生産地での採用、すなわち須恵器窯と煙管状窯は不可分の関係にあることはほぼ間違いないところであろう。煙管状窯の分布は香川県、岡山県、福岡県・大分県の瀬戸内海地域に広がる。佐藤氏は北九州域などの出現経緯を播磨周辺からの直接的な技術交流で捉えるのは困難としている。ただ、大分県の須恵器窯のように九州の須恵器窯構造の系譜には連ならない播磨の須恵器構造に近い窯構造をもつものがあり(註14)、今一度、瀬戸内地域という大きな地域枠の中で煙管状窯の出現・伝播を考えてみる必要があると思われる。

ところで、当窯跡群では、1号窯・2号B窯・4号B窯の各須恵器窯に6号窯・2号A窯・4号A窯の煙管状土師器窯がそれぞれ付随する。この現象は相生窯跡群以下の播磨の緒窯に認められる特徴であり、須恵器窯と煙管状窯が不可分の関係にあることはすでに述べたことである。一方、須恵器窯と煙管状窯の焼成器種は明らかに異なっており、生産器種から見ると、須恵器と土師器の両方の工人が存在したように見える。しかしながら、土師器工人がわざわざ須恵器窯の竈に接して窯を築くであろうか。煙管状窯の焼成品が須恵器系技術を取り入れた回転土師器であるという点からみて、須恵器窯と煙管状窯の工人は同一であったと考えざるを得ず、須恵器生産を補充する形で土師器の生産を行っていたと考える。播磨を中心に発見されている煙管状窯では、土師器の生産器種が杯・小皿・托状形皿のほぼ3種に限られており、すべて成形にロクロが使用されている。器種とロクロ使用の技術の共通性からみて、須恵器工人が生産器種を作り分けて須恵器と土師器の両方の生産を行っていたと考えた方が妥当ではないだろうか。

須恵器窯と煙管状窯というように須恵器と土師器を焼く窯の使い分けの事例ではないが、三木市久留米窯跡群は平安時代後期の瓦陶兼業窯群で、瓦・須恵器とともに土師器を焼成している。この事象をもって、報告書(註15)では土師器工人が須恵器工人とともに六勝寺造営関係の瓦生産に動員され、合同を継いで土師器工人が土師器の焼成を行なったと記述したが、須恵器窯場における煙管状窯を使用している補完的な土師器焼成という生産図式が久留米窯跡群においても適用できるならば、土師器工人が動員されたのではなく、須恵器工人が補完的に土師器を生産したと考えを改める必要がある。

須恵器生産と土師器生産の一体的経営が指摘されている地域例に、時代は違いますが、北陸地域がある(註16)。播磨を中心とした地域の平安後期の土器生産と同列に論じられるかどうかは検討の余地はあるが、平安後期の須恵器と土師器生産体制の問題については、今後詳細に検討される必要がある。

## 2. 遺物について

### (1) 遺物の器種構成と特徴

#### 須恵器

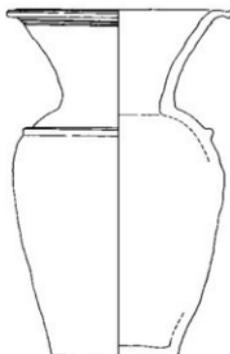
3号窯出土の相輪の請花台と思われる特殊物を除けば、椀・小皿・突帯壺・鉢・甕の雑器類に限られる。椀は平高台を消失し、平底であるが、底径は小さく平安前期以来の糸切り椀の形態を保持している。また、小型の椀も少量ではあるが、生産を行なっている。小皿も一定量生産されており、土師器小皿に比べて器高が高く、体部が直線的であるのが特徴である。突帯壺も各窯に認められるが、ほぼ全体の形態がわかるのは2号A窯出土の209のみである。突帯壺は平安前期以来の2本突帯付の双耳壺の系譜を引くものであるが、耳は消失し、突帯も1本となっている。この形態の突帯壺の焼成例は神出窯跡群堂ノ前支群などがある(註17)。鉢は口頭部が「く」字状に屈曲する古い形態を残すものと屈曲せず、神出・魚住窯の定形化した鉢形態に近くなっているものがある。大きさは2種あり、口縁端部が外方に突出するのが特徴である。甕は口縁部を上方につまみ上げるのが特徴で、大小あるが、大型甕が出土しているのは3号窯のみである。

#### 土師器

煙管状窯での生産器種は杯・小皿・托状形皿の3種に限られ、すべて回転糸切りである。杯は口径に対して底径が広く、体部が直線的に斜め上方に開くのが特徴である。小皿は須恵器に比べて器高が低く、器壁が厚い。托状形皿は須恵器にはない器種で、底部内面に大きな段をもち体部がほぼ水平気味に開くのが特徴である。以上の器種は各地の煙管状窯や久留美窯跡群においても共通して認められる。

### (2) 遺物からみた窯の操業年代

3号窯は1号窯および2号A窯・B窯より下方に位置しており、本来であれば、灰原の被覆あるいはその逆の切り合い関係によって操業の先後関



第22図 神山窯跡群堂ノ前支群出土突帯壺(S:1/4)  
(丹治康明 1984年 掲載図をトレース加工)



第23図 煙管状窯焼成器種 (S:1/4)

係が示されるはずであるが、当該窯跡群の場合、畑地の開墾・造成によってもとの斜面の形状が大きく損なわれており、遺構の重複による窯の先後関係は確認できなかった。ただ、本窯のように斜面の上下に複数の窯が存在する場合、操業当初の窯は斜面の裾部に構築されるのが通常と思われ、また、窯の規模の点からも3号窯が先行する可能性はある。一方、遺物についてみると、例えば、この時期に変化を遂げる須恵器鉢についても、いずれの窯出土の鉢も口縁端部が下方に突出する特徴をもっており、形の差異を見出すことはできない。このほかの器種も同様で、各窯の先後関係を示すような大きな形態差を見出すことはできない。遺構・遺物からは、窯跡群の操業期間は長期にわたるものではないものと判断される。

窯の操業年代について遺物から簡単に検討しておく。まず、須恵器からみると、椀については高台を消失しており、鉢については平安前期以来の鉢の最後の形態を留めており、神出窯のような定形化した片口鉢の形態の変化には至っていない。この須恵器椀・鉢を含め、土師器の杯・小皿・托状形皿に近い形態的特徴をもつ土器群を焼成し、年代観が示されている窯跡としては三木市の久留美柳谷5号窯・宮の池窯が該当すると考える。久留美柳谷5号窯・宮の池窯については確定には至っていないが、12世紀前後の操業年代を想定している。また、突帯壺については、生産地例として神出窯跡群堂ノ前支群(註18)、遺跡山上例としては福岡県武蔵寺経塚(註19)・同丸山経塚(註20)出土例があり、ともに神出窯跡群製とほぼ断定できるものである。丸山経塚出土例には天治2年(1125)の墨書があり、武蔵寺経塚出土例もほぼこの時期に近い年代が推定されている。一方、生産地である神出窯跡群堂ノ前支群出土例は12世紀初頃の年代が与えられており、突帯壺の年代については、消費地への流通、使用期間を考慮すれば、12世紀前後が1つの目安となる。以上、比較検討する資料が少なく、断片的な特徴から判断せざるを得ないが、今のところ、平松窯跡群の操業期については12世紀はじめの年代を想定しておきたい。

### 3. まとめにかえて

今回、発掘調査を実施した煙管状窯は丹波地方での初めての発見・調査例であり、須恵器窯についても、丹波北部では数少ない平安後期の須恵器窯の1つである。煙管状窯の分布は須恵器窯の分布と不可分の関係にあることはこれまで指摘されてきたことであるが、今回発掘調査の平松窯跡群はその関係を如実に示した調査事例として注目してよい。また、播磨周辺地域では須恵器工人が煙管状窯を用いて補完的に土師器生産を行なった可能性が高く、平安後期における土器生産のあり方についても検討する必要がある。

窯の構造、遺物は播磨系の技術的特徴をもつ。遺跡が所在する丹波市は瀬戸内海に注ぐ加古川の最上流部に位置しており、加古川の交易・流通の中で伝播したと考えられる。康和4年(1102)の「丹波国司下文」(註21)がある。この下文は、木工頭兼丹波守高階為章が丹波大山庄下司に下文を発して、高砂津に曳き置している材木の曳進ために人夫を30人召進するよう命じたものである。窯跡群の稼働時期と符合する12世紀初頃の加古川水系の交通を示す史料として注日してよい。

煙管状窯については魚住窯跡群で発見されて25年以上が経過し、近年、佐藤竜馬氏や木立雅朗氏による研究があるが、成立の時期や技術伝播の問題について多くの課題が残されたままである。今回の平松窯跡群では、遺構の残存状況が悪いために窯構造の詳細については不明な点が多く残されたが、これまで発見されていなかった地域での貴重な発見であり、今後の調査研究のうえで貴重な調査例である。

窯跡群の操業期については、播磨地方の窯跡出土遺物の年代観から12世紀初頃の年代を想定したが、当地方での当該時期の窯跡資料に欠いているので、確定的なものではない。新たな資料の発見を待って改めて検討したい。

註

1. 大村敦通・水口富夫『魚住古窯跡群』1982年 兵庫県教育委員会
2. 註1に同じ
3. 森内秀造・池田征弘他『久留美・跡部窯跡群』1999年 兵庫県教育委員会
4. 註1に同じ
5. 窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年 真陽社
6. 佐藤竜馬「第2章 各地域の土師器生産と土師焼成遺構 第2節 近畿以西」『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年 真陽社
7. 森内秀造『埋蔵資料 2 窯跡資料 29 構谷2号・3号窯跡』『相生市史』第5巻 1989年 兵庫県相生市相生市教育委員会
8. 種定淳介『大陣原古窯跡群』1995年 兵庫県教育委員会
9. 久保弘幸・池田征弘・岡本一秀『神出窯跡群』1998年 兵庫県教育委員会
10. 註1に同じ。魚住窯跡群内で発見されている煙管状には40号窯  
(守島孝一・鏑柄俊夫他『魚住古窯跡群発掘調査報告書』1985年 明石市教育委員会)
11. 丹治康明『神出古窯址群』『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』1983年 神戸市教育委員会  
このほかにも池ノ下支群など多くの煙管状窯が発見されている。
12. 『高平土地改良区は場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録』『兵庫県三田市文化財調査報告』第7冊 1990年 三田市教育委員会
13. 久保弘幸・鐵英記『寺地遺跡』『平成15年度年報』2005年 兵庫県教育委員会
14. 石木秀賢『豊後』『須志器窯構遺資料集』2 2004年 窯跡研究会
15. 註3に同じ
16. 望月精司「第2章 各地域の土師器生産と土師焼成遺構 第2節 北陸」  
『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年 真陽社
17. 丹治康明『神出古窯址群発掘調査概要』『昭和58年度埋蔵専門職員研修会資料』1984年 兵庫県教育委員会
18. 註16に同じ
19. 小田富士雄・宮小路賢宏『武蔵寺経塚』1970年 武蔵守史編さん会
20. 井口嘉祐・高橋照彦『特別陳列経塚出土陶磁展6 九州地方に埋納されたやきもの』2000年 奈良国立博物館
21. 『東寺百合文書』(『兵庫県史 史料編 古代2』所収)

丹波国司下文

下 大山庄下司

可早令召遣人火參拾人事

右伴人天、曳置高砂津之材不為令曳遣、

早可令

召遣、急速御用料也、不可延引、即立券

庄之使者、

數以不可隱因務、若有國使入催之事者、

早可令

言上子細、下可宣承知、依得行之、故下、

康和四年八月四日

木工頭兼丹波守高階朝臣(花押)

## 第4章 平松古墳群の調査

### 第1節 概要

#### 1. 古墳の立地環境

平松古墳群は、丹波市春日町平松に所在する。古墳群は黒井川右岸（南）の、丹波山地から北向きに派生する支尾根上に立地しており、標高は約160mを測る。平松古墳群からは北方を中心に視界が開け、黒井川からその北に広がる丹・但国境をなす山塊まで望むことができる。平松4号墳は、古墳群中で最も尾根の基部に近い南端に位置しており、その東西は比較的急峻な谷となっている。また南側は急峻に下って鞍部を形成した後、尾根へと至る（第24図）。

#### 2. 調査の概要

古墳が、山地から派生する尾根の頂上部に位置するため、重機等の進入が困難であることから、調査はすべて人力により実施した。

調査前に実施した墳丘の現況測量によって、今回の調査範囲は、平松4号墳の墳丘北側の一部、および北～北東側に設けられた堀切が調査範囲外となっていることが明らかとなった。現況測量後、表土を除去し埋葬主体の検出をおこなった。墓壇内の埋土が不鮮明であったため、当初複数の墓壇が存在するものと誤認していたが、一部に小規模な補助トレンチを設定して調査した結果、墓壇が1基であることが確認された。

墓壇内の調査は、埋土の堆積状況を確認するため、十字形の畦を残しておこなった。墓壇北西隅に近い埋土上部では、墓壇上に埋置されたと思われる須恵器群が検出された。棺の痕跡は明瞭ではなかったが、棺内下底付近からは、鉄器類を中心とした遺物が検出された。また、人骨は遺存していなかった。

なお埋葬主体部の図化は担当者が行ったが、調査後の墳丘測量については空中写真測量を実施した。

### 第2節 遺構と遺物

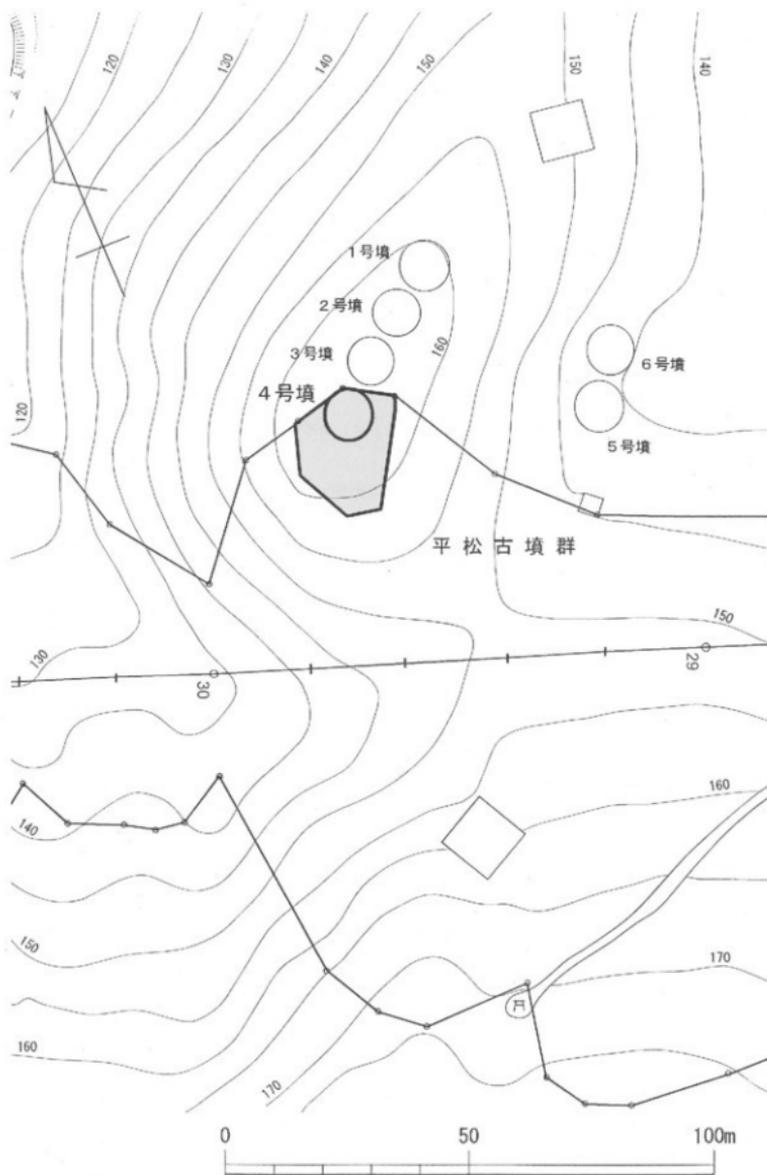
#### 1. 遺構

##### (1) 墳丘（第25・26図）

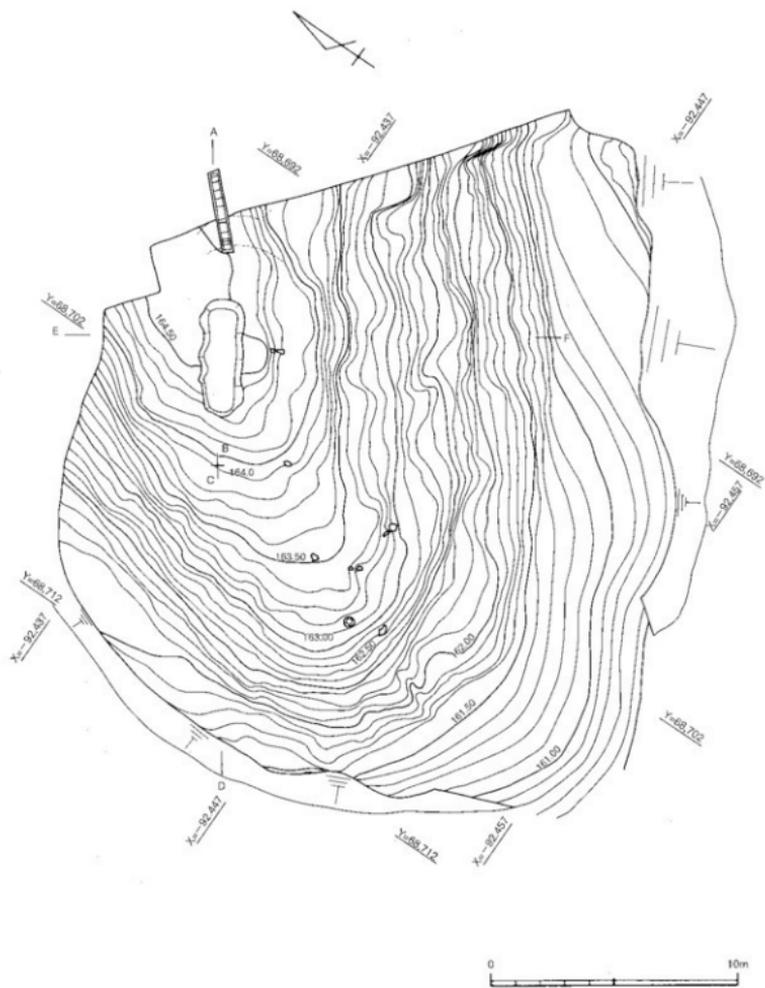
平松4号墳が立地する支尾根は、南西→北東にのびる。支尾根の北西・南東側は急峻な谷となり、南側も急峻な斜面から鞍部に至るため、この3方向には墳丘を画する堀切は設けられていなかった。墳丘は支尾根の延長方向に長い、盃んだ円（楕円）墳であると判断された。これは支尾根の延長方向によって規制されたものであろう。

支尾根がのびる北東側には、墳丘を画する堀切が設けられているが、調査区境界付近にあたるため、補助トレンチによってごく一部を確認するにとどめるを得なかった。このため堀切の形態・規模は不明であるが、一般的な尾根上の古墳のあり方からみて、円弧ないしは馬蹄形の堀切と推測される。堀切付近での断面観察によれば、墳丘の直下は軟質の風化岩盤が露呈しており、堀切も一部でこの岩盤を掘りこんでいる。

断面図（第26図）に示されるとおり、墳丘の盛土はほとんど遺存しておらず、表土直下で墓壇が検出可能な状況であった。墳丘裾を基準とした規模は、長軸約10m、短軸約7.5mを測る。また北東側の堀切底からみた墳丘遺存高は、0.7m前後であった。



第24图 平松古墳群 調査区位置图



第25图 平松4号墳 填丘実測图

墳丘南北断面図



- 1 表土  
 2 発切内面土 (黄褐色砂質土)  
 3 発切外面土 (黄褐色砂質土)  
 4 埴山または盛土 (赤褐色砂質土)  
 5 盛土 (黄褐色砂質土)

164.0m  
C



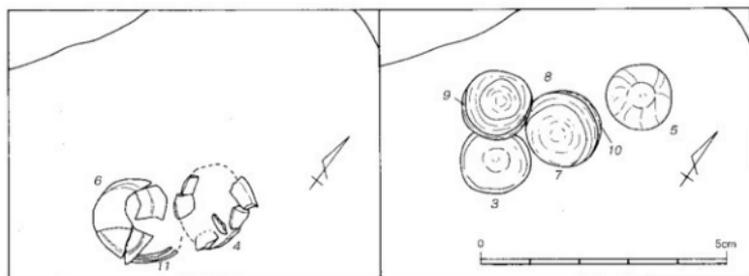
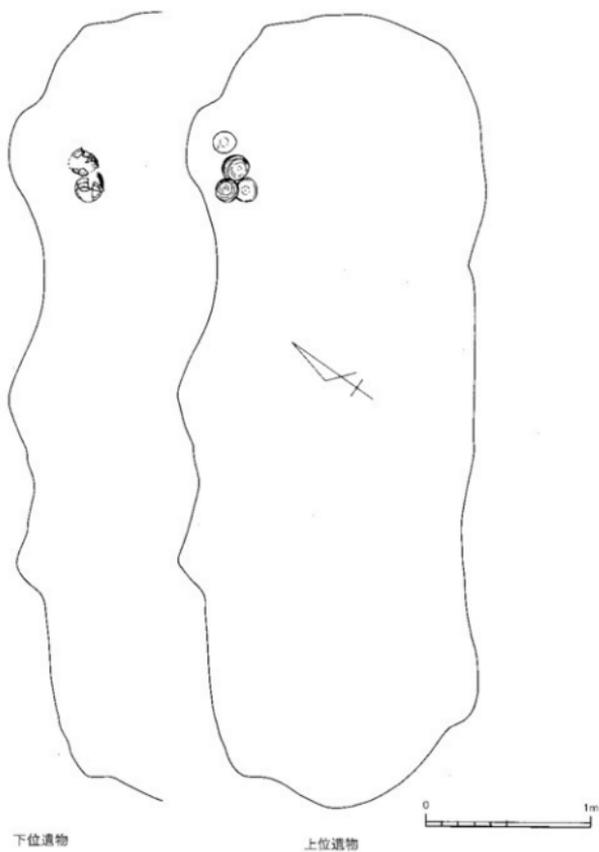
墳丘東西断面図



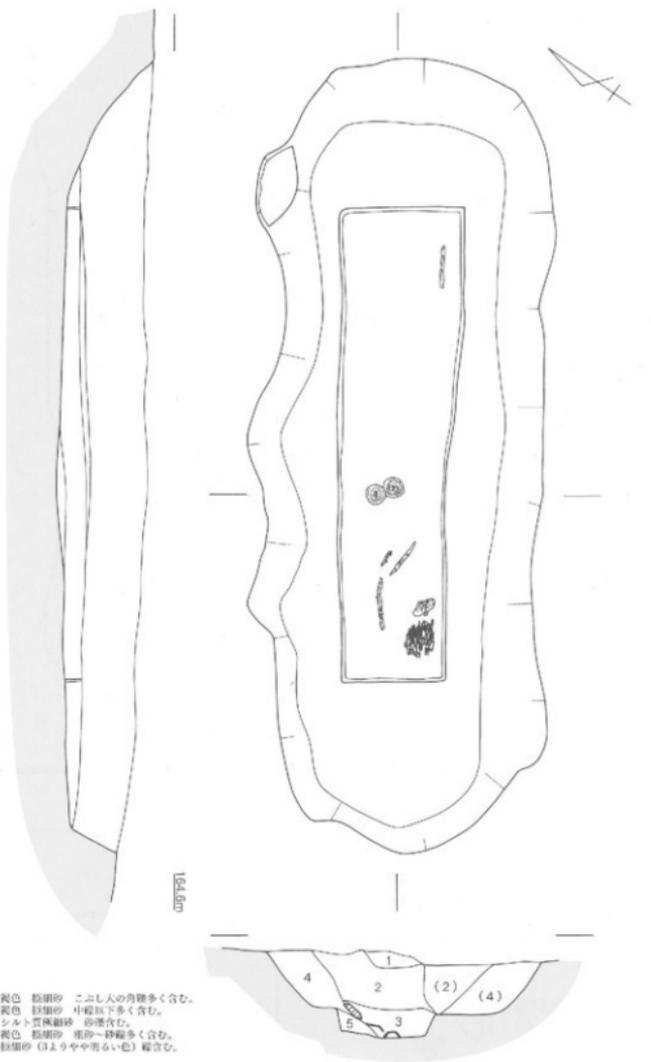
- 1 表土 (赤褐色砂質土)  
 2 盛土 (赤褐色砂質土)  
 3 盛土 (黄褐色砂質土)  
 4 盛土 (黄褐色砂質土<シルト質>)  
 5 後部の盛土 (黄褐色砂質土)  
 6 主体部盛土  
 7 主体部埋土



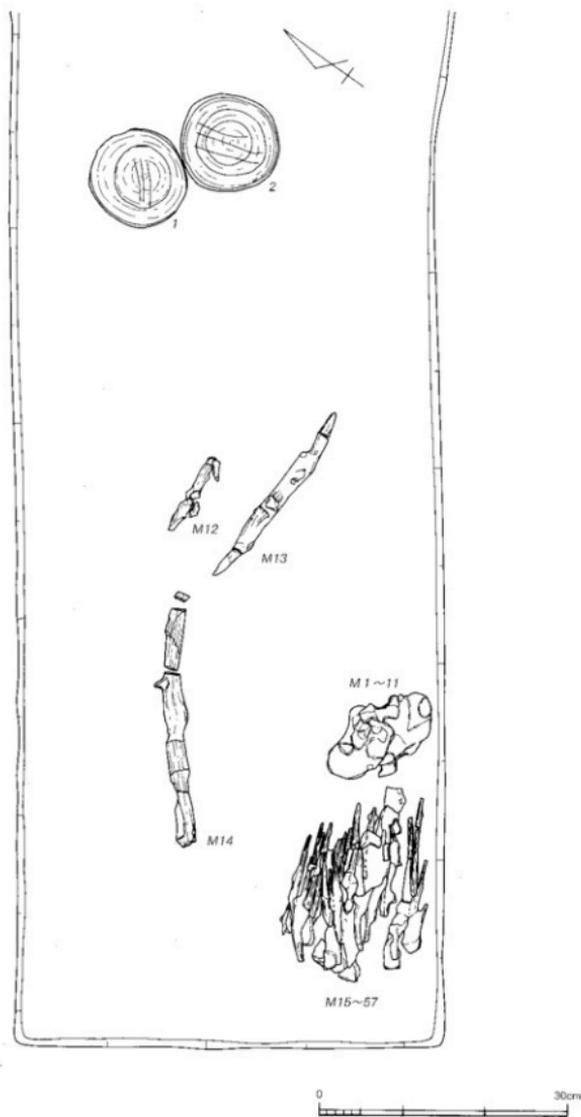
第26図 墳丘土層断面図



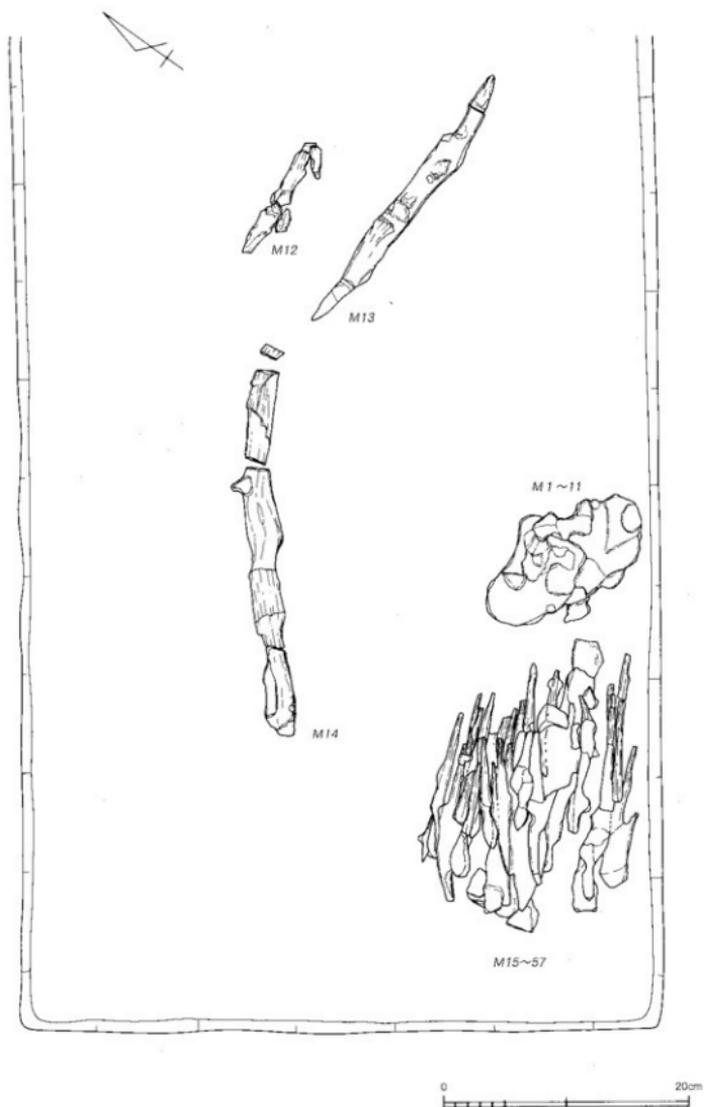
第27図 墓壙内遺物出土状況



第28図 主体部 平面図・断面図



第29図 槽内遺物出土状況①(南小口付近)



第30图 棺内遺物出土状況②(南小口付近)

## (2) 埋葬主体部 (第27~29図)

埋葬主体部は、墳丘中央部より1基が検出された。棺の痕跡は明瞭ではなかったが、木棺直葬であったと考えられる。

墓壇は一部風化岩盤を掘りこんでおり、長さ4.8m、幅1.9m、深さ0.5mの、ややいびつな隅丸の矩形を呈する。墓壇内は黄褐色〜暗黄褐色を呈する、小礫まじりの細砂〜極細砂により埋没していた。墓壇内を充填した埋土と、木棺内への流入土の境界は極めて不鮮明で、これが当初、主体部を2基と誤認した原因でもある。

墓壇底はほぼ平坦に整えられており、その中央に木棺を設置したと考えられる、浅い矩形の掘りこみが認められた。この掘り込みの深さは6cm前後を測る。

木棺の痕跡は極めて不鮮明で、墓壇埋土中を掘削中に数回にわたっておこなった精査でも、識別することはできなかった。従って、木棺の内法量、材の厚さ等は不明である。木棺の外形を示すと思われる墓壇底の掘りこみは、長さ2.9m、北東側小口幅0.76m、南西側小口幅0.64mを測る。

## (3) 遺物の出土状況

墓壇北東隅の埋土上部からは、須恵器6点、土師器3点が出土した(第27図)。これらは検出面直下の墓壇埋土中より一括して検出されたこと、須恵器が蓋と身のセット関係を保っていたこと等から、墓壇埋め戻しの時点で同時に埋置された副葬品と考えてよからう。土器の上面と下底のレベル差は、17cmほどである。

棺中央からやや南西寄りの底面からは、須恵器杯蓋・身各1点が出土した(第28・29図)。いずれも口縁部を下にしており、また、蓋の天井部、身の底面にはヘラ描きによる3条の沈線が描かれている。こうした共通性から、この杯身・蓋はセット関係にあるものと判断した。これらは検出当初、土器枕かと考えたが、詳細に検討すると、杯蓋はほぼ水平な状態で棺底に密着しているものの、杯身は棺内への流入土に沿う形で傾斜していて棺底に密着していないこと、蓋と身の下面に最大で7cmのレベル差があること等から、枕ではなく棺上に置かれた遺物が落下したものと考えたほうがよいと思われる。

棺内北東隅からは鉄刀1振り、棺内南西側90cmほどの範囲からは、鉄刀・刀子・馬具・鉄鏃などがまとまって出土した(第29・30図)。北東隅の鉄刀は、遺体頭部に添えられたものと思われ、棺の側板に沿うように置かれる。南西部の鉄刀・刀子は、いずれも西側に切っ先を向け、刀・振りと刀子が棺の長軸に斜行するように、他の刀一振りは棺ほぼ中央で長軸に平行に置かれていた。鉄鏃は棺南東隅にまとめられており、いずれも切っ先を南西側に向けている。馬具は鉄鏃の基部に接するように置かれていた。

こうした鉄製品の出土状況から、遺体は棺北東部に納められ、棺南西部は副葬品の領域とされていたことは明らかであるが、棺内に領域を画する施設が設けられていたか否かは明らかではない。

## 2. 遺物 (図版12~17)

### (1) 土器 (図版12)

主体部および墳丘より出土した土器類のうち、16点を報告する。なお、計測値については表2-1に一括する。

I・2は、棺内底面付近より出土した須恵器である。杯身・蓋は外れた状態で、ともに口縁部を下にして出土したが、いずれも3条のヘラ描き沈線が施され、胎土・焼成が近似することから、本来はセッ

ト関係にあったものと思われる。蓋(1)は、やや平坦化した天井部から、崩き気味にのびる口縁部を見せる。口縁端部には内傾する面が形成され、天井部と口縁部の境界には、明瞭な段差が認められる。杯身(2)は、丸みをおびた底部と、ほぼ水平にのびる蓋受け部を見せる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめられている。

3~11は、萬葉北西隅の埴土中より、一括して出土した土師器・須恵器である。

3は、土師器甕である。全体に半球形を呈している。器表面の調整は明らかではない。

4・5は土師器甕である。いずれもややいびつな球形を呈する体部へ底部を持ち、4は外反する口縁部を、5はわずかに開きつつ直線的に立ち上がる口縁部を見せる。いずれも、内外面ともにハケ調整が施され、5ではその後にはラ磨きが施されている。

6~11は、須恵器の蓋杯のセットである。いずれも蓋・身が組み合った状態で出土しており、図示した遺物の上下関係がそのセットを示す。

6~8は蓋である。いずれも天井部から丸みを持ちつつ口縁部へ至り、両者の区分は不明瞭である。6・7では、1条の沈線を境界部に巡らせる。また8では、境界部を弱い凹線状に成形して、その上縁に弱い稜線を巡らせている。6・7では、口縁内面にわずかな段を巡らせているが、8ではこれがきわめて弱い。

9~11は身である。9は底部を平坦に作るが、10・11では底部は丸く作られている。蓋受け部は、9・11ではやや斜め上方へのびるが、10ではほぼ水平にのびる。口縁部の立ち上がりはいずれも内傾し、10では口縁内面に弱い沈線を巡らせるが、9・11ではこれが認められない。いずれも、底部ないしは天井部にヘラケズリを施す。

12~16は、墳丘上ないしは墳丘斜面より出土した須恵器の破片である。出土状況から、4号墳に属する否かを判断することはできない。

12・15は蓋杯の身である。12の体部は著しく屈折し、やや異質な印象を受ける。

14は無蓋高杯の杯部であろうか。ほぼ平坦な底部から斜め上方へ開いて口縁部に至る。底部中央を欠くため、器種を確定できない。

16は杯身の底部である。律令期の所産と考えられるが、平松古墳群では他に当該時期の遺構・遺物を見ない。

## (2) 鉄器 (図版13~17)

馬具、刀、刀子、鉄鏃等が出土している。計測値については表2-2に一括する。

### 馬具 (図版13・14)

いわゆる内彎楕円形鏡板付轡と、これに伴う鈎具、辻金具が出土している。鞍・鎧等は出土していない。

M1~4は、内彎楕円形鏡板付轡である。出土時には各部分が完全に装着された状況であったが、取り上げ時に破損したため分離することとなった。薄い板状の鏡板は全体に楕円形を呈し、その上部に鎖が装着されるための方形の孔が設けられている。下部は浅く挟られた形態を見せる。鏡板中央には、轡と引き手金具を連結させるための、隅丸長方形の孔が設けられており、その上下に金具と鏡板を固定するための鉋孔が認められる。

轡と引き手金具の連結は、左側では断面が方形を呈する鉄製の環が用いられているが、右側では鉄線に紐状の繕りかけたものが用いられていることから、いずれかが破損したための補修と推察される。

また引き手の結合は、鏡板の外側でおこなわれている。

M5は長方形を呈する鉸具である。M6～8は、これにともなう皮帯への履き具であろうか。

M9～11は辻金具である。いずれも円形の中央部から、M9は四方に、他は三方に脚をもつ。脚の先端は、M9のみが丸く、他はいずれも方形を呈する。金具中央は表面側に半球形の膨らみをもったようであるが、いずれも破損している。脚の基部には、帯を綴じた締め金具が残り、脚中央にはいずれも1本の鉸、あるいは鉸穴が残されている。

#### 鉄刀 (図版14)

鉄刀は3点が出土した。

M12は、木棺北東隅より出土した。遺体の頭部脇に添えられたと考えられる鉄刀である。先端から茎部までほぼ完存しているが、刃部は錆化による細かな破断が連続している。身部やや先端寄りと、身部との境界に接する茎部に木質が遺存している。

M13・14は、棺内中央からやや南西寄りの位置で出土した。M13は先端を欠くが、他の部位はよく残っている。先端付近と、身の背部、茎の一部に木質が遺存している。また、茎の下部には束を固定するための鉸が残る。M14は棺内の南西寄りから出土した、最も大型の刀である。身部のほぼ全面に木質が残ることから、木製鞘に納められた状態で副葬されたと思われる。茎の基端部に、鉸孔が設けられている。

#### 刀子 (図版17)

M56は、中央で折れ曲がっているが、小型の刀子であろう。鉄刀M13と並ぶような位置から出土した。茎部には束の一部が付着しているが、今回、分析等はおこなっていない。

#### 鉄鏃 (図版15～17)

鉄鏃は、棺内南東隅からまとまって出土した。いずれも先端を南西(棺小口方向)に向ける。矢柄が装着されていたならば、当然、馬具類の出土位置にも重複していたはずである。

出土した鉄鏃は、鏃身部の形態と大きさによって数群に区分される。

M15～18は大型の一群で、脇挟三角形鏃と呼ばれるものに相当する。身部は長三角形を呈し、中央では両側縁がほぼ平行する。逆刺は深く、弱い外反を示し、M15・16では二葉逆刺となっている。身部の断面形は扁平で、中央に稜を形成しない。頸部は長方形の断面を見せ、関節には段を設ける。

M19はやや小振りとなるが、M15～18とほぼ類同の形態を示す。

M57は、三角形鏃である。

M20～55は、身部が小型の鏃である。①身部が三角形を呈し、深い逆刺を見せるもの(M20・31)、②身部が長三角形で幅：長さが1：3前後を測り、深い逆刺を見せるもの(M21～24、M26・33・37)、③②と同様の形態を示すが、逆刺が顕著ではないもの(M43)、④身部が著しい長三角形で幅：長さが1：4以上に達し、深い逆刺を見せるもの(M25・27～30、32・34～36)、⑤身部が小型の三角形を呈し、浅い逆刺を持つもの(M42・44～55)、⑥身部が小型の三角形を呈し、逆刺を持たないもの(M39・40)、⑦身部の形態が不鮮明なもの(M38・41)に細分されるが、これらはいずれも、「長頭鏃」と呼称される鉄鏃の一群に包括されるものであろう。

身部の断面形態は、大部分が片丸造りとなっている。また関節は、鏃および木質の付着により明確でないものが多いが、大部分は台形関節と思われる。

### 第3節 小結

平松4号墳より出土した須恵器は、田辺編年（田辺昭三 1966、1981）によれば、概ねMT15型式に属するものと思われる。共存する内轡楕円形鏡板付轡および鉄鍔の型式も、この時期に相当すると考えて差し支えないと考えられる。従って平松4号墳は、6世紀前半代に築造されたと考えて大過なからう。須恵器の型式編年に基づき、鉄製馬具および鍔の年代を示す資料としてよくまとまっており、基準資料となりうるものである。

棺内出土の須恵器は、既述のように棺上遺物の落下の可能性がある。さらに、墓域埋め戻し完了の直前に、墓域内に須恵器・土師器を埋置している点は、棺を埋める際におこなわれる副葬が少なくとも2回に分けておこなわれたことを示しており興味深い。

なお、鉄製馬具（鏡板）の記述については植田論文（植田隆司 1999）を、鉄鍔の記述については杉山論文（杉山秀宏 1988）を参照した。

#### 引用・参考文献

- 植田隆司 1999 「内轡楕円形鏡板付轡の馬装」『龍谷史談』第111号  
杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鍔について」『橿原考古学研究所論集』第8  
田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』  
田辺昭三 1981 『須恵器大成』

## 第5章 石才大池遺跡

### 第1節 立地

丹波市水上町石生の水分かれを源流とする黒井川は、始め北へ向かった後、丹波市春日町に入った所で東へと向きを変える。その辺りは春日盆地の西奥部で、右岸の山裾に石才の集落がある。集落の背後には水上町城境にそびえる向山の山塊から派生する尾根が延び、北向きの斜面には険しい渓谷が刻まれている。

石才の集落を上り詰めた奥には溜め池（大池）が築かれており、さらにその谷の奥に北近畿豊岡自動車道の本線が通っている。この石才トンネルと歌道谷トンネルに挟まれた狭い谷の、僅かな平坦面に遺跡は立地している。

調査は東西約70m、南北約25mの三角形の範囲を対象とした。遺構を検出した平坦面は谷川を挟んで東西に向かい合っており、東区と西区に分けて記述する。

### 第2節 東区の遺構と遺物

#### 1. 調査の経過

谷川の右岸には路線内に3段の平坦面が認められ、それぞれに1T・2T・4Tの3本のトレンチを設定した。まず谷川寄りの上下2段の平坦面に設定した1T・2Tでは土石流が厚く堆積しており、遺構は認められなかった。

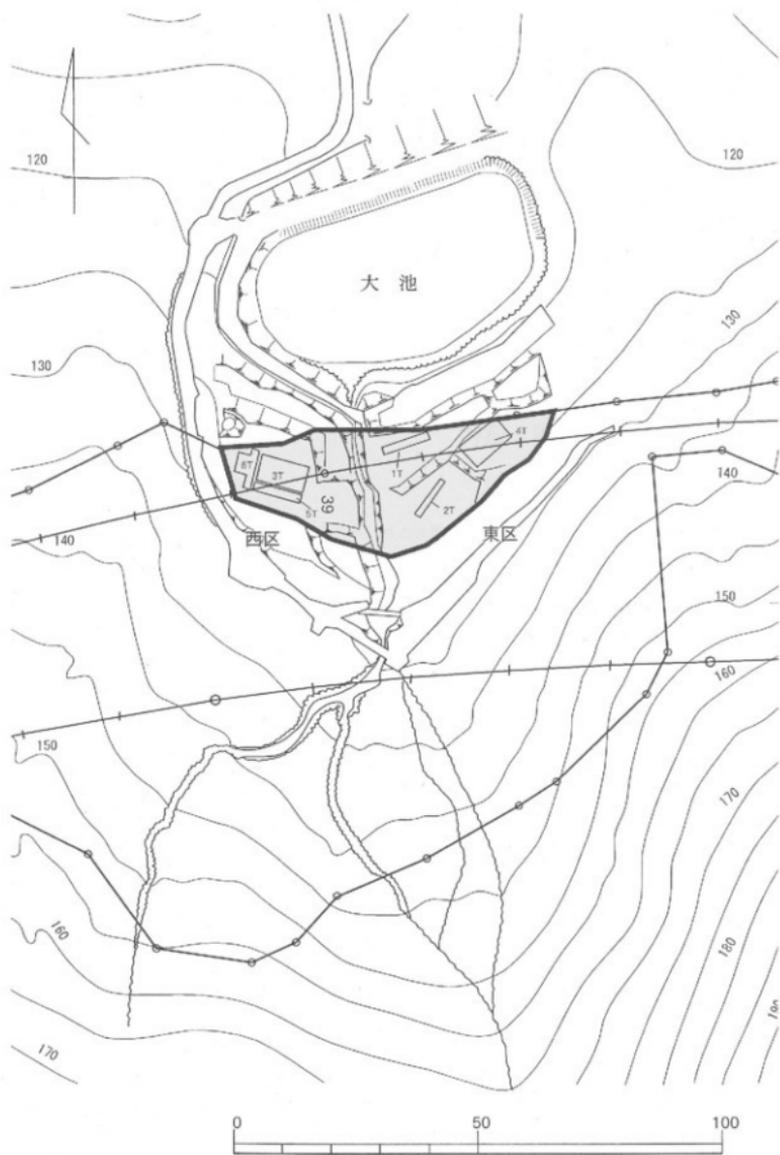
一方、谷の外側にあたる4Tでは土器・焼土が認められたため、トレンチを拡張して遺構を精査した結果、中世と飛鳥時代2時期の遺構面を検出した。

#### 2. 4Tの調査

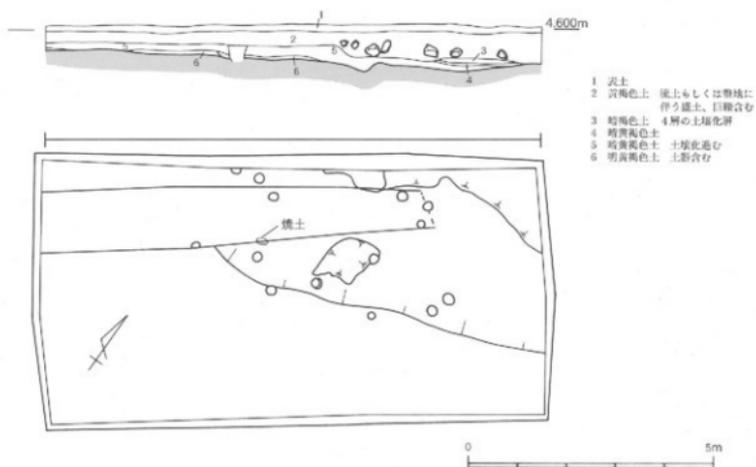
5層上面で中世の柱穴10箇所余りを検出したが、建物が復原できるような規則性は認められなかった。遺物も土師器の小皿片が出土したが、細片のため図化不能で、詳細な時期も不明である。

さらに6層の下面で焼土面を検出し、周辺から土師器甕(4)など飛鳥時代の土器が出土したため、カマドをもつ住居跡の存在を想定して精査を進めた。しかし数箇所に断ち削りを入れて確認したものの、明確な輪郭をもつ落ち込みあるいは柱穴などといった、焼土や遺物と有機的な関係を有する遺構が認められず、具体的な遺跡の性格は不明であった。

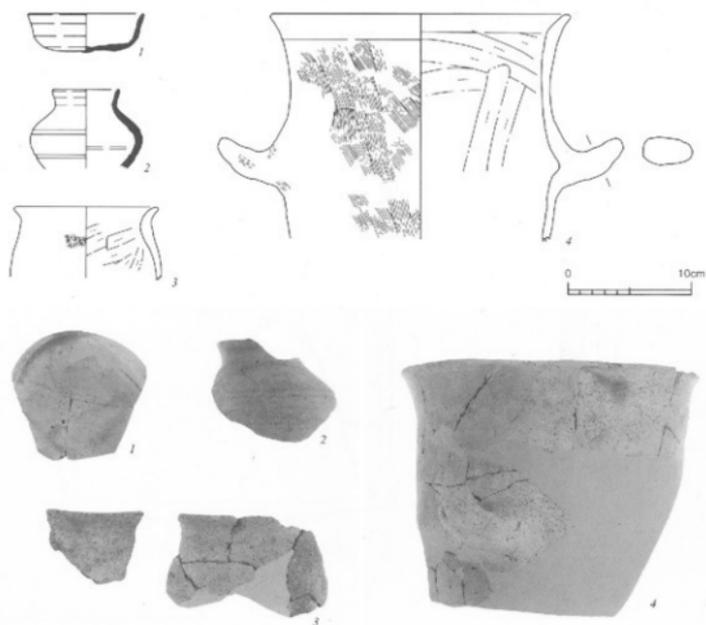
飛鳥時代の包含層から出土した土器4点を図化している。1は須恵器杯Aで、底部の切り離しはヘラ切り後未調整である。口径9.15cm、器高3.1cm、底径4.7cm。2は須恵器の小型短頸甕で、肩部と体部下半に凹線をめぐらす。底部は欠失する。口径5.2cm。3は土師器甕の口縁部片で、内面はヘラケズリで調整する。口径11.3cm。4は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片で、底部は欠失する。体部中位には角状の把手が付く。体部外面は縦方向のハケメ、内面はイタナデで調整する。口径23.6cm。



第31圖 石才大池遺跡 調査区配置圖

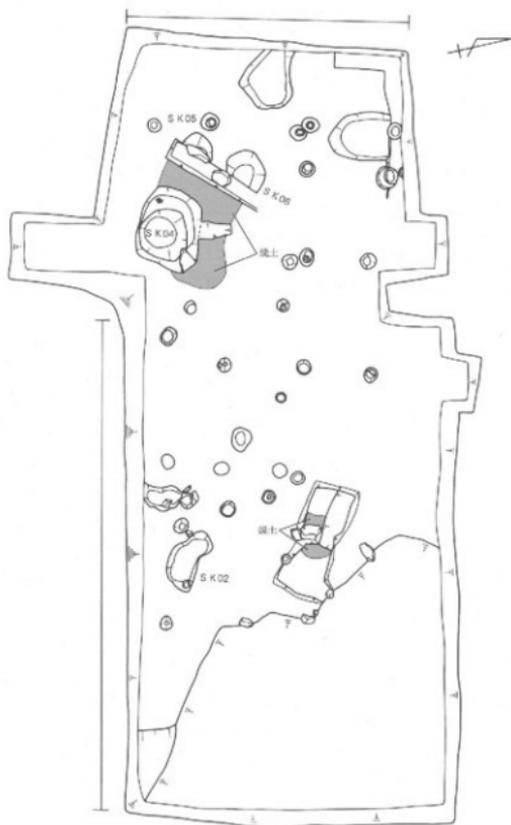
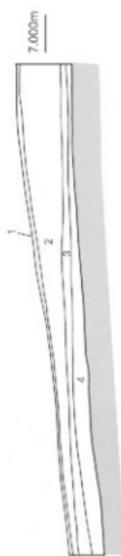
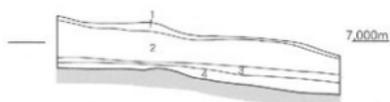


第32図 4トレンチ平面図・断面図



第33図 4トレンチ出土土器

- 1 黄土
- 2 黄褐色区画 上石炭による粗い層状層
- 3 黄土もしくは上石炭による堆積層
- 4 黒褐色細砂 土壌化地石、長多く含む



第34図 3・6トレンチ平面図・断面図

### 第3節 西区の遺構と遺物

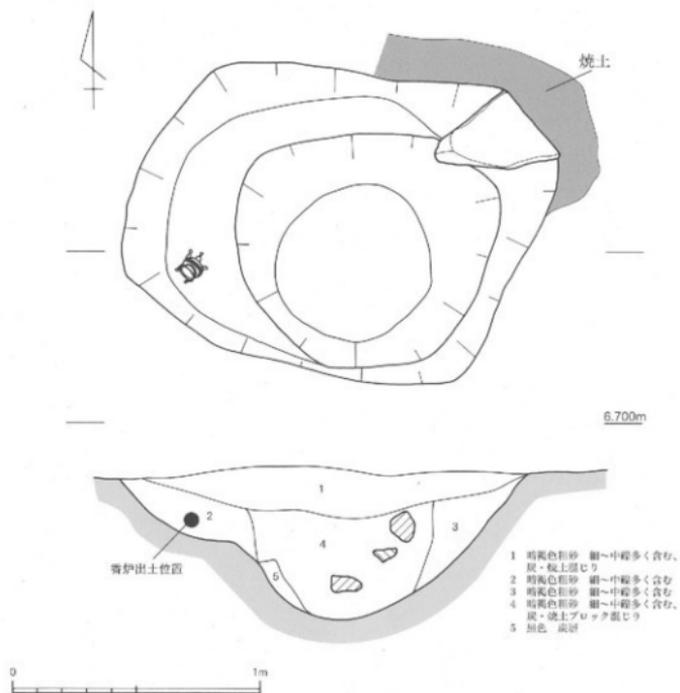
#### 1. 調査の経過

谷川左岸の平坦面に設定した3 Tで土器および焼土面が出土したことから、5 T・6 Tを追加して遺構の広がりを追究した。その結果、6 Tにおいてもさらに多量の焼土・炭混じり土が見つかったため、2つのトレンチを拡張・結合して遺構を精査した。

調査の結果3・6 Tでは、谷川寄りに崖面が現れてはいるものの、中央から西側の平坦面で、中世と飛鳥時代2時期の遺構を同一面で検出した。検出面は地表下約1 mの4層下面である。

#### 2. 中世

中世の遺構には6基の土坑や柱穴などがあり、中でも土坑S K04～06は、飛鳥時代の焼土面・炭層を掘り込んで作っている。

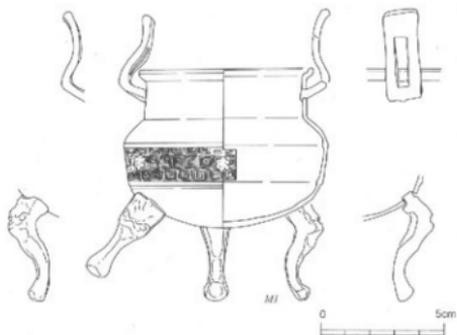


第35図 土坑S K04

土坑SK04（第33・34図）

平面は上面が東西1.6m、南北1.25mの隅丸長方形を呈するが、坑内の西寄りにはステップを残して、2段目は直径1mの不整形形に掘り込んでいる。ただし北東隅に露出した岩の部分は掘り残す。検出面からの深さは中央で0.6m、ステップの部分で0.3mである。

埋土の2・3層が裏込め状に立ち上がっているところから、中央には桶



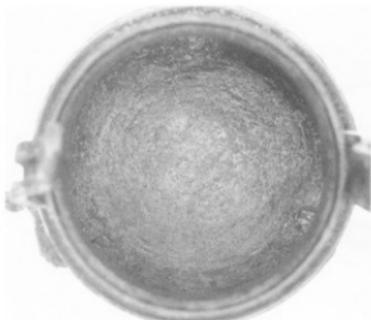
第36図 土坑SK04出土香炉



1 側面の合わせ痕



2 獣足と獣面



3 内面の仕上げ痕



4 底面の鑄痕

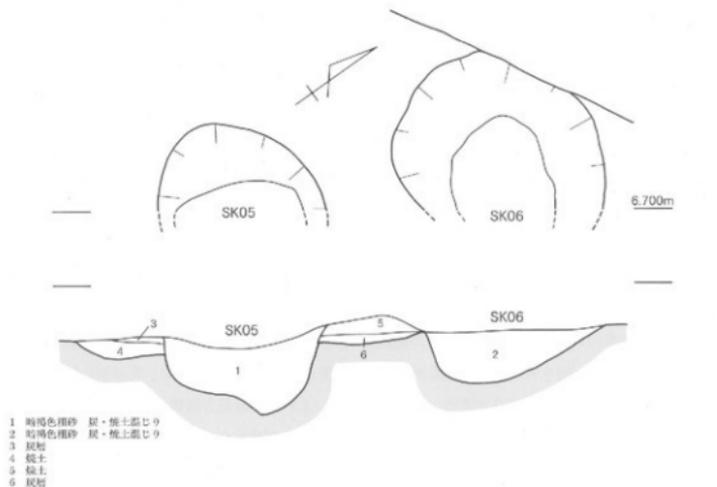
第37図 土坑SK04出土香炉細部写真

状の容器が据えられていた蓋然性が高い。ただし底面の掘り込みはボウル状である。本体が腐朽した後  
に落ち込んだ1・4層には焼土・炭が多く含まれているが、これは周辺の土砂が流入したものと考えら  
れる。

西側のステップの部分で、青銅製の香炉(M1)が出土した。出土時は横倒しの状況で、他に伴出遺  
物は無い。土層観察から、中央に想定される容器の裏込め部分に埋納されたものと考えられる。

M1は青銅製の鼎形香炉で、一部に変形があるものの、完形である。本体の頸部は直立し、口縁端部  
が短く外へ匙面状に開く。体部は外へ張り出した扁球形で、胴部上下端に段状の稜線を作り出し、その  
間を3段の雷文で埋める。雷文帯の中心には、6弁の花菱形の飾りを、6単位鑄出す。稜線の内面側  
にも、対応する稜が観察できる。側面には、鑄型の合わせ痕が観察できる。口縁部の匙面から頸部・肩  
部・底部外面には、仕上げの鑄痕が残る。別作りの部品で、両耳と三脚を取り付ける。耳は長方形の透  
かし孔をもった吊り手状で、弯曲して上方に伸びる。脚は獣足形で、外側に獣面(鑿鑿面)を鑄出し、  
裏側を削り込んでいる。耳と脚はそれぞれ頸部と底面に差し込んで、内側から鍛接して固定するが、一  
部は土圧によって歪んでいる。本体部分は口径6.9cm、器高6.5cm、胴部最大径8.3cm、器壁の厚さ1.5~  
2.5mm。耳は長さ3.75cm、幅1.4cm、脚は長さ4.5cm、幅0.55~1.5cm、全体の器高11.9cmである。  
土坑SK05・06(第35図)

SK04の北西側に2つ並んでいる。断ち割りを入れたため規模は不正確になってしまっている。SK  
05は不整形円で径0.65m、深さ0.35m、SK06は不整形円で径0.75m、深さ0.2mである。埋土には焼  
土・炭が多く含まれている。出土遺物は無い。



- 1 陶褐色埋砂 炭・焼土混じり
- 2 陶褐色埋砂 炭・焼土混じり
- 3 灰層
- 4 焼土
- 5 硬土
- 6 灰層

第38図 土坑SK05・06

土坑SK02（第33図）

3 Tの東寄りに位置する。平面は不整形で、径 $0.6 \times 1.3$ m、深さ $0.25$ mである。土師器小皿（5）が出土した。5は手握ね成形の土師器小皿で、直径 $4.2$ cm、器高 $0.85$ cmである。

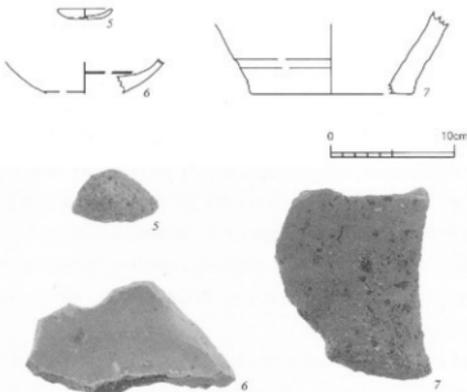
その他の出土遺物（第38図）

6は青磁碗の破片で、口縁部と底部を欠失する。見込みには陶線が走る。

7は丹波焼き壺の底部片で、底径 $12.9$ cmに復元できる。

### 3. 飛鳥時代

焼土面および炭層の広がりを検出した。明確な掘り込み等は認められなかったが、炭層のような遺構の下部であった可能性が高い。中世の遺構に切られており、図化できる遺物は無かったものの、飛鳥時代に帰属するものと考えられる。



第39図 3・6トレンチ出土土器

## 第4節 まとめ

谷を挟んだ2つの地点を調査し、それぞれの調査区で中世と飛鳥時代の遺構を検出した。ただし遺跡の立地が可能な平坦地は限られており、事業地内には今回の調査範囲以上に遺構面が広がる余地は残されていないものと考えられる。

飛鳥時代の遺跡の主体は、東区路線外北東側の、丘陵の掘り出し部分へ広がるものとみられる。火山9号墳の下層で検出したような、一時的な単独の住居跡の存在が想定され、西区の炭窯状の遺構との関連が考えられる。

西区で検出した土坑群は、青銅製香炉を埋納しているところから、墓もしくは供養のための埋納坑とみられる。包含層からは断片的な土器片しか出土していないため細かい時期は不明で、14世紀代以降の中世後半の所産としておく。仏教的な性格の強い遺物であるが、周辺に寺跡の存在は知られていない。

青銅製香炉の県内の類例としては、菅見の範囲では、西脇市比延前田遺跡が知られる。同巧の船形香炉ではあるが、径が一回り大きい割に器高が低い、雷文帯が頸部外面にもめぐり、花菱形の飾りが無い、耳は頂部が剣頭形で周囲に縁取りがある、脚に獣面が無いといった異同を指摘できる。同遺跡は14世紀～16世紀後半にかけて継続した方形居館で、外郭の土坑から香炉が出土したが、当遺跡例と同様、埋納時期は特定できない。

#### 参考文献

西脇市教育委員会2000『比延前田遺跡』西脇市文化財調査報告書 第8集

兵庫県教育委員会2005『火山古墳群・火山城跡・火山遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告書第283冊

表1 平松八幡神社窯跡群 出土土器一覧

1号窯・6号窯

報告番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土遺構
101	1	須恵器	小皿	8.3	2.5	4.8	1号窯窯体
102	1	須恵器	椀	(15.7)	—	—	1号窯窯体
103	1	須恵器	椀	(14.7)	—	—	1号窯窯体
104	1	須恵器	椀	(16.7)	6.3	(5.4)	1号窯窯体
105	1	須恵器	椀	(16.6)	(5.4)	(6.5)	1号窯窯体
106	1	須恵器	椀	(15.9)	5.2	(5.8)	1号窯窯体
107	1	須恵器	椀	(14.6)	5.2	(6.0)	1号窯窯体
108	1	須恵器	椀	(16.2)	5.6	(7.0)	1号窯窯体
109	1	須恵器	椀	—	(3.7)	6.4	1号窯窯体
110	1	須恵器	椀	(16.3)	4.7	(6.3)	1号窯窯体
111	1	須恵器	椀	14.7	5	7.1	1号窯窯体
112	1	須恵器	鉢	—	(8.9)	—	1号窯窯体
113	1	須恵器	小皿	—	(1.1)	(5.2)	6号窯窯体内
114	1	須恵器	小皿	—	—	(4.8)	6号窯窯体内
115	1	須恵器	小皿	—	—	(5.0)	6号窯窯体内
116	1	須恵器	椀	(15.2)	5.0	(6.2)	6号窯窯体内
117	1	須恵器	椀	(17.2)	6.0	(6.4)	6号窯窯体内
118	1	須恵器	椀	(17.9)	5.6	(6.7)	6号窯窯体内
119	1	須恵器	椀	(17.8)	4.9	(8.0)	6号窯窯体内
120	1	須恵器	椀	(15.7)	5.7	(7.2)	6号窯窯体内
121	1	須恵器	椀	(17.0)	5.3	(8.2)	6号窯窯体内
122	1	須恵器	鉢	(26.7)	(7.3)	—	6号窯窯体内
123	2	土師器	小皿	(8.1)	1.5	(5.1)	灰層
124	2	土師器	小皿	(8.9)	1.7	(6.0)	灰層
125	2	土師器	乳鉢形皿	—	—	5.8	襷形調査トレンチ3
126	2	土師器	杯	(16.8)	—	—	襷形調査トレンチ3
127	2	土師器	杯	—	—	(5.4)	—
128	2	須恵器	小皿	(8.2)	2.0	(5.3)	1号窯副辺
129	2	須恵器	小皿	(7.7)	1.7	(5.0)	灰層
130	2	須恵器	小皿	(8.0)	1.9	(4.4)	1号窯副辺
131	2	須恵器	皿	(7.9)	2.2	(4.9)	灰層
132	2	須恵器	小皿	—	—	(5.1)	灰層
133	2	須恵器	小皿	(8.5)	3.3	(3.6)	灰層
134	2	須恵器	小皿	—	(3.1)	(3.4)	灰層
135	2	須恵器	椀	(14.8)	—	—	灰層
136	2	須恵器	椀	(15.4)	—	—	灰層
137	2	須恵器	椀	(15.8)	—	—	灰層
138	2	須恵器	椀	(15.7)	4.3	(6.7)	灰層
139	2	須恵器	椀	16.0	4.8	6.9	灰層
140	2	須恵器	椀	(15.1)	4.5	(6.4)	灰層
141	2	須恵器	椀	(15.9)	4.8	(7.1)	灰層
142	2	須恵器	椀	(16.3)	(4.5)	(7.2)	灰層下方
143	2	須恵器	椀	(15.3)	4.9	(6.8)	灰層
144	2	須恵器	椀	(15.3)	4.9	(7.2)	灰層
145	2	須恵器	椀	14.6	4.5	5.0	灰層
146	2	須恵器	椀	—	—	(6.8)	灰層
147	3	須恵器	突帯壺	(20.8)	—	—	灰層
148	3	須恵器	突帯壺	—	—	—	灰層
149	3	須恵器	突帯壺	—	—	—	灰層
150	3	須恵器	壺?	—	—	(13.0)	1号窯
151	3	須恵器	鉢	(17.0)	—	—	灰層
152	3	須恵器	鉢	(19.6)	—	—	灰層
153	3	須恵器	鉢	(22.4)	—	—	灰層
154	3	須恵器	鉢	—	—	—	灰層
155	3	須恵器	鉢	(26.1)	—	—	灰層
156	3	須恵器	鉢	(28.1)	—	—	灰層
157	3	須恵器	鉢	(26.3)	(12.1)	(11.0)	灰層下方
158	3	須恵器	突帯壺	(22.6)	—	—	灰層
159	3	須恵器	壺	16.8	—	—	1号窯副辺

表1 平松八幡神社窯跡群 出土土器一覧

## 2号A窯・B窯

報告番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土遺構
201	4	土師器	托状形皿	(9.7)	(1.9)	—	2号A窯窯体
202	4	土師器	托状形皿	—	—	(4.7)	2号A窯窯体
203	4	土師器	托状形皿	—	—	4.8	2号A窯窯体
204	4	土師器	托状形皿	—	(1.6)	—	2号A窯窯体
205	4	土師器	杯	(14.8)	—	—	2号A窯窯体
206	4	土師器	杯	—	—	(7.0)	2号A窯窯体
207	4	須恵器	椀	(18.0)	(4.6)	(6.0)	2号A窯窯体
208	4	須恵器	椀	(17.0)	(5.2)	(7.0)	2号A窯窯体
209	4	須恵器	突舌壺	—	—	(10.6)	2号A窯窯体
210	4	土師器	小皿	(8.9)	(1.3)	(6.5)	SX201
211	4	土師器	小皿	(7.4)	9.5	(5.0)	SX201
212	4	土師器	小皿	(9.1)	—	—	SX201
213	4	土師器	小皿	(9.4)	1.5	(6.7)	SX201
214	4	土師器	小皿	(7.8)	(1.2)	(5.3)	SX201
215	4	土師器	小皿	(9.0)	(1.2)	(6.4)	SX201
216	4	土師器	托状形皿	—	—	(7.6)	SX201
217	4	土師器	托状形皿	(13.2)	(3.5)	(4.9)	SX201
218	4	土師器	托状形皿	—	—	(7.4)	SX201
219	4	土師器	杯	(16.9)	(3.1)	(9.0)	SX201
220	4	土師器	杯	(14.8)	3.0	8.8	確認調査トレンチ3 (SX201)
221	4	土師器	杯	—	—	(8.2)	SX201
222	4	須恵器	椀	(16.4)	6.1	6.5	SX201
223	4	須恵器	椀	16.9	6.2	7.5	SX201
224	4	須恵器	椀	(15.0)	(4.7)	(7.1)	SX201
225	4	須恵器	椀	(15.7)	(4.7)	(7.2)	SX201
226	4	須恵器	椀	(16.4)	5.2	7.2	確認調査トレンチ3 (SX201)
227	4	須恵器	鉢	(29.2)	(12.8)	8.8	SX201
229	神田 13	須恵器	壺	(15.7)	—	—	確認調査トレンチ3
229	神田 13	須恵器	壺	(22.7)	—	—	確認調査トレンチ3
230	神田 13	土師器	托状形皿	(15.8)	3.7	(8.0)	確認調査トレンチ3
231	神田 13	土師器	托状形皿	—	—	7.8	確認調査トレンチ3

## 3号窯

報告番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土遺構
301	5	須恵器	小皿	8.0	2.1	4.2	窯体床面
302	5	須恵器	椀	15.0	(4.9)	(7.5)	焼成部下半
303	5	須恵器	椀	(15.7)	(5.3)	(7.1)	窯体
304	5	須恵器	椀	15 ~ 16	6.6	6.0	窯体面
305	5	須恵器	椀	(14.7)	5.0	(6.7)	焼成部下半
306	5	須恵器	椀	(13.8)	4.6	6.2	焼成部下半
307	5	須恵器	椀	14.5	5.0	6.6	窯体
308	5	須恵器	椀	(16.1)	3.8	7.9	灰産
309	5	須恵器	鉢	(19.3)	—	—	窯体
310	5	須恵器	鉢	(15.9)	6.4	(8.0)	窯体
311	5	須恵器	鉢	(19.2)	(9.5)	8.2	窯体
312	6	須恵器	相輪(踏花台)?	—	—	—	焼成部下半
313	6	須恵器	相輪(踏花台)?	—	—	—	床面
314	6	須恵器	壺	—	—	(21.2)	窯体
315	6	須恵器	壺	(50.4)	—	—	床面
316	6	須恵器	壺	(44.3)	(23.0)	—	灰産
317	7	須恵器	小皿	(7.8)	2.3	3.5	灰産(前扉部)
318	7	須恵器	小皿	(7.2)	2.0	(3.8)	灰産
319	7	須恵器	小皿	(7.7)	2.0	3.5	灰産(前扉部)
320	7	須恵器	小皿	(8.7)	2.1	(5.0)	灰産
321	7	須恵器	小皿	(7.2)	1.8	(3.5)	灰産(前扉部)
322	7	須恵器	小皿	7.6	2.2	3.7	灰産(前扉部)
323	7	須恵器	小皿	(8.0)	2.4	(4.1)	灰産(前扉部)
324	7	須恵器	小皿	— 7.9	2.4	3.9	灰産(前扉部)

表1 平松八幡神社窯跡群 出土土器一覽

報告番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土遺構
325	7	須恵器	小皿	8.4	2.4	4.4	灰層
326	7	須恵器	小皿	(8.1)	1.9	(5.5)	灰層
327	7	須恵器	小皿	(9.2)	1.9	(4.9)	灰層
328	7	須恵器	小皿	(8.4)	1.8	(4.9)	灰層(前庭部)
329	7	須恵器	椀	(12.5)	—	—	灰層
330	7	須恵器	椀	(14.3)	4.6	(5.7)	灰層
331	7	須恵器	椀	(14.3)	—	—	灰層
332	7	須恵器	椀	(15.3)	4.4	(6.6)	灰層
333	7	須恵器	椀	(15.6)	(5.1)	—	灰層
334	7	須恵器	椀	(14.6)	4.5	(5.7)	灰層(前庭部)
335	7	須恵器	椀	(14.9)	4.9	(6.2)	灰層
336	7	須恵器	椀	(15.8)	5.2	(5.6)	灰層(前庭部)
337	7	須恵器	椀	15.7	5.1	6.2	灰層
338	7	須恵器	椀	14.6	4.5	6.7	灰層
339	7	須恵器	椀	7.2	4.4	5.5	灰層
340	7	須恵器	椀	15.1	4.9	6.2	灰層(前庭部)
341	7	須恵器	椀	14.9	4.7	6.4	灰層
342	7	須恵器	椀	(15.1)	4.7	(6.2)	灰層(前庭部)
343	7	須恵器	椀	(16.0)	3.9	(6.5)	灰層(前庭部)
344	7	須恵器	椀	(14.4)	5.1	6.5	灰層(前庭部)
345	7	須恵器	椀	(14.5)	4.9	6.0	灰層(前庭部)
346	7	須恵器	椀	14.8	4.4	6.4	灰層(前庭部)
347	7	須恵器	椀	15.7	5.3	5.8	灰層(前庭部)
348	7	須恵器	椀	15.8	5.6	7.2	灰層
349	8	須恵器	鉢	(19.2)	(2.3)	—	灰層
350	8	須恵器	鉢	(14.4)	(5.2)	—	灰層
351	8	須恵器	鉢	(19.4)	(7.8)	(6.8)	灰層
352	8	須恵器	鉢	(17.1)	—	—	灰層
353	8	須恵器	鉢	—	—	—	灰層
354	8	須恵器	鉢	(22.5)	—	—	灰層
355	8	須恵器	鉢	(22.4)	—	—	灰層
356	8	須恵器	鉢	(24.8)	—	—	灰層
357	8	須恵器	鉢	(24.5)	—	—	灰層
358	8	須恵器	鉢	(27.0)	—	—	灰層(前庭部)
359	8	須恵器	鉢	28.7	12.0	11.9	灰層(前庭部)
360	8	須恵器	鉢	(26.4)	10.7	(12.4)	灰層(前庭部)
361	9	須恵器	椀輪(講花台)?	—	—	—	灰層(前庭部)
362	9	須恵器	椀輪(講花台)?	—	—	—	灰層(前庭部)
363	9	須恵器	突帯壺	(17.3)	—	—	灰層
364	9	須恵器	突帯壺	(18.9)	—	—	灰層
365	9	須恵器	壺	—	—	(13.1)	灰層
366	9	須恵器	壺	(16.4)	—	—	灰層
367	9	須恵器	壺	(18.3)	—	—	灰層
368	9	須恵器	壺	—	—	—	灰層
369	9	須恵器	壺	—	—	—	灰層
370	9	須恵器	壺	—	—	—	灰層(前庭部)
371	9	須恵器	壺	(31.5)	—	—	灰層
372	9	須恵器	壺	(31.1)	—	—	灰層

## 4号A窯・B窯

報告番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	出土遺構
401	10	土師器	小皿	8.3	1.5	6.0	4号A窯窯体
402	10	土師器	小皿	8.3	1.2	4.7	4号A窯窯体
403	10	土師器	小皿	8.3	1.5	5	4号A窯窯体
404	10	土師器	小皿	8.5	1.4	5.4	4号A窯窯体
405	10	土師器	小皿	(8.3)	(1.4)	(4.9)	4号A窯窯体
406	10	土師器	小皿	(8.4)	(1.6)	(5.3)	4号A窯窯体
407	10	土師器	小皿	(7.7)	(1.7)	(3.9)	4号A窯窯体
408	10	土師器	小皿	(8.5)	(1.7)	(5.3)	4号A窯窯体
409	10	土師器	小皿	8.6	1.6	5.2	4号A窯窯体
410	10	土師器	小皿	(8.6)	1.6	(5.4)	4号A窯窯体

表1 平松八幡神社窯跡群 出土土器一覽

報告番号	図版番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	出土遺構
411	10	土師器	小皿	(8.6)	(1.6)	(6.0)	4号A窯室体
412	10	土師器	小皿	(6.2)	(1.2)	(5.4)	4号A窯室体
413	10	土師器	小皿	8.7	1.4	5.2	4号A窯室体
414	10	土師器	小皿	(8.7)	(1.4)	(4.8)	4号A窯室体
415	10	土師器	杯	(15.4)	—	—	4号A窯室体
416	10	土師器	杯	(13.6)	(4.3)	(8.0)	4号A窯室体
417	10	土師器	杯	(13.7)	(3.8)	(7.0)	4号A窯室体
418	10	土師器	杯	14.1	3.4	7.0	4号A窯室体
419	10	土師器	杯	13.9	3.4	6.5	4号A窯室体
420	10	土師器	小皿	(8.3)	(1.7)	(5.6)	SX401
421	10	土師器	小皿	(8.8)	(1.5)	(5.9)	SX401
422	10	土師器	小皿	(8.7)	(1.5)	(4.7)	SX401
423	10	土師器	小皿	(8.3)	(1.8)	(4.1)	SX401
424	10	土師器	杯	(14.9)	(3.5)	(8.3)	SX401
425	10	土師器	杯	(14.3)	(4.0)	(7.7)	SX401
426	10	土師器	杯	(14.6)	—	—	SX401
427	10	土師器	杯	(14.7)	—	—	SX401
428	11	須恵器	小皿	(8.8)	2.1	3.7	SX401
429	11	須恵器	小皿	(8.1)	2.0	(4.1)	SX401
430	11	須恵器	小瓶	—	—	(4.4)	SX401
431	11	須恵器	小瓶	—	—	(3.9)	SX401
432	11	須恵器	小瓶	—	(2.0)	(3.1)	SX401
433	11	須恵器	椀	(14.0)	—	—	SX401
434	11	須恵器	椀	(14.4)	—	—	SX401
435	11	須恵器	椀	(15.8)	—	—	SX401
436	11	須恵器	椀	(14.6)	—	—	SX401
437	11	須恵器	椀	(14.5)	—	—	SX401
438	11	須恵器	椀	(14.7)	—	(6.5)	SX401
439	11	須恵器	椀	—	—	(6.4)	SX401
440	11	須恵器	椀	—	—	6.5	SX401
441	11	須恵器	鉢	(17.2)	(6.1)	(7.7)	SX401
442	11	須恵器	鉢	(25.5)	—	—	SX401
443	11	須恵器	鉢	—	—	(10.0)	SX401
444	11	須恵器	突形蓋	—	—	0.0	SX401
445	11	須恵器	突形蓋	—	—	11.5	SX401
446	11	須恵器	壺	(49.7)	—	—	SX401
447	11	土師器	小皿	8.5	1.4	6.0	4号窯室斜面
448	11	土師器	小皿	(9.0)	1.6	(4.2)	4号窯室斜面
449	11	土師器	瓶	(14.4)	—	—	4号窯室斜面
450	11	須恵器	鉢	—	—	(12.4)	4号窯室斜面

表2-1 平松4号墳 出土土器一覧表

報告 番号	種別	器種	法量 (cm)			残存	出土遺構	出土年月日	備考2
			口径	器高	底径				
1	須恵器	杯蓋	14.1	4.5	—	完形	主体部	99/03/16	2とセット
2	須恵器	杯身	12.3	4.5	—	ほぼ完形	主体部	99/03/16	1とセット
3	土師器	埴	(12.9)	5.3	—	ほぼ完形	主体部	99/03/05	
4	土師器	壺	(10.3)	13.6	—	ほぼ完形	主体部	99/03/08	
5	土師器	壺	(10.6)	13.1	—	ほぼ完形	主体部	99/03/05	
6	須恵器	蓋	14.6	—	—	完形	主体部	99/03/08	11とセット
7	須恵器	蓋	15.8	4.3	—	完形	主体部	99/03/05	10とセット
8	須恵器	杯蓋	14.2	4.9	—	完形	主体部	99/03/05	9とセット
9	須恵器	杯身	12.8	4.9	—	完形	主体部	99/03/05	8とセット
10	須恵器	杯身	13.4	4.9	—	ほぼ完形	主体部	99/03/05	7とセット
11	須恵器	杯身	12.8	6	—	ほぼ完形	主体部	99/03/08	6とセット
12	須恵器	杯身	—	(3.7)	—	—	主体部	99/03/08	
13	須恵器	杯蓋	(13.8)	(2.7)	—	—		99/02/12	
14	須恵器	無蓋高杯	(11.7)	(3.0)	—	—	墳丘斜面	99/02/10	
15	須恵器	杯身	(13.7)	(3.9)	—	—		99/02/12	
16	須恵器	杯	—	2.7	7.7	—		99/02/12	

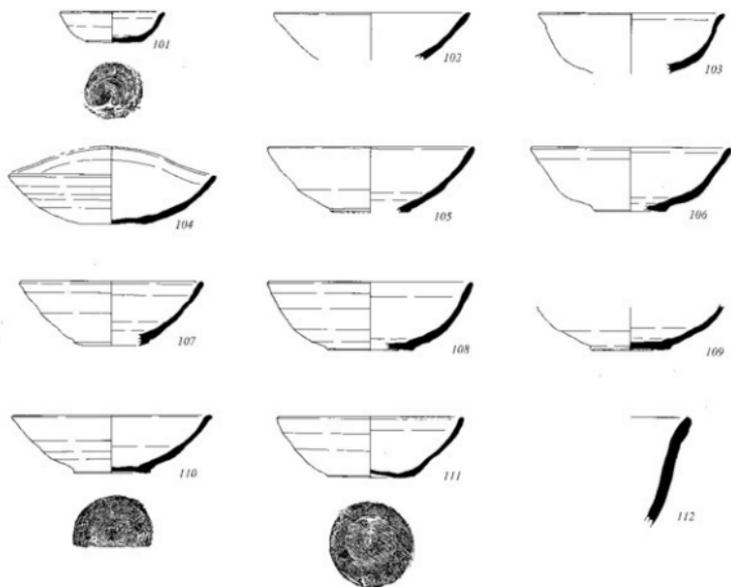
表2-2 平松4号墳 出土金属器一覧表

報告番号	種別	器種	法量 (cm)			残存	出土遺構	出土年月日
			長さ	幅	厚さ			
鉄製品	鞭(馬具)	鉄製品					主体部	99/03/17
鉄製品	馬具(鎧具)	鉄製品	4.9	2.51	1.15		主体部	99/03/17
鉄製品	辻金具の一部	鉄製品	1.7	2.6	1.1		主体部	99/03/17
鉄製品	馬具の一部	鉄製品	2.89	1.42	0.36		主体部	99/03/10
鉄製品	馬具の一部	鉄製品	1.2	1.15	0.52		主体部	99/03/10
鉄製品	辻金具	鉄製品	4.25	5.9	1.7		主体部	99/03/17
鉄製品	辻金具	鉄製品	4.5	5.55	1.5		主体部	99/03/17
鉄製品	辻金具	鉄製品	3.2	5.5	1.25		主体部	99/03/17
鉄製品	刀	鉄製品	30.1	2.75	1.05	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	刀	鉄製品	31.2	2.65	1.7	先端部のみ欠損	主体部	99/03/17
鉄製品	刀	鉄製品	36.25	3.3	2.75	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	16	3.3	0.4	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.65	3.1	0.4	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.7	3.0	0.4	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.3	3.1	0.35	逆轉両方欠	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.9	2.1	0.35	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.55	1.7	0.9		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.35	1.2	0.3	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.2	1.2	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.3	1.15	0.3	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.75	1.05	0.3	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.35	1.15	0.3	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.35	1.15	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.1	1.35	0.3	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.15	1.7	0.7		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	12.85	0.8	0.3	基部先端欠	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.5	1.4	0.47		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.38	2.1	0.48		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.2	1.55	0.6		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	12.8	1.2	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	11.65	1.2	0.3	基部先端欠	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	12.02	1.52	0.38		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	11	1.35	0.32		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	9.45	1.0	0.3	基部欠	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	18	1.4	0.4	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	16	1.25	0.38		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.3	1.45	0.3	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.49	1.23	0.45		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.05	1.1	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.8	1.1	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	17.35	0.95	0.45	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	16.65	1.3	0.4	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	16.45	1.35	0.68		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.7	1.28	0.45		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	16	1.1	0.35	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.6	1.3	0.35	近完形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15	1.1	0.4	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.6	1.55	0.65		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15	1.25	0.4	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	14.75	1.15	0.35	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	13.5	1.25	0.35	変形	主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	10.3	1.15	0.45	基部欠損	主体部	99/03/17
鉄製品	刀子	鉄製品	12.9	1.5	0.4		主体部	99/03/17
鉄製品	鎌	鉄製品	15.5	2.75	0.4	変形	主体部	99/03/17

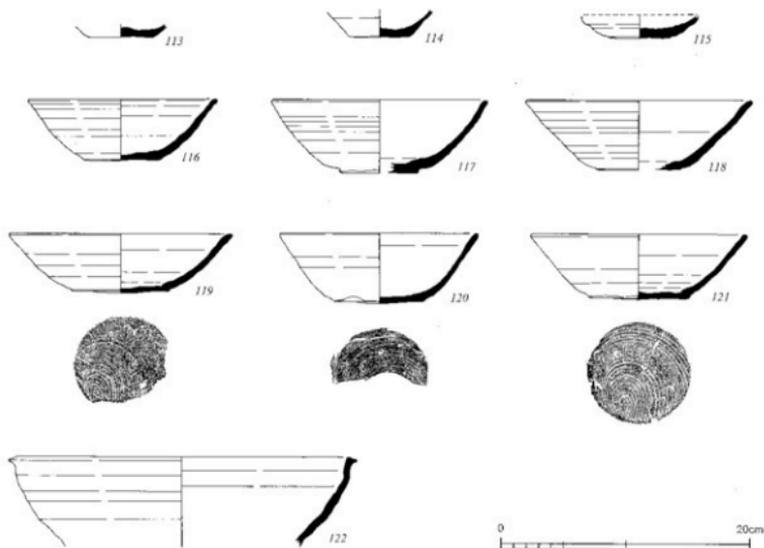
# 遺物凶面

## 平松八幡神社窯跡群

## 1号窯 窯体

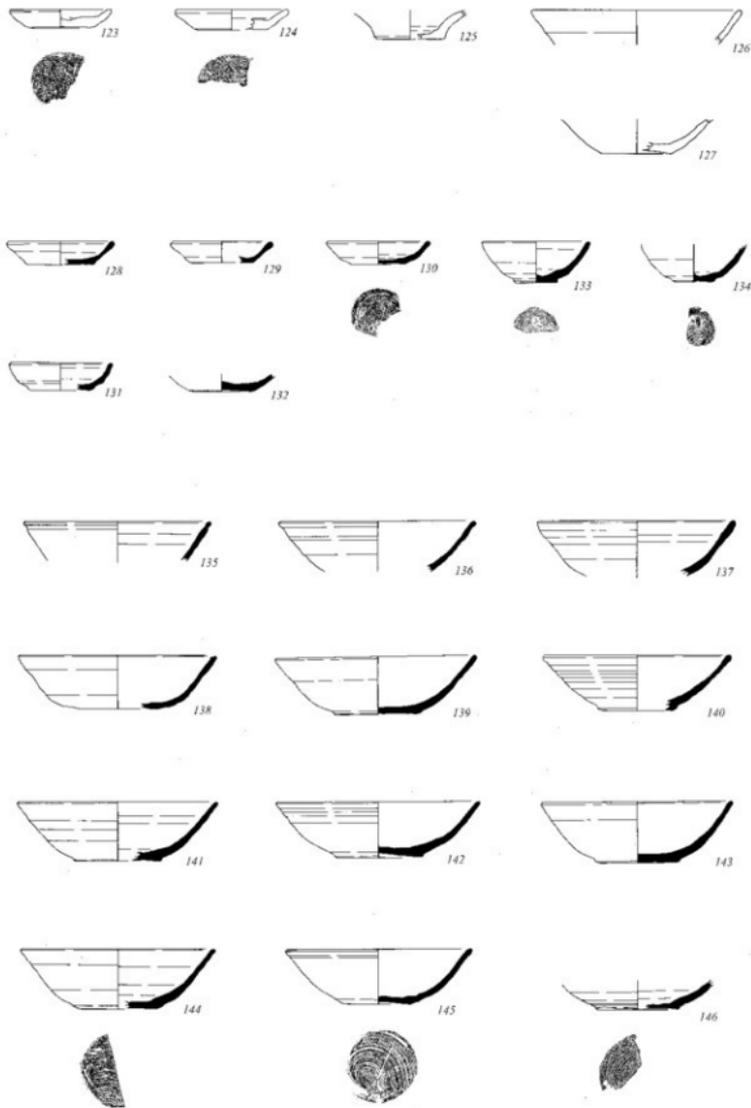


## 6号窯 (1号窯前庭部)



平松八幡神社窯跡群

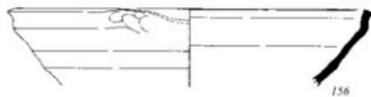
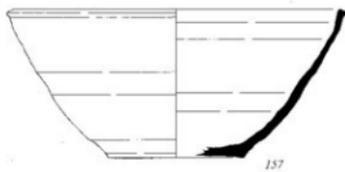
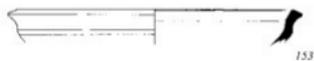
1号窯 灰原



0 20cm

## 平松八幡神社窯跡群

1号窯 灰原



平松八幡神社窯跡群

2号A窯 窯体内



201



205



202



203



206



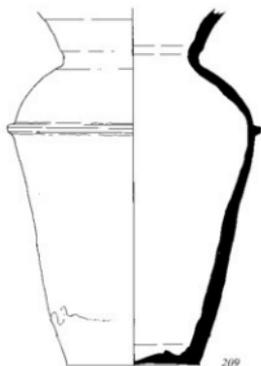
207



204



208



209

SX201



210



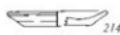
211



212



213



214



215



216



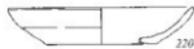
217



218



219



220



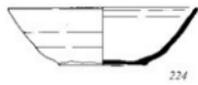
221



222



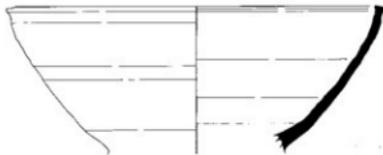
223



224



225



227



226

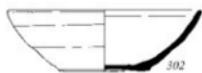
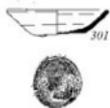


0

20cm

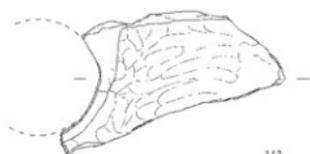
## 平松八幡神社窯跡群

## 3号窯 窯体



平松八幡神社窯跡群

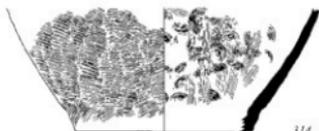
3号窯 窯体



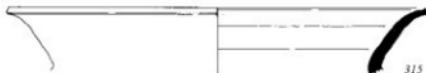
312



313



314



315

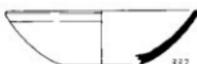
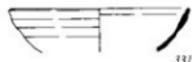
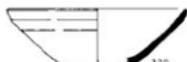


316



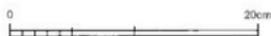
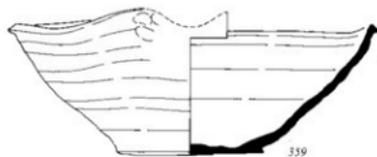
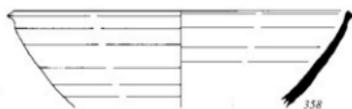
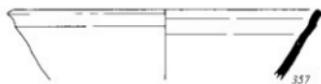
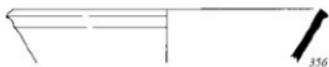
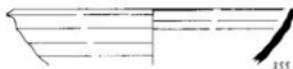
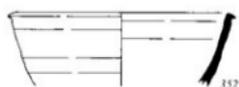
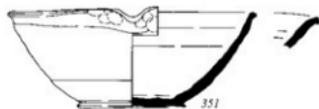
## 平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原



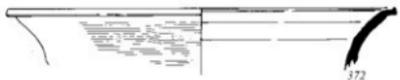
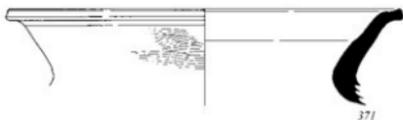
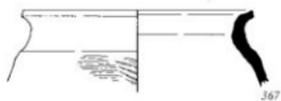
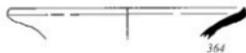
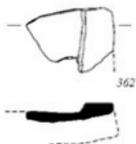
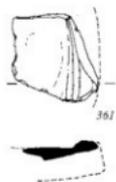
平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原



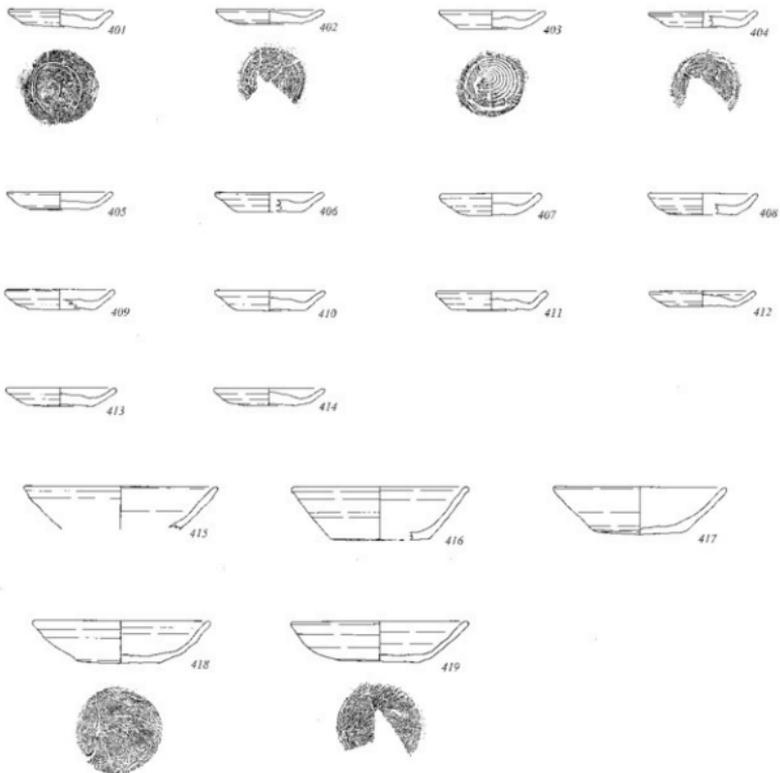
## 平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原

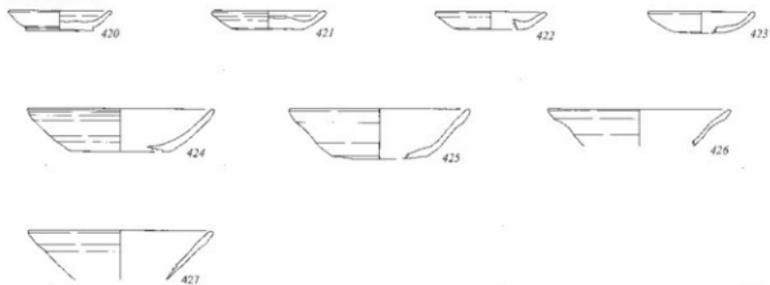


平松八幡神社窯跡群

4号A窯 窯体

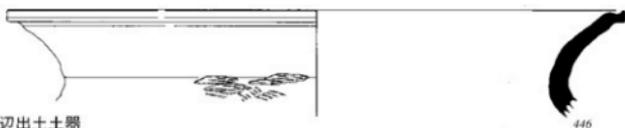
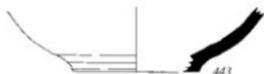
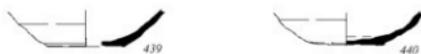
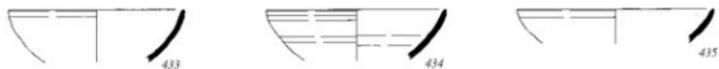


SX401 (4号B窯灰原)

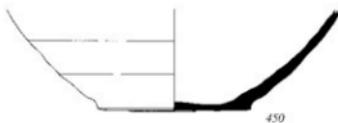


平松八幡神社窯跡群

SX401・4号B窯 灰原

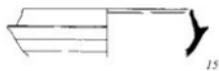
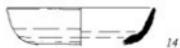
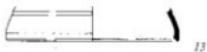
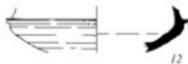
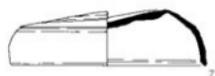
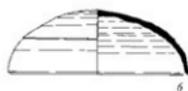
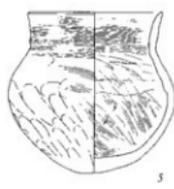
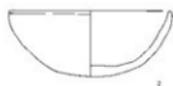
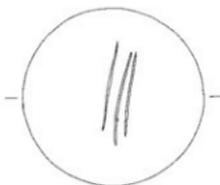
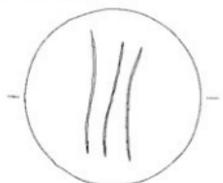


4号A窯周辺出土土器



平松古墳群

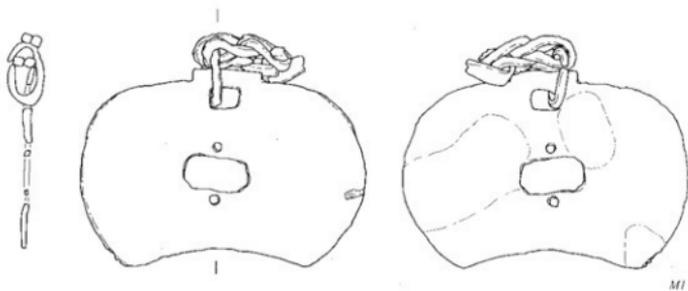
主体部 出土遺物 土器



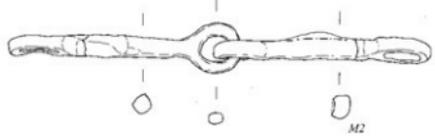
4号墳

平松古墳群

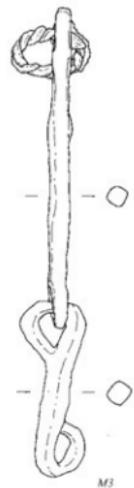
主体部 出土遺物 金属器



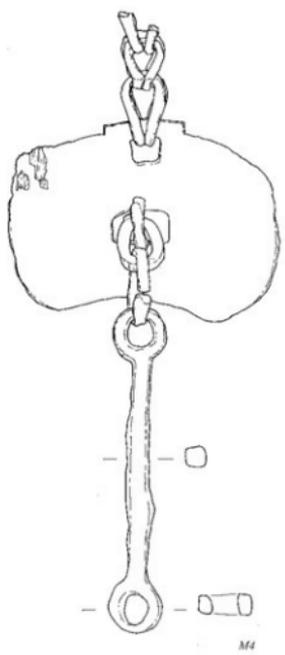
M1



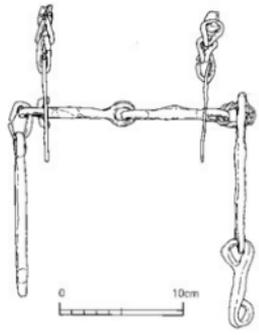
M2



M3



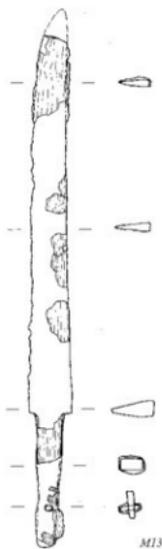
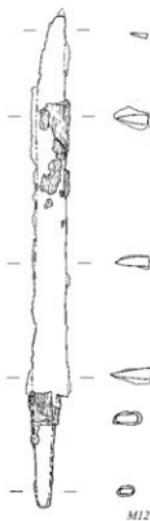
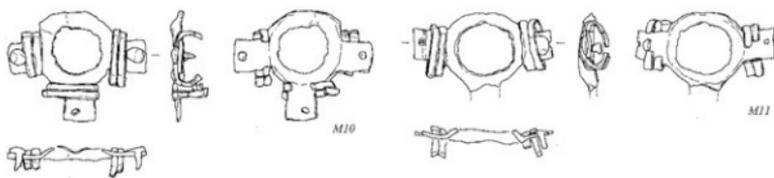
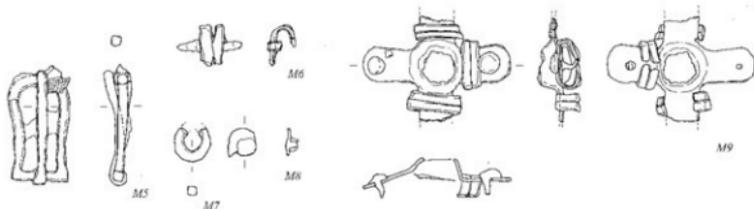
M4



4号墳

平松古墳群

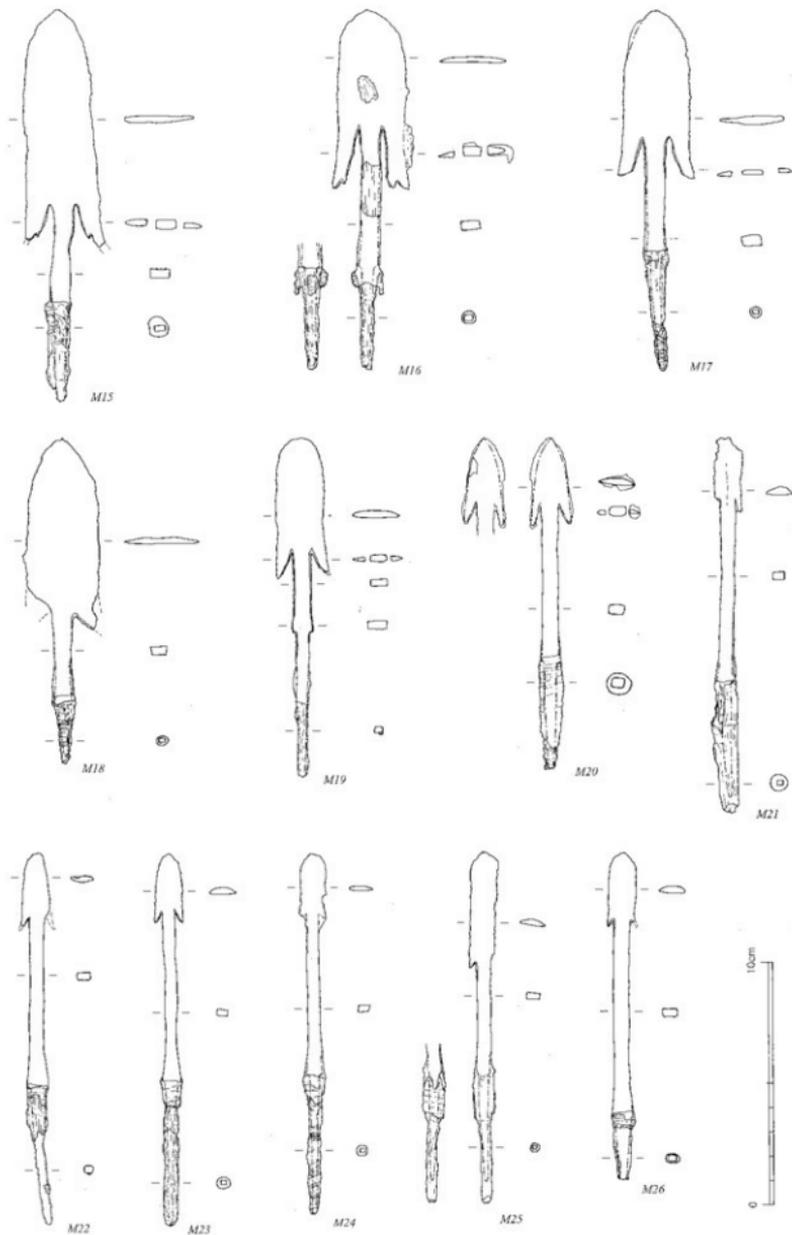
主体部 出土遺物 金属器



4号墳

平松古墳群

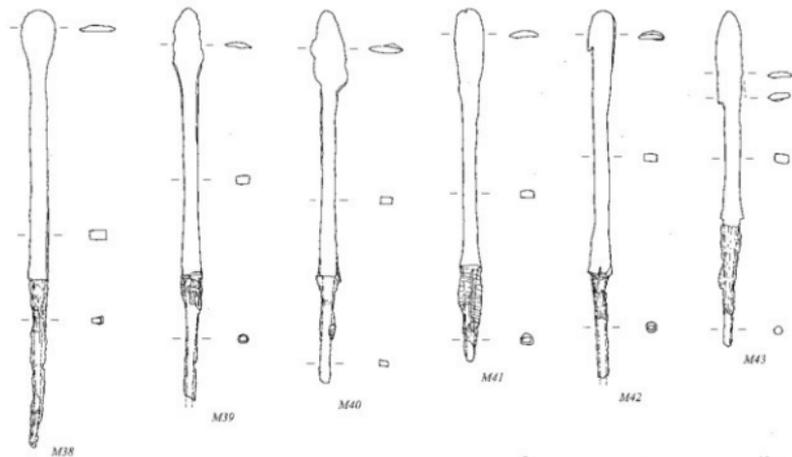
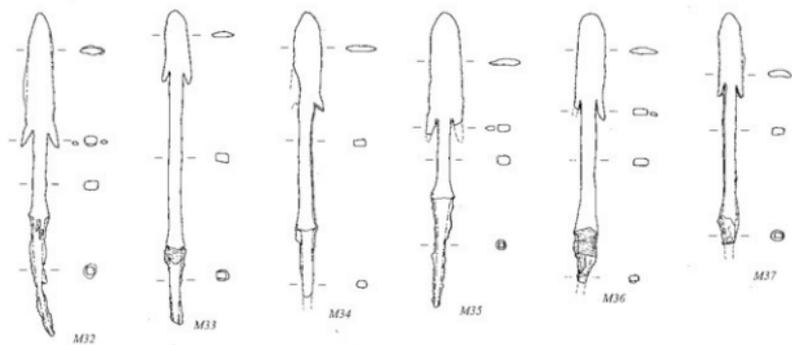
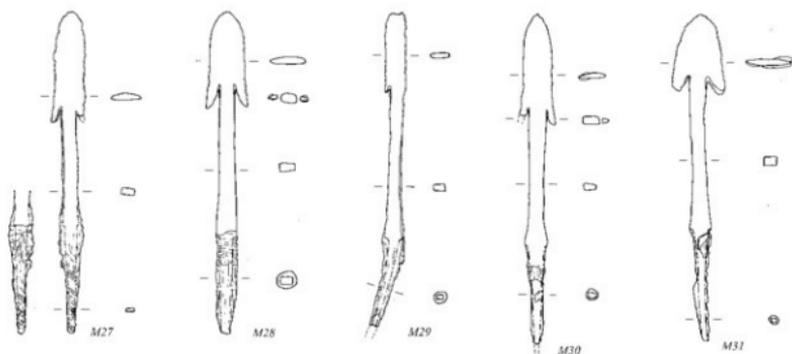
主体部 出土遺物 金属器



4号墳

平松古墳群

主体部 出土遺物 金属器

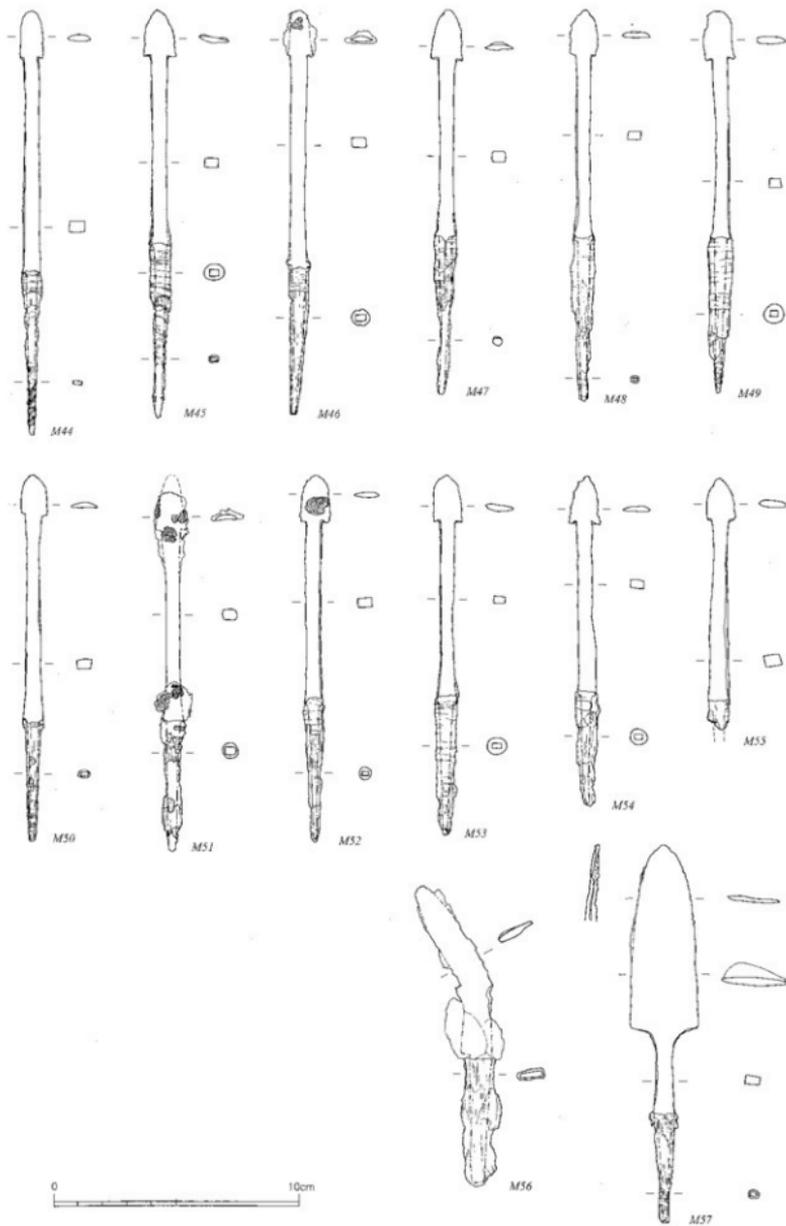


0 10cm

4号墳

平松古墳群

主体部 出土遺物 金属器



4号墳

# 遺構写真図版



平松窯跡群遠景 1



平松窯跡群遠景 2



平松窯跡群全景 1



平松窯跡群全景 2

1号窯・6号窯



1号窯検出状況



1号窯窯体内  
遺物出土状況



1号窯窯体  
縦断セクション

1号窯・6号窯



1号窯前底部（6号窯上層）遺物出土状況



1号窯前底部（6号窯上層）検出状況



1号窯前底部（6号窯上層）横断セクション



1号窯前底部（6号窯上層）遺物除去後



1号窯前底部（6号窯上層）炭層除去後

1号窯・6号窯



6号窯検出状況  
(西から)



6号窯検出状況  
(東から)



1号窯灰原  
縦断セクション  
(南から)

2号A窯・SX201 (2号A・B窯灰原)



2号A窯  
窯体検出断面  
(東から)



2号A窯前底部  
SX201  
検出断面 (西から)



2号A窯・SX201  
完構状況 (北から)

2号A窯



2号A窯 窯体  
横断セクション  
(北から)



2号A窯 窯体  
遺物検出状況  
(北から)



2号A窯 窯体  
完細状況 (北から)

3号窯



3号窯 窯体  
検出状況（東から）



3号窯 窯体  
遺物出土状況（東から）



3号窯 窯体  
完壁状況（東から）

3号窯



3号窯 窯体  
断ち割り状況  
(東から)



3号窯  
還元面除去及び焚口  
赤褐色土断ち割り



焚口左側壁 赤褐色土断ち割り



焚口右側壁 赤褐色土断ち割り

平松八幡神社窯跡群

3号窯



3号窯窯体 縦断セクション（北から）



3号窯窯体 横断セクション（東から）



3号窯床面 断ち割り（A-A'ライン）



3号窯床面 断ち割り（C-C'ライン）



3号窯床面 断ち割り（a-a'ライン）



3号窯床面 断ち割り（a-a'ライン）



3号窯床面 炭化材検出状況（断面）



3号窯床面 炭化材検出状況（還元剥ぎ取り後）

4号A窯



4号A窯  
検出状況1(南から)



4号A窯  
窯体縦断セクション  
(東から)



4号A窯  
縦断セクション  
検出状況(東から)

4号A窯



4号A窯  
中央横断セクション  
窯体内  
石材出土状況1

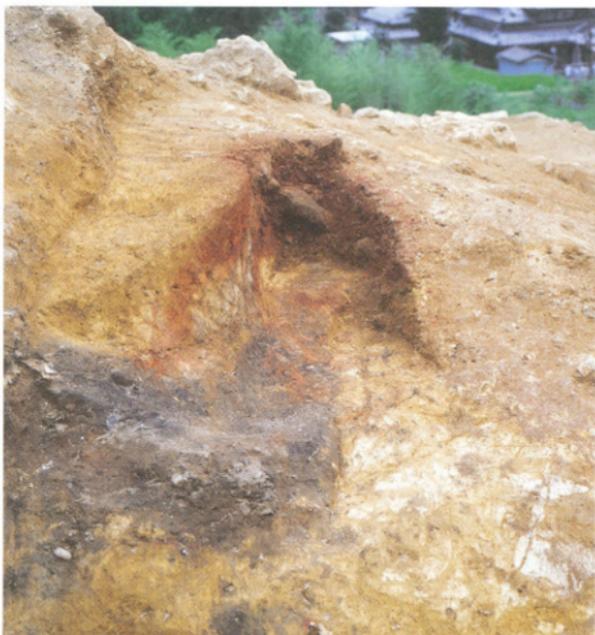


4号A窯  
窯体内（奥壁）  
石材出土状況2  
（南から）



4号A窯  
中央縦断セクション  
石材出土状況3  
（東から）

4号A窯



4号A窯完掘状況1



4号A窯完掘状況2

平松八幡神社窯跡群

4号A窯・SX401（4号B窯灰原）



SX401  
（4号B窯灰原）  
検出状況1（東から）



SX401  
（4号B窯灰原）  
検出状況2（西から）



SX401  
（4号B窯灰原）  
完態状況



平松古墳群調査地点遠景（東から）



平松古墳群調査地点遠景（南西から）



調査地遠景  
(南から)



調査前状況  
(南から)



墳丘検出状況  
(南から)



主体部全景  
(北から)



主体部全景  
(南から)

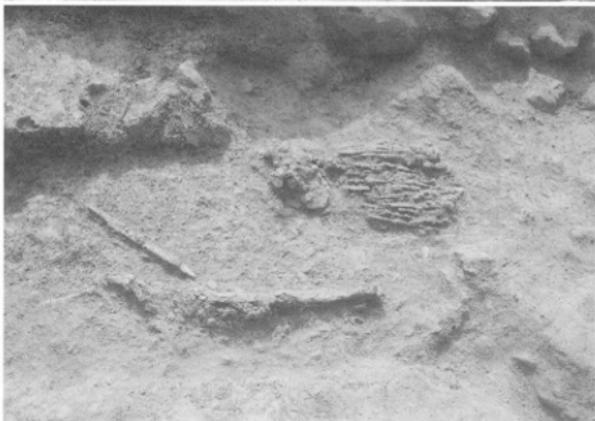
平松古墳群



主体部棺上遺物  
(北から)



主体部棺内遺物  
南小口付近  
(南から)

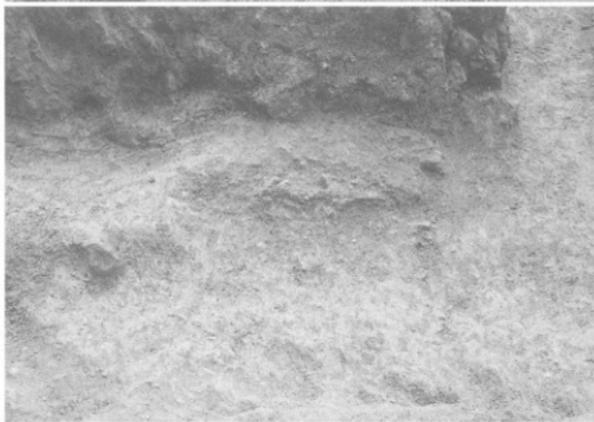


主体部棺内遺物  
南小口付近  
(西から)

主体部棺内遺物  
南小口付近  
(北から)



主体部棺内遺物  
北小口付近  
(西から)



墓坑完標状況  
(南から)



石才大池遺跡



石才大池遺跡 航空写真（北から）



調査全景（東から）



4トレンチ上層（北から）



4トレンチ下層（北から）



4トレンチ下層 土師器出土状況



3トレンチ  
(南から)



6トレンチ  
(南から)



6トレンチ  
SK04 (東から)



6トレンチ  
SK04 断面  
(南から)



SK04 香炉出土状況  
(東から)



SK04 香炉出土  
(東から)

# 遺物写真図版

## 平松八幡神社窯跡群

1号窯・6号窯 窯体



117



118



120



116



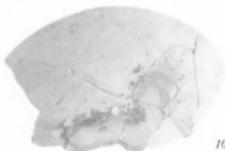
111



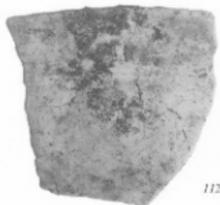
121



101



108



112



110



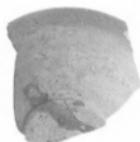
119

平松八幡神社窯跡群

1号窯・6号窯 灰原



112



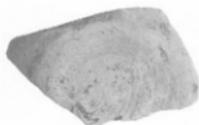
133



134



115



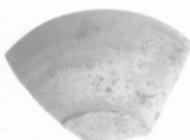
124



123



143



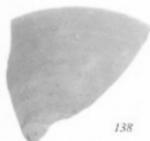
141



149



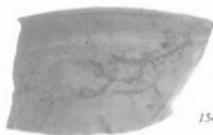
144



138



158



154



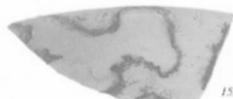
156



155



151



152

平松八幡神社窯跡群

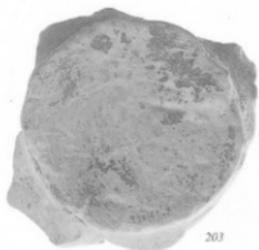
2号窯A窯 窯体内



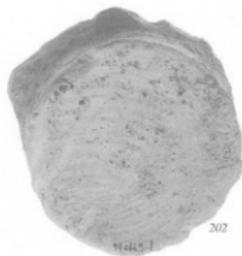
207



208



203



202



209

平松八幡神社窯跡群

SX201



217



219



218



214



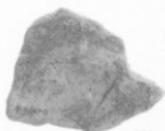
215



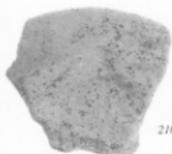
212



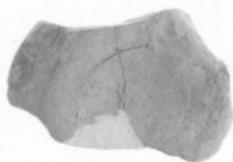
213



220



210



211



225



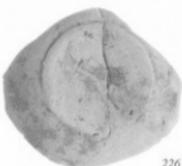
224



227



222



226



223

## 平松八幡神社窯跡群

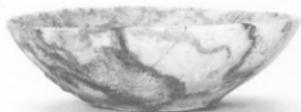
3号窯 窯体



301



307



302



310



308



311



312



362



361



313



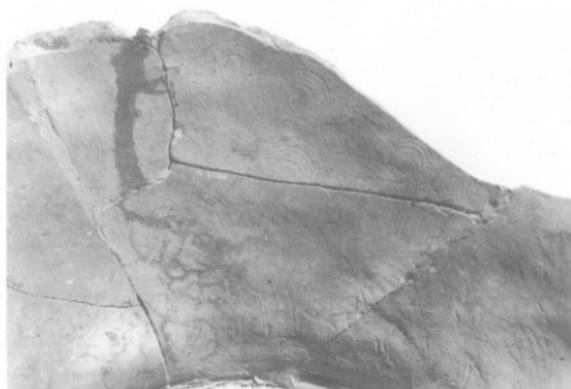
313

平松八幡神社窯跡群

3号窯 窯体



316



314

## 平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原



324



319



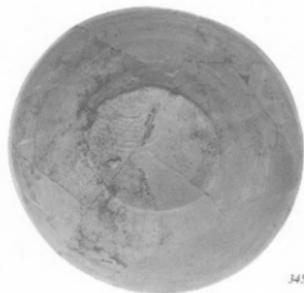
329



322



325



345



341

平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原



338

347



337

339

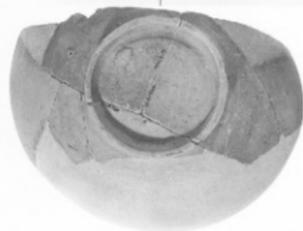


344

346



340

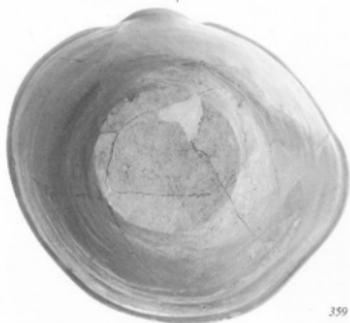


342

348

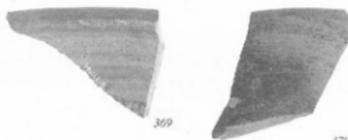
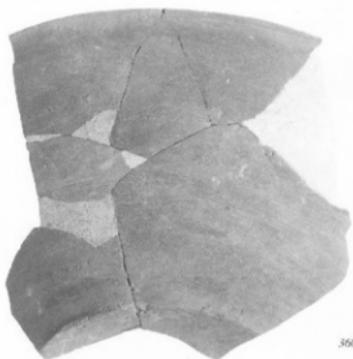
## 平松八幡神社窯跡群

3号窯 灰原



359

351



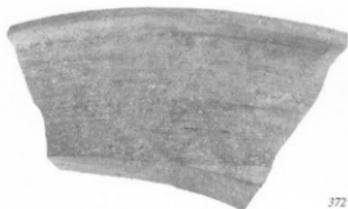
369

370

360



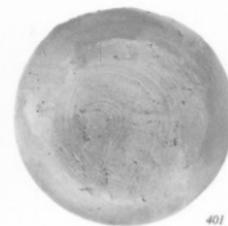
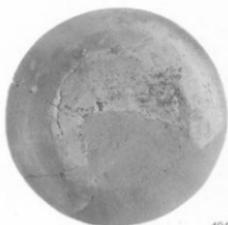
367



372

平松八幡神社窯跡群

4号A窯 窯体



404

401

402



409

412

413



405

407

414



420

405

410



447

411

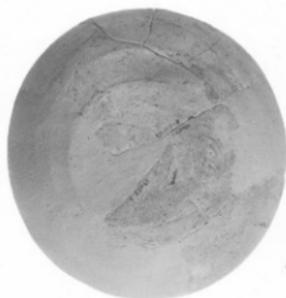
403

## 平松八幡神社窯跡群

4号A窯 窯体・SX401 (4号B窯灰原)



418



419



416



415



427



425



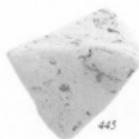
417



424

平松八幡神社窯跡群

1号窯・6号窯 窯体



438

445

444



428



446

平松古墳群

4号墳 主体部



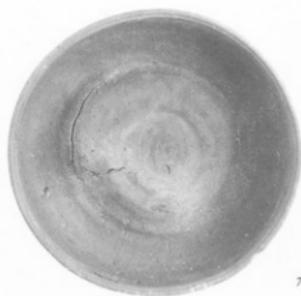
|



8



|



7



|



11



|



10



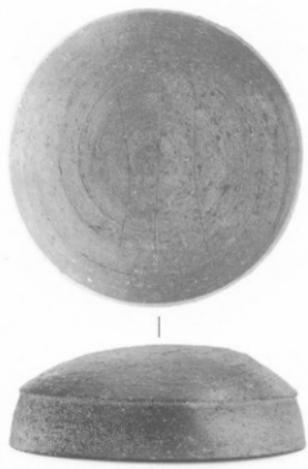
6



9

平松古墳群

4号墳 主体部



4号墳

平松古墳群

4号墳 主体部



M1



M2



M4



M3



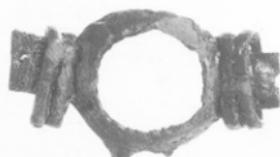
M4



M4

平松古墳群

4号墳 主体部



4号墳

## 平松古墳群

## 4号墳 主体部



M15



M16



M17



M18



M19



M20



M21



M22



M23



M24



M25



M26



M27



M28



M29

平松古墳群

4号墳 主体部



M30

M31

M32

M33

M34

M35

M36

M37



M38

M39

M40

M41

M42

M43

M44

M45

M46

4号墳

## 平松古墳群

## 4号墳 主体部



M47

M48

M49

M50

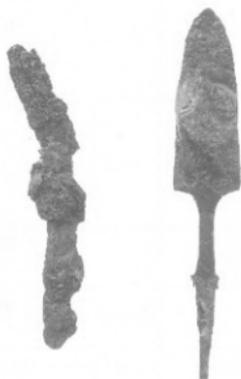
M51

M52

M53

M54

M55



M56

M57

## 報告書抄録

ふりがな	ひらまつはちまんじんじやかまあとぐん ひらまつこふんぐん いしざいおおいけいせき							
書名	平松八幡神社跡群 平松古墳群 石才大池遺跡							
副書名	一般国道483号春日和田山道路1事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第312冊							
編著者名	森内秀造、久保弘幸、中川 渉、鈴木敬二							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL078-531-7011							
発行年月日	西暦2007(平成19)年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
平松八幡神社跡	兵庫県丹波市春日町平松	282236	990003	35度09分51秒	135度05分14秒	1999/6/8 ～ 1999/7/29	1,497 m <sup>2</sup>	一般国道483号春日和田山道路1事業建設に伴う調査
平松古墳群	兵庫県丹波市春日町平松	282236	980169	35度09分50秒	135度05分20秒	1999/2/8 ～ 1999/3/18	388 m <sup>2</sup>	
石才大池遺跡	兵庫県丹波市春日町石才	282236	960100	35度09分57秒	135度04分40秒	1996/6/4 ～ 1996/9/6	148 m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平松八幡神社跡群	窯跡	平安後期	窯跡7基	土器(須志器、土師器)		煙管状窯・須志器窯		
平松古墳群	古墳	古墳時代	古墳1基	土器(須志器) 鉄器(鍬、馬具)		古墳群を構成する6基の内、1基(4号墳)を調査		
石才大池遺跡	集落	中世		土器 金属器				

---

兵庫県文化財調査報告 第312冊

平松八幡神社窯跡群  
平松古墳群  
石才大池遺跡

— 一般国道483号春日和田山道路1事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007(平成19)年3月20日 発行

- 編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL 078-531-7011
- 発行 兵庫県教育委員会  
〒651-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印刷 (株)旭成社  
〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9
-